

青 乘 采 女

香川郡大野村南城の城主にして貞治年間の人。

青 野 重 行

青野重行は三豊郡藤田城主なり。(参照)四國大平記には天正四年土佐元親の此の城攻を青野重行の城主と載せたり、此の地方にても青野民部と云ひ傳へり、或説には青野氏滅びて齋藤氏之れに代れりとも云へり。

阿 刀 大 足

大足は那珂郡の人にして、空海の伯父なり、經史に通ず、博學秀才選ばれて伊豫親王の文學となり采地二千石を阿野那鴨部(カモ)卿に賜はる、空海年十五にして此の人に就きて詩文を學びしと云ふ。讃州府志に弘仁三年阿野郡神谷村神谷神社を勸請せし人とあれば弘仁貞觀頃の人と見ゆ、全讃史に阿野那鴨部莊は大足の莊園にて今傳へ云ふ阿刀氏は佐伯氏の一族にして大師母の父大足大夫は田公の弟なりと。

鮑 浦 信 胤

三郎と稱す、佐々木秀義の後佐々木三郎左衛門鮑浦信胤と云ふ、祖は胤泰始めて鮑浦氏を稱す、建武

の始め備後の福山に據りて足利尊氏に應じ京師を攻めしが延元四年備前兒島を以て南朝に歸順し脇屋義助に従ふ、曆應三年小豆島に來り星ヶ城に營居し正平二年細川師氏に襲撃せられ同島長濱に於て戦死す、墓は同郡安田村植松に在りと云ふ。

合 葉 文 山

名は藁、通稱直次郎、號文山、又桃谷、本は信州上田の人なりしが後年琴平に來住す、田能村竹田に學び花鳥人物に巧なり、性蝶を好み瀑を愛す、因て蝶頭生瀑痴とも號す、安政四年四月十三日歿す、年六十一、落款時文山の二字を筆書す。

合 葉 快 堂

琴平の畫家文山の嗣子にして、初め文岳と號せしが後ち快堂と改む、天保二年に生る、性恬淡、夙に父に學んで北宗の畫を能くせしが後ち畫風を變じて南畫となる、又書に巧にして山水畫を能くす、而して書畫の外詩歌、俳句の道にも通じ常に美馬君田等と往來し、専ら風雅の佳境に遊びて其の一生を終はれりと云ふ、明治二十六年七月二十八日歿す、年六十二。

合 葉 文 齋

通稱虎三郎、號文齋、琴平の人にして快堂の子、畫を初め父に學ぶ、父歿後京都森寬齋の門に入る、學ぶ事三年、寬齋歿す、山元春舉に學ぶ事七年、明治三十七年九月歿す、年二十七。

安積慎之

通稱は基、俳號梅下庵快笑、高松の人にして歌を中村尙輔、俳を芹舎に就いて學び能くす、大正三年一月歿す、年七十二。

寄菊祝 秋ごとに色かえならず咲にほふきは千年の花にぞありける  
巖上松 いはほからいつ生初て松の花

安藤知冬

名は知冬、字は貞卿、通稱滿藏、三野郡上勝間の人、京師に遊び伊藤東涯に學び典故に明かなり、延享四年宇和島侯に召され百五十石を受く、子孫儒臣たり、著書、日本大典十卷あり、天明三年四月十二日歿す、年六十六。

安藤小琴

通稱久兵衛、號小琴、丸龜の人、書畫を能くす、明治初年歿すといふ。

安藤大心

初め萬象後天倪と號す、三豊郡比地村の人、少壯東都に至り昌平黌に學び後又九州に遊び帆足萬里の門に入り學ぶ事數年學成り歸つて伊舎那院の寺主となり、明治二十六年頃八十五六歳にて示寂す、

師は非常な能書家にて弘法大師正傳三十代を繼ぎ五筆和尚と稱せられ、上田樹徳に楷書の傳を授けたりと云ふ。

安藝雲峰

通稱豐藏、號雲峯、寒川郡津田の人安藝榮柱の子、屋號を板屋、畫を圓山應舉に學ぶといふ、遺墨世に稀なり、寛政年中の人。

安西赤松

名は愛、通稱孫四郎、號を赤松、一號謙堂、高松の人、古書畫鑑識に長じ又其收藏に富む、自畫山水竹石氣韻あり、明治九年九月歿す、年六十八。其の著、赤松居書畫圖錄あり。

安西惟明

名は惟明、晩年度齋と號す、高松の人、中村尙輔に歌を學ぶ、砲術挿花を能くす、明治年中歿す。

安西茂

初め茂七後改めて茂と稱す、木田郡氷上村の人、幼より穎悟、理財に長ず、明治六年高木小學校教員より轉じて村長となり、郡會縣會等の議員となり教育、土木、水利、衛生等の事に力を竭す、又郡中の薄資なる秀才に同志と共に費を給して遊學せしむるなど育英事業に意を注ぎ、嘗て日露戰役當時

は公債の募集に盡力せり、奇特の人と云ふべし、大正六年十月廿五日歿す、年六十六。

揚 分潮

名は元徴、字は獻卿、通稱文平、號分潮、又分橋又五峰、又松村、山田郡古高松の人、五山堂詩話に明卿とあり、亦分潮の字なり、畫譜に上野徴とあり亦同人なり、本姓平氏、其の先盛正阿より讚に移り、久保氏と稱す、第六世好清上野氏と改む、分潮更に揚氏とす、分潮は彌七郎の子、少時三都に遊び栗山洪園等と交る、書畫を能くす、黒竹尤も妙なり、天保六年閏七月歿す、年七十一。

揚 弘齋

名は維馨、字は子徳、號靜居、後ち改名世晋、字子明、號弘齋、通稱初め辰之助後改稱晋十郎又小四郎、分潮の子、初め東岐に學び又三冬に學ぶ、後ち大阪にて熊谷直好に従ふ、詩歌及古器鑑定を能くす、房號對栗山房と云ふ、文久二年七月歿す、年五十五。清痴樵歌は詩冊にて東岐題文あり。

明石 巖根

名は巖根、高松藩士、歌茶を能くす、晩年専ら茶を楽しむ、大正二年十一月廿八日歿す、年七十四。寄早苗祝、大御田に注連引きはへて豊けくも秋の頼みと取る早苗哉。

有岡 通恒

名は通恒、通稱清八、香川郡勅使の人、和歌を能くす、寛政元年西行六百年追善集に其の歌十七首入り。

有岡 千言

名は千言、通稱隆三、舍號百不足舍、香川郡宮脇の人、堀秀成に従ひ、國語音義を受け又歌を能くす、田村神社禰宜、後高松高等女學校教諭となる、明治四十年三月歿す、年五十。著書假名遣捷徑表あり、朝川を涉れば袖もかをるなり此風上や梅の花園

有房 正詳

通稱巖二、諱は正詳、號富草舎由種、文政九年西讃上高瀬村に生る、柳川雄八郎の次男にして竹堂の伯父なり、那珂郡苗田村(現今仲多度郡象郷村)有房政八に養はれ有房氏を嗣ぐ、夙に秋山惟恭の門に入り國文學を修む、三土梅堂黒木茂矩等と同窓たり、日柳燕石、奈良松莊等に知遇せられ時に時事を談す、最も和歌に長じ社中西讃に玉露園秋光東讃に棗園打磨あり、大阪に雪之門春見、江戸に春友亭梅秀、仙臺に千柳亭綾彦等と氣脈を通じ、置郵の制なき時代に於て全國各地に社中あり、定期通信の道を開き斯道の往復頻繁なり、江戸檜垣連春友亭の編輯せる月次和歌集發行後三十日を要して、吾が讃岐に着するを例とす、當時其の敏速なるに一驚を喫したりき、側ら俳句を作り茶を圍み茶道に通じ生花の妙技を得たり、慶應三年丁卯八月廿八日病歿す、享年四十二。嗣子梅三郎現時琴平町に寓し、印刷業に従事す。

有馬胤滋、軒原庄藏

寒川郡富田村大字富田中太田免數十町歩は同村羽鹿池掛なりしが水利不便のため旱災多し、時に里正有馬之を憂へ文政八年より四ヶ年の日子を費して掛井手を經營し、數千町歩の水利を便せんとす、然れども延長長きため洩水多し、この時軒原庄藏之を憂ひ、安政年間古大池の源泉より三ツ石山溪に至る山底を鑿つ事百五十間、晝夜三年の工事を經營して遂にその目的を達するを得たり。邑人今に之を徳とす。

淺井奉政

名は奉政、享保年間高松侯に仕ふ、日本事纂百二十卷を著す、文化十四年九月加茂季鷹之に跋す、曰高松侯文學淺井奉政著、云々、有徳大君徵藏文庫とあり、承應三年淺井富爲醫者と某書に見ゆ、同家なるべし。

淺田平次

名は保暎、通稱平次又七右衛門、高松藩士、書及詩歌を能くす、寺社奉行又考信閣出仕、慶應二年歿す、年五十餘。

栗津晴嵐  
いそちかきまつの嵐にきりはれてあはつに舟もあらはれにける

淺野海自閑

名は保武、通稱覺兵衛、號自閑又醉樵、高松の人、歌俳花茶を能くし、筆樂に長ず、安政四年閏五月歿す、年六十八。安政六年片山恬齋其の像に讚す。

秋山忠諦

高松の人、和歌を能くす、嘉永頃の人。

二 本 杉  
昔より其の名も高くきこえ來てなほいく千代かふたもとのすぎ

秋山惟恭

名は惟恭、字は仲禮、幼名浪江後改稱伊豆、號巖山、晩年如瓶とも號す、舍號千別舎、秋山相摸の子那珂郡櫛無神官たり、初め牧東渚に學び後備中小寺楢園に従ひ、又頼山陽の門に入り日本外史稿本を寫して歸る、學和漢を兼ね詩歌及書を能くす、文久三年四月十日歿す、年五十七、墓銘山田梅村撰す短冊に巖とのみ署するもあり。縣史に號巖山とあるは巖山の誤なり。著書、讚岐神社考、讚岐小史、帝統蒙求、讀新論、西讚府史（此は京極高朗の命を受け編輯せしものにて全部六十一卷よりなり、實に當時の大著述なりと云ふべし）。

綾井武夫

武夫は綾歌郡羽床下村宮武龜三郎の子なりしが十五歳の時、親族なる坂出町の綾井忠吉郎の養子となる、幼時山本謙藏につき漢學を修め、明治十二年二十歳の時上京し慶應義塾に學び業成り歸りて縣會議員に選出され、爾來政界に身を投じ、明治二十一年大同團結に加盟し、後藤伯に隨つて東北を遊説し雄辯家の聞あり、又大隈伯條約改正案に對して其の名益々顯はる、後香川縣會議員同副議長等に選ばる、二十三年縣の第三區より選ばれ衆議院議員となり、爾來屢々當選し第十一議會解散後之を罷め東京に於て殖産に従事せしが大正五年八月二十一日歿す、年五十六。氏頗る遊獵を好み斯道の權威と稱せらる。

綾野義賢

本姓は香西と稱し高松藩士なり、天保七年綾野と改む、通稱彌八郎、諱は正笏と云ひ藩の勘定奉行を勤め高松藩の事蹟に通じ、其れ等の記事を纏めて紫縁齋自備と號し數百卷の筆記及び高松藩記の著あり、明治二十四年五月二十七日歿す、年七十二。

荒井正親

名は正親、明治年間綾北の人、筆道に熱心なり。筆意、難波津は心を寫す増鏡うつる筆意は聖ならむ明治四十三年十二月久世通禧(意誠心正)の題辭を得て筆意要訣上卷を出版せり。

荒川栗園

名は英政、字は德卿、通稱潤吉郎、號栗園、琴平の人、詩を三井雪航に、畫を大原東野に學ぶ、日柳燕石と親み、又京攝諸名家と交る、嘉永頃隱岐國に至り子弟を教授す、勤王を唱ふ、安政五年、郷里琴平に歸り歿す、年三十九。詩文若干卷あり、英政は央政とも書けるものあり。

荒川樟庵

通稱幸平、號樟庵、栗洞展觀錄に見ゆ、象頭山下の人、詩書を能くす明治三年四月歿す、年六十三。

荒木雲溪

名は養通、通稱養三、號雲溪又友竹、庵號巢松庵、舍號白雲舍、高松の人、畫を戸祭雪湖に學び山水四君子を寫す、尤も風韻あり、明治三十八年五月歿す、年八十。

蘆澤加山

通稱水之助、號加山、諱は長卿、字は子績、本姓玉井氏、芦澤家を嗣ぐ、高松藩老臣勤務の餘暇に四君子山水畫及歌を能くす、明治十九年五月二十五日歿す、年八十四。

蘆澤蘆香

讀人各辭書 ア之部

號蘆香、加山の妻(台女)なり、亦書を能くす、明治十二年五月二十一日歿す、年七十餘歳。

蘆澤元徴

平馬と稱す、高松の人、軍學に通じ兼て歌を能くす、萬延頃の人。

蘆澤元善

伊織と稱す、高松藩執政、明治元年正月十六日家老となり伊平と改む、同月十八日陳情の爲め姫路に  
使す、明治二年十月二十八日高松藩權大參事となる、明治十年歿す。

蘆澤蘭處

名は元布、通稱水澄、號蘭處又蘆洲、高松の人、書を竹處に學ぶ、又篆刻を能くす、明治十一年五月  
歿す、年四十二。

赤井東海

東海は高松藩士十郎左衛門直道の子、母は内田氏なり、名は綱、字は士巽、小字秀之助後巖三と改む、  
別に東海と號す、軀幹雄偉少より武を好み十字槍を善くす、年甫めて弱冠家を弟吉兵衛に譲り古賀精  
里に昌平費に従ひ力學五年、嘗て咯血を患ふ、衆醫之を危む東海意とせず、戯れて稗史を著し以て自  
ら遣る、坊間中井履軒の名を冒して刻する所の昔々春秋なるもの其の一也、精里嘗て餉汁を諸生に與

ふ、東海食はず、精里惟み問ふ、對へて曰く東海生れて武門に長じ酒を嗜みて甘きを忌むと、精里憤  
然語らず然れども此より東海を待つこと厚きを加ふと云ふ、文化癸酉年費を辭してト居教授す東海時  
に二十有五、文政十二年藩侯召して十口俵を賜ひ世子に侍讀せしむ、爾後屢々祿を加へ秩を陞せ遂に  
使番に班し米百石を賜ふ、文久二年十一月十四日病て歿す、享年七十有六、谷中妙福寺先塋の次に葬  
る(附記) 東海は定府なりしも萬延年頃一度歸國して今の上笠居の藥師寺に寓せし事ありしと同地古  
老の談なり又寺井榭屋とは非常に親しかりしと  
(事實文編)

赤松喜内

小豆郡安田村の人、名は利和、其の先は赤松則村の後裔右兵衛尉家吉にして延徳年間(今を去ること  
大凡四百餘年前)播州より本村に移住せしものなり元姓岡田を唱へ、近世赤松に改む、家世々里正た  
り。常に尊皇敬神の志厚く人に教ゆるに大義名分を以てす、往昔吾か星ヶ城に據り南朝に盡して孤軍  
奮闘終に噎れし佐々木三郎信胤の爲めに碑を同村植松に建て、之れを崇敬し千載の下奉公の念を振起  
せしむ、後ち京都に上り聖護院の宮に仕へしが、文化四年四月二十七日同地に歿す、利和の妻は立入  
彈正大忠の女にしてオウキと云ふ。皇漢の學に通じ和歌を能くし兼ねて書に巧なり、八坂神社境内な  
る天満宮の額面に其の水草の跡を遺せり、嗣子藤太夫利安父の志を繼ぎて亦信胤の廟を尊ひ、祭祀懈  
怠なきを以て京都庭田大納言より引見且つ優遇の榮に接す、蓋し庭田家は佐々木氏の祖家たるを以て  
なり。  
(小豆郡史)

赤松 椋園

名は範園、通稱渡と稱し高松藩侍醫渡邊立齋(號松窩)の子なり、氏の時に至り本姓赤松に復す、幼より學を好み長じて詩文を冲堂に學んで克くす、又武道に志し尤も鎗術に長ず、壯より各地を周遊し文武を研鑽し兼て吏務の才あり、維新の際高松藩の少参事に任ぜられ釐革する處多し、後ち會計検査院に仕へ明治二十二年高松に市制を布かる、や推されて、初期の市長となり市の發展に盡くす處あり、後博物館主事となり又香川縣の囑託を受け縣史を編纂せり、業成るの後閑雲野鶴を友として悠遊自適し吟咏に耽り、關西詩壇の老將たりしが大正四年五月廿九日俄然劇烈なる心臟病に冒され、終に黃泉の客となれり、享年七十六。著書、付一笑居詩集、蕉竹書寮詩稿、先朝私記、萍水相逢、日本政記撮解。

父の代迄は元姓渡邊なりしが祖先是赤松則祐より出でしとて、椋園の代に至り本姓赤松に復したり。七十四生日有作(大二、十二、四)百歲匆々一瞬間。蓋棺可定有無功。遺經未報老人惠。七十四年猶夢中天保庚子十月九日、余始生也。先人有詩云、麗熊有兆舉男兒。來試啼聲知是誰。唯結阿嬢懷裡夢。一經遺汝定何時。

椋園先生遺愛之碑大正六年五月友人植田倬の選文にて高松市大本寺内に建てられたり。

赤澤 龍江

名は龍江、初め通稱龍之助、高松の人、歌は友安三冬門人、本は俳句を爲せり、明治三十三年歿す、

年七十一。園會に棗園打丸とあるは龍江の事なり。瓦町の家に大棗樹あるに因る。

赤澤 古行

古行は庵號朝顔庵、文化文政年間の俳人、琴彈山下の人といふ、讃岐名所園會に俳句若干載せられたり、高松愛宕にて、涼しさは京のあたりに譲られず。

赤澤 宗四

名は宗四、颯々庵と號す、高松の人なり、文化十年七月十三日西濱に生る、少にして茶道を好み詩歌を能くす、京都に遊ぶ茶道を千宗守に受け又津山侯に受く明治維新の後ち居を東京市谷山伏町に設く士女教導の同好同好の爲め樂性磊落凡そ都人に指導さる、明治十四年五月三十日病を以て歿す、年六十九。

春風にふりくる花をともしれば  
山吹ゆきかと袖を拂ひけるかな

赤松 清兵衛

號を道順、陶器創業者彌右衛門の嫡男にして其の性剛膽磊落にして人望あり、村の争に大に助力なしたり父の意志に據り父の生前屈ひ入れたる筑前賀治屋郡末村權平なる名工によりて陶工術を會得

なしたり、父の死後四谷の子と共に日夜研究なし、唐津焼を盛に製作なしたり、正徳辛卯元年生れ、天明丑元年十一月二十三日七十一才にて死去す。

### 赤松伊助

號を松山と稱ひ、初代目清兵衛の嫡男にして字は田夫松山と號す、其の性剛膽書畫を好みて能くなしたり然れども其の書き殘せしもの甚だ少し父清兵衛在世中松林、入谷兩名の弟と共に其の陶業に従ひ父清兵衛死後其の遺業を繼ぎ盛に製作したり其の後天明辛丑年十二月二十九日不幸出火にて全焼に逢ひ後ち富田村なる藩公の窯跡にて唐津焼取立仰付けられ焼出し其の後同地の龜田屋恒藏と共に燒き後ち寛政酉三年恒藏と分離し寛政戌三年五月又右の窯跡にて獨立し、寛政辰年筑前賀治屋郡末村權平孫權助を雇ひ入れ松林、入山兩名の弟子と手傳ひたり(此の當時の作品を世に富田焼として愛玩せらる)其の後志度浦に歸りて家督を息宇吉に譲りて樂焼をも初めたり時に享和三年なり、富田の銘あるは松山寛政年間富田にて製作せしものなり又唯松山造とあるは勿論此の人の作品なり。寛政八辰年居を高松城下に移す其の後又香川郡宮脇村に移る、元文己未四年生る、文政四年七月十日八十三才死去す。

### 赤松宇吉

房崎屋號を魯仙、三代目伊助の嫡子にして湘江齊通稱宇吉と云ふ、性磊落にして愛嬌に富み大に人受善ろしかりき父の業を繼ぎて樂焼を專一に營み餘暇に茶道を學び宗匠の資格を得又書畫俳句も好み又易學にも通じたりき、其の後ち尾形御殿に出入し高松藩士大久保飛彈と交り時の藩主より度々御用仰付

けられ後ち松平秋儀襄公の御召により來高し中の村に寓居藩主は勿論諸家中の茶花道具の御用を蒙り尙御用命中松平家大福の祝儀として毎年正月元旦の式あり其の際當家の製作せる大福茶碗を御使用せられ是非大晦日九ツ時迄には必ず上納致す例なりしなり尙來高の節藩公より郷東御殿山を拜領せり志度より引越し來高せしは文化の頃なり此の時代には扶持の幾何か頂戴居れり、房崎屋と改號せしは文化年間高松に移りてよりなり、藩士大久保飛彈天保九年七月七日死去、其の翌年よりは毎年馨徳院即ち飛彈が當日には必ず暑中も厭はず佛生山寺の參拜せしは自己の死去間際まで續けたり。安政元年生る天保十一年八月二十五日七十才にて死去す。

### 赤松陶濱

名は虞、字は農夫通稱猪太郎、號初め陶涯後陶濱又石水又讀畫堂屋號房崎屋高松の人、千吉の子陶工世に其の器を陶濱焼と云ふ書は馬嶺に學び山水蘭竹を能くす、明治元年八月歿す、年五十九。

### 赤松大同行

丹生村土居の生れにして父を谷口清七といへり、世々三本松勝覺寺の門徒なりしが世にも名高き信者にして一生涯無慾、妻を娶らず高西に意行し多くの人々を諭せり其の言ふ所質朴ありのまゝにしてしかも能く御法義に適ひ實に有難き同行なりしが明治四年三月四日享年七十三歳を一期として往生の素懐を遂げたり、法名釋正眞信士と云ふ其の同行有志相謀りて丹生村字小砂説教所に墓標を建てたり名



赤澤融海

は亮雅、號は靜臥、法名を融海、天保四年四月大川郡三本松に生る、幼より穎悟にして漢學を同村白井節翁に佛敎を阿波の靈潭勸學に受け、餘技として詩畫歌俳を能くす、後ち勝覺寺二十世住職となり中僧正に進み尤も興正寺派本山の爲めに盡瘁す、後ち洗心校を設け宗敎々育に努むる處あり、明治二十八年一月二日示寂す、年六十三。

阿比野安太郎

諱は善信、通稱安太郎、文化九年鶴足郡宇多津村に生る、世々郷士たり、幼より學を好み長ずるに及んで武技を能くす、尊攘の説起るや密かに同志を糾合し、己れが賣藥を製造し各地の浪人をして行商に扮して派遣し、天下の英偉に締交せしむ、遂に藩吏の知るところとなり、藩外(阿波)に放逐さる、三年の後高松藩士長谷川宗右衛門の分疏救護により歸國を得たりしも猶福江村里正の家に監禁さる、後赦されて我家に歸へり旅舎を營み志士を寄寓す、終始勤王の志を屈せず計劃するところありしも、文久元年九月歿す、年四十九。

阿溪

號は三隱又阿溪山人、山田郡牟禮六萬寺住僧、後備中宮内普賢院に移る、歌及畫を能くす、明治八年七月寂す、年五十九。

草も木もなへて枯野の冬されにまつの緑のかはらざりけり

阿部良山

名は世良、字は良平、號は良山堂、山田郡六條村由良山下の人、篆刻の技名高し、細川林谷の師なり、銅印を作る甚だ多し、又墨竹に妙なり、浪華に寓す、文政四年四月二十日大阪に歿す、年四十九。人物傳に高松人とあれど、本山田郡六條の人、號良山は其の近地由良山に取る、著書、良山堂印譜等あり。

阿部家の祖先は安倍の仲丸に出て其の末孫清秀なる者天正年間讃岐の那賀郡に來住し、其の長孫光信なる者三木郡小養村に徙り農となり、其の子重信なる者が正保二年に山田郡六條村に轉住せしより以來世々六條村に住せしなり、而して良山の父嘉藤太が文化元年浪華に移り阿波橋に居住し商業に従事す良山も從つて浪華に引越せしなれば絹州は同地で生れしならん。

阿部絹洲(鎌洲)

名は濶、字は伯玉、通稱初め信次郎、後ち良平、號を絹州介庵、片痴、玉倚、良山堂と號す、寛政五年九月十八日生る、良山の長男、母は葛西氏、浪華西横堀に住す、篆刻及詩書畫を能くす、畫は墨竹佳なり、樓碧山人詩集の奥付に阿信甫、世雙校とあり此人ならん、絹州の書きしものに安倍濶撰と署せしものあり、是は祖先が安倍仲丸であるから其の姓に倣ふたものなり、又堂號は父と同じく何れも良山堂と云ひしなり、著書、良山堂茶話、隨筆、芥子圖畫傳概鎌洲印塵、詩集等あり、文化十三年棲

碧山人百絶の序をかけり、文久二年二月十五日歿す、年七十歳。

### 阿部 鹿城

名は岱、通稱泰藏、號を鹿城良山の次男畫山水を能くす、畫譜に號を阿岱とあり、阿は姓の一字岱は泰藏より出でしならむ、天保三年十月十日歿す、年三十八。

### 阿部 竹

良山の男、清節と號す、幼より學を好み、夙に大阪に行きて南岳其の他に就き學び詩文を能くす、明治十五年頃の人、高松外磨屋町に住せり。

### 雨森 三哲

名は明卿、字は子哲、號天水、三哲を以て行はる、幼より學を好み僧となり、元祿九年高松節公に召され江戸に居り、又惠公に用ゐられ侍讀となり高松に住す、享保七年六月二日歿す、年五十六。墓は万日にあり、題旨廟前梅、寥郭靈宮梅曆新。逆推八百有餘春。世間誰有知幽者。延喜聖朝維再辰。三哲逸事(藍窓茶話)侍醫なり兼て儒學に達せしかば、菊池舍人とかはるん、節公の御前にて講釋しける。節公曰く舍人が講釋は時を正し、日を正し席を正し、服を正して事むつかし其の方が講釋は左にあらす、心安くしてよきとありければ三哲承り、舍人は儒者にて侍り臣は醫者にて侍りもし、地を易は皆然らんと申上しかは節公尤も同じ玉ひけるとぞ、三哲は講釋の名人也かつて江戸聖堂にて講釋

しけるに、貴賤群集し老婆など涙をながし珠數かけておがみし故、世には三哲が珠數切講釋といひしとかや。

### 青井 多門

通稱を多門、明和頃の高松の人、齋門姓名録にあり、漢學者なり。

### 青井 水雄

名是水雄、木田郡東植田の神官、性篤實、歌を能くす、明治年中歿す、年七十餘。寄松祝、常磐なる松に伴ふ君なれば千代の齡は疑ひもなし。

### 青山 石泉

名は樵、字は雲隣、通稱を孫兵衛、號を石泉、高松の人、畫を竹石に學び、山水人物を能くす、文政二年八月歿す、年五十。

### 青葉 士弘

名は士弘、字は道遠、號を南洲、初め名を直年、通稱を辨之助、改稱して傳兵衛、父直行、母松山氏、元祿十六年七月生る、享保八年江戸聖堂入學、十一年高松藩儒となり、元文二年中寄合、延享四年記録所總裁、明和八年致仕、安永元年三月十六日歿す、年七十。墓は西法寺に在り、儒學青葉士弘字道

遠之墓と題せり、生前自筆と傳ふ、其の家本は房州に住す、青葉加賀守重之の裔なり、寛永中高松に來る、年十三より根本彌右衛門に、十五より雨森三哲に就き後ち林鳳岡に従ふ、又易を室鳩巢に受く、紫珠堂は其の堂號なり芝山記文を作れり、巽適軒は其軒號、栗林二十詠(六十八歳の時の自作)に著せり、又岡長洲集に、葉文學翠竹樓とあり、其の樓號なり、芝山も翠竹樓詩あり、所在は一番丁なり、青葉氏後七番丁に移る、致仕詩、白識生年七十稀。眸昏齒墮與心遠。主恩已許辭官去。猶荷光榮臥翠微。著書、きそちの記二冊、雜窓私言一冊、帝王紀略三冊、訓蒙要術一冊等あり。

士弘逸、事  
青葉傳兵衛士弘と云ふは懷公御代よりの儒臣なり、子孫其の業を傳ふ。書を好くし詩も多し、鳩巢に易の傳乾を受けたるよし、聖堂へ入塾の時に寮の庭に梧桐を植えて、後に業就つて此の梧桐大樹となりしかば琴に製して今にその家により。  
百尺澹潭碧渺漫。龍龍頭下夜光寒。十第辛苦頭將白。何日掌中帶咲看。  
得意の作なるよし。  
(藍窓茶話)

青葉 半山

名は養浩、通稱を權左衛門、字は和言、號初め紫峰後半山、士弘の嫡子、高松藩儒、明和八年中寄合、兼記録所總裁、寛政元年講道館總裁、七年八月十一日歿す、墓に半山之墓とあり、亦生前自筆と傳ふ、寛政二年由良神社遷塚碑文は半山の撰文なり。

青葉 好徳

名は好徳、通稱を傳兵衛、幼名を辨之助、半山の嫡子、寛政七年中寄合、享和三年講道館總裁、文政八年解職、府志に青葉恵とあり同人なり、恵は徳にて好徳の略なり。

青葉 訥齋

名は慎、通稱初め三藏後傳右衛門、號を訥齋又雪山、好徳の養子、實父は宮武八郎右衛門清行二男なり文化二年三月恵養爲子、文化十五年講道館指南、天保五年同館引請、十一年十二月廿五日歿す、新秋雨後、雨後秋風梧葉飛。涉園樹色濕人衣。牽牛花密殊濃艶。知是新涼露未晞。子を強と云ふ、池田墓村の母の兄なり。

青葉 強

慎の嫡子、初め清八、安政六年末十二月十六日更めて傳兵衛、嘉永六年寅十月十七日命勤政廳及講道館講釋、元治元年子正月十一日拜講坐次中寄合上、明治三年午十月二十三日爲學校上等教授(同十二月廿三日爲漢學小教授)

鮎川 一雄

名は一雄、通稱を傳八、丸龜の人、燕石の友人にして勤王を説く、四條派の著色花卉蟲鳥を描き能く

す尙武道にも達せり、明治二年歿す、年五十七。

秋篠忍光

高松市大護寺住職中僧正秋篠忍光師は去る三月四日遷化あらせらる、同師は碩學博識にして諸種に秀で殊に四國新報の創立に當りては援助を玉はり師の遷化は獨り一山のみならず、宗教界の爲めに惜まれてゐる。

揚小三郎

硯堂と號す、木田郡古高松村より高松市に出で外磨屋町に寓す、年八十才。趙子昂を學び氣品ある作品を出す、關西の大茶人たることは周知の所なり、令息亦雅人なり。

有岡盾一

翠香と號す、高松市中新町の人なり、年四十七才。始め京都市今尾景年氏に師事し後ち菊池芳文の塾に入門、現在高松和洋高等女學校に奉職す、門弟多し。

安達將總

東大獨法科卒、現在は大阪市理事保健部長、大阪市住吉區濱口町三九三に寓す。

安藤一雄

東大應化科を卒業し、現在九州帝國大學教授たり、福岡市渡邊通五丁目北川端に寓居す。

青賢治

早大英文科を卒業し、現在岡山縣立新見高等女學校長たり、岡山縣阿哲郡新見町新見に寓す。

秋山襄

東大獨法科を卒、辯護士、渡邊倉庫取締役外會社重役たり、東京市小石川區駕籠町一五一に寓す。

有馬忠三郎

京大獨法科を卒業、法學博士、辯護士、東京帝大農學科講師、東京市東郷區西通町一〇に寓す。

有馬長次郎

京大醫科、朝鮮總督部郡山醫學部に在り、朝鮮金北郡山府錦山一五に現住す。

空吹民義

號は竹雲、高松市二番丁の出身にして仲多度郡多度津町に現住す、年四十六才。明治四十二年警察界

に入り本縣各地の署長を歴任、昭和四年現住所の署長となり三井飯山畫伯と交遊有り氏の畫道を敬慕し遂に筆を弄するに至る、警察界に視る畫家なり氏の作品多く筆致と詩文共に巧妙なり、香川三石先生に詩文を學ぶ。

### 安藤家隆

號は天籟、(字を士興別に六々齊)三豊郡常磐村の人なり、年五十三才。老藤園松琴樓と稱す、目下地方の爲め公務に盡瘁す、性謹直にして繪畫の筆妙を得、力作多し、早稲田大學法科出身にして詩を三木梅堂に學び、書は楷行、畫は山水花鳥をよくす、漢學は菊池晚香氏(三九郎)につき師事す。

### 山崎

### 青

### 安藤

## サ之部

(魚主の子)

### 讃岐朝臣高作及時雄

高作は寒川郡の人にして性學を好み、其の族時雄と共に大學に遊び、父永直に従つて法律を學ぶ、貞觀の初高作は散位從五位上に叙せられ、時雄は右大史正六位上に拜す、貞觀四年同族時人と共に姓和氣朝臣を賜ふ。

### 讃岐公永直

三代實錄は永直は本姓讃岐公神櫛王に出づ、寒川郡の人なり、幼にして大學に入り律令に通ず、性聰明にして一たび聽て暗誦せり、弘仁六年明法得業士兼但馬權様たり、天長七年明法博士右小史に至り尋て左小史に移り勘解由判官を兼ね、承和元年正月外從五位下に叙せられ同三年姓朝臣を賜ふ、俄に出雲介を兼ね又兼阿波權様になる、嘉祥元年和氣朝臣齋之大不敬を犯す、永直此の事に坐り佐渡に流さる、文徳天皇踐祚の明年赦に遇て本位に復し明法博士たり、老て骸骨を乞ふこと再三猶明法博士を免さずして歸休せしむ、帝其の耄たるを惜み玉ひ諸生をして里第に就て律令の善説を受けしむ、永直私第に閑臥して生徒に教授す、式部省其の門庭に就て講竟の禮を行ふ、法家は榮とす、初官吏たり

しより勘解由の次官を歴任し判決の道頗る其の旨を究む、嘗て源敏久額田今人等刑法難義數十事を抄出して唐に問んとす永直之を聞て詳に其の義を解く累年の凝滞一時に永釋す、遺唐の問是に因て止むと云ふ、貞觀四年八月十七日卒す、壽八十。長子時人父の業を傳へて姓を和氣朝臣と改む、少女、光孝天皇の更衣たり源皇子舊髮を生めり。

令義解は十卷より成り、讃岐永直等十二名のもが淳和天皇の天長三年より十年にかけて編したるのなり。

佐婆部首牛養

牛養は延暦頃の讃岐の人にして、桓武天皇の時大學博士たり、寒川郡岡田村に住す、後ち姓を岡田と賜ふ。(岡田臣牛養を見よ)

- 佐伯直田公 佐伯直鈴伎磨 佐伯直酒磨 佐伯直魚主
- 佐伯直貞持(鈴伎磨子) 佐伯直貞繼 佐伯直葛野
- 佐伯直豊雄(酒磨の子) 佐伯直豊守 佐伯直粟氏
- (魚主の子)

三代實錄に貞觀三年十一月十一日辛巳讃岐國多度郡の人、故佐伯直鈴伎磨呂、故正六位上佐伯直酒磨呂、故正七位下佐伯直魚主、鈴伎磨呂男從六位上佐伯直貞持、大初位下佐伯直貞繼、從七位下佐伯直

葛野、酒麻呂男書博士正六位上佐伯直豊雄、從六位上佐伯直豊守、魚主男從八位上佐伯直粟氏等十一人、佐伯宿禰のを姓賜ひ、即ち左京職に隸す、是より先き正三位行中納言兼民部卿皇太后宮大夫伴宿禰善男奏して言へらく、書博士正六位下佐伯直豊雄歎して曰く、先祖大伴健日連公景行天皇の御代倭武尊に隨ひ東國を平定して功勳世を蓋ふ、讃岐國を賜ひて以て私宅となす。健日連公の子、健持大連公子室屋大連公の第一男御物宿禰の胤、倭故連公、允恭天皇の御世始めて讃岐の國造に任す、倭故連公是れ豊雄等の別祖なり、孝徳天皇の世國造の號永く停止に從ひ同族玄蕃頭從五位下佐伯宿禰直持、正六位の上、佐伯宿禰正雄等既に京兆に貫し、姓宿禰を賜ふ、而して田公の門猶未だ預るを得ず、謹んで案内を檢するに直持正雄等の興る、只實惠道雄兩大法師等に由る、贈僧正空海大法師の成長するところなり。而して田公是れ大僧正の父なり。今大僧都傳燈大法師位眞雅幸に時來に屬し久しや加護に持す、彼の兩師に比し忽ち高下を知る、豊雄又彫蟲の小藝を以て學館の末員を忝ふす、往時を願望するに悲歎良多し、正雄等の例に准じ特に姓を改め居を改むるを蒙る。善男等謹んで家記を檢す、事虛に憑らず之れに従ふ云々。

佐伯直繼、佐伯直長人

佐伯直繼は珂那郡の人なり、同姓なる長人と共に朝廷に仕へ、敬位藏人頭に任ぜらる、承和三年本居を改めて左京六條坊に貫す。

佐伯直豊雄



文明の頃左馬允元家といへるあり、文明元年山田寒川の二郡の民事ありて相争ふ、是により三谷景久と怨を結び同年九月二十九日夜景久窃に兵を起して來り襲ひ火を放つて退き去る。左馬允怒りて三谷氏を撃んとす、細川政元固く制してやむ、回二年十一月十九日左馬允兵を起して三谷城に押し寄せ火を放つて攻め戦ふ景久拒む事を得ず逃れて王佐山に入る、左馬允軍を移して王佐山を圍む利あらずして退く、永正六年大内義興に従ひ京師に至る、同九年伊豫の能島家より西洋に一の小島あり、近頃明人此島に逃れ來り明の商船を招き和漢の賣買して國都の如し、是を攻め得る時は大に我國の利ならんと大内氏に勸む、是に因て大内義興寒川氏に命じて是を取らしむ、左馬允香西安富などと相謀り兵船二十餘艘を整へ引田の浦より發して備後國鞆に渡り能島院島などに通じ西蕃に赴き、彼島に押寄せしに通事を出して懇ろに和を乞ひ元家頗る利を得て歸る、此時我船の兵具を備へたるを見て洋中にて行遇たる異船怯れざる者なし、我船皆八幡宮の三字を章とせり、異邦の人我國の船を八幡船と云ふ事此時に始ると云ふ、永正五年十二月元家石田神社を再營す。

元 政

元政は元家の子なり、初め太郎と稱す、元政十河右京進とよからず屢々相攻戦す、十河氏は是を阿波の三好筑前入道に告て兵を乞ふ三好氏千餘人を率て十河氏を援けて元政を攻めんとす、元政兵を津柳に伏て敵の來るを伺ふ、三好氏の兵三好郡より津柳に入る、元政地理を心得ぬれば敵の後へ廻り前後挟み撃みて大に是を破る、阿波の兵破れ走りて植田の城に入る、元政後の難を慮り婦女嬰兒を晝夜虎丸の二城にこめ置き壯士を選びて要地を守らしむ、香山川城守、香西豊前守など此事を聞き寒川氏を援けんと用意しければ阿波の軍戦はずして退く、此の戦は大永六年十二月四日の出來事にして寒川氏の

右衛門、神前雅樂助と云ひ前後の先鋒として武勇を顯はし首級を得る事若干也、天文元年七月寒川元政と十河一存と長尾東玉田に於て戦ふ、當時十河氏は數百人に將として寒川氏を長尾城に襲はむとせしかば神内左衛門精兵五十人を以て邀へ撃つ、左衛門遂に一存に殺さる。細川晴元勝瑞にありて此事を聞き一書を送りて和平せしむ、かくて十河氏とは和平すれど安富氏昔年の遺恨や忘れざりけん、天文九年正月二十日安富氏寒川郡七郷に入り同四年二十六日合戦に及び、寒川氏兵士盡く討死し殘卒本城を燒き晝寢の城に入り守り戦ふ事三年に及び、天正三年九月十九日晝寢城近邊の樹木を伐り盡すとあれば城を開て他へ移りしならんかと傳へらる。

元 隣

元隣は元政の子なり、通記政國に作る丹後守と稱す、虎丸に居る、元龜三年安富筑前守阿波の篠原人道紫雲が女を納めて妻とす、因つて紫雲へ言ひ入れけるは阿波より此地に通ふに大内の一郡中に隔たり甚だ便りよからず其上我諸城主多くは阿波に親好の縁あるに寒川氏獨りさる縁もなければ變を生せん事を慮られず、願くば此郡を屋形より所望し給はば阿讃同一國の如くならんと紫雲此由を屋形長治へ謀りければ、即て使を遣はし大内郡を所望す寒川氏否といへば攻滅せされんとす勢なれば止む事を得ず、大内郡四郷及攀山、虎丸の二城を附て屋形へ送り其身は晝寢に築いて同所に引退く、而して程なく篠原氏も不慮の變に遭ひ、安富氏も天正三年九月阿波の海部左近の來り攻むるに及び城遂に陥りたれば其後三好存保の許へ行き勝瑞の城に居りしが天正十年八月廿七日三好存保の軍と合し、阿州中富川に於て兵二百五十人を三手にして土軍と交戦し遂に同處にて名譽の戦死を遂げたり。



寒川光永(光長)

光永は淨慶と號す、次郎と稱す、寒川丹後守の弟にして晝寝の城主なりしが天正三年阿州海部左近に攻められ敗れて兄の許に居りしが兄阿州に於て戰歿の後浪々の身となり光陰を過ごし、生駒時代となりて一正召して祿を與へんとせしも陪臣たるを恥ぢて仕へず薙髮して淨慶と號す、其舊臣に額孫右衛門と云ふ者あり、香川郡中間郷に移り農を業とす乃ち淨慶を迎へ父事す、正保二年十一月二十日歿す、壽八十餘才。

辭世 老の浪八十才なりき彼岸へ御法の舟に棹をさす哉

寒川長俊

長俊は右馬允繼俊の父にして世々寒川郡を領す因つて寒川を氏とす、文明二年九月寶藏院を氏寺となす、文明十二年十一月十七日安富氏と長尾東村の尾崎に戦ひ歿す、因て寶藏院住僧圓の瑜引導を與へ長尾東村尾崎原に葬りしと云ふ、圓瑜は明應六年二月十一日歿す。

寒川繼俊

右馬允と稱す、寒川元隣の一族にして繼俊と稱し長俊の第二子なり、大川郡茶臼山の城主、年代文明より大永頃、永正九年五月十貫文を寶藏院に寄附し西國追討を祈る。

寒川左馬入道常隣

寒川氏の一族にして左馬允元恒と稱す、初め寒川郡神前下村に一城を築き(常隣城と名く)居れり、後長尾池田城に移り居たり、土人此城を豪ヶ岡山と云ふ。天正三年二月長尾郷鹽木に於て安富の軍と戦ひ互に殺傷あり、俗に此を鹽木合戦と云ふ。

寒川七郎

七郎は元隣の子なり、天正十四年十二月秀吉の命を受け九州島津征討軍に参加し豊後戸次川に於て苦戦せしも身命を全ふして歸りたり。

寒川參河守

寒川丹後守の子孫なり、其子を權之丞と云ふ、天正十年八月二十八日七佐元親の軍に加はり十河存保を攻めし時阿州中富川にて戦死す。

佐藤與左衛門

與左衛門は寒川郡鴨部下庄村小方寺山の城主、蓋し寒川氏の部將にして天正前後の人ならん。

佐藤志摩介

佐藤家は本姓宮脇なりしが故ありて佐藤に改む、香川郡伏石村豊紋洞の城主にして香西氏の部將なり

城址は太田村伏石にあり、永祿十一年九月香西氏兒島を征するに當り其派遣軍中に佐藤某二十騎とあり、此人ならんか。

志摩介は親立石、伏石、流石を吾が村に築く故に居石とも云ふ。初め名を居石五郎兵衛と云ひ伏石城主にして香西氏の元老なり後彦左衛門と改め、其後軍務を男掃頭助に委ね今の栗林公園に隠居し道益と號す、此人は元龜頃より寛永の初め頃迄存命せしものと知らる、其事蹟左の如し。

天正四年香西家を代表して敬意を表する爲め使者として京都に至り信長に謁す、其時香西家よりは備前元重の太刀を献ず、信長大に悦び厚く饗應され南部産の名馬を賜る、即ち引き歸つて香西の厩に入る諸人大に悦びしと云ふ。其他土佐元親が香西へ攻入りし時又香西家が長尾へ引上げる時等始終香西家の爲に盡力せり後秀吉の命を受け島津征討軍にも参加し又生駒時代に至つても子掃頭と俱に民政上に盡す處多大にして今の栗林公園の基礎を起せし人なり、然らば當市の恩人と云ふべし。

### 左藤孫七郎

孫七郎は太田城主居石五郎兵衛が一男にして後の佐藤掃頭助が舎兄なり、香西氏の部將にして兼て勇猛の聞へあり、諸所の戦に武功を顯はせしが天正十年八月五日土佐軍香西へ進入の時西光寺前の先鋒を爲し同日本津小畑にて戦死せり、蓋し若死ならん。

### 左藤掃頭助

掃頭助は彦左衛門の子にして孫七郎の弟なり、兄早く戦死せしかば父を助けて各地に出戦し後生駒家

に仕へ民政を主宰し治績多し、其大要左の如し。

天正十三年五月香西を引揚げ長尾へ移る時の謀議に興りし人、爾後の事跡左の如し天正十四年十二月秀吉の命を受け九州島津征討軍に参加し、豊後戸次川に於て苦戦せしも身命を全して歸りたり。天正十五年八月生駒正規に祿二千石を以て召抱へられ。生駒正規讃州の主と成て國中の仕置は掃頭に申附けられ、其法制正しく貢物所當の役夫等甲乙なく執行し玉へば國民親附す。此人は法華信者なりしと見へ慶長七年本覺寺(北古馬場町にあり)を創立せり。香川郡上笠居村にある山林三百餘町歩の確證(元和五年五月二十一日付)署名人中に佐藤彦左衛門及掃頭あり。然らば同地方の爲には恩人と云ふべし、かく生駒家の爲に忠勤を盡くしむたりしも正俊の代に至り、彼の奸臣前野氏等の計に陥り半浪の身となりしも其後本多中書へ召抱へられたり。

### 佐藤幣無太夫

文治年間屋島の役香川郡安原東谷の城主、吉廣兵庫頭同村平尾神社の神官を従ふ、偶佐藤駒信の馬病む神官之を祈りしに直に癒ゆ、時に軍中幣無くして祈りし故義經より姓名を賜ひ、佐藤幣無太夫と云ふ、爾來其の家世々今に至るまで佐藤幣無と稱せり。(縣史)

### 佐野久兵衛

木田郡井戸村柏木にありし二條城の城主なり、蓋し安富氏の部下にして年代は天正以前の人ならん。(附記) 讃岐府志には本文の通りなれど名勝圖會には佐久間六兵衛とあり、異名同人ならん。

### 財田 和泉常久

財田和泉常久は善兵衛と稱す、三豊郡財田村財田城主にして天正頃の人。  
 (参照) 財田城に居たり、天正六年土佐元親兵五千人を以て之れを攻む、城兵三百人防戦す、常久土佐の土横山源兵衛なるもの爲に殺さる、城中に秋山主水なるものあり、常久の首を敵に得させじと挑み合ひ源兵衛を殺す、時に源兵衛の子、年甫めて十八父の殺されしを聞き、大聲に呼んで曰く父の仇は俱に天を戴かずと追つて之れを撃ち、竟に主水を斬り其首を携へ歸る、軍中その勇を稱す、城陥る後元親の部將中内藤左衛門騎士等卒數百名を率ひ來りて此城を成る、天正十三年豊公四國を征服するに及んで中内氏城を棄て、土佐に歸りたりと云ふ。

### 齋藤 行長

庄左衛門(庄兵衛)と稱す、香西氏の部將にして居址は香川郡鷺田村沖にあり、年代は天正前後ならん  
 齋藤下總守師郷

三豊郡藤目城の城主なり、齋藤氏は本加州の人なりしが先代信國と云ふ人讃岐に來り一万三千石を此地にて領せしと、因て羽上山の麓に白山權現を勧請せりと云ふ。  
 (参照) 藤目城は丸井粟井二村の間にあり、山高三十六間齋藤下總守師郷之居城なり師郷阿州大西上野介と婚姻を爲し長會我部元親に服従し、其孫を質として大西氏に遣はす、奈良氏、三好氏に告げ

て之を伐たんとし、天正六年香川民部少輔、長尾大隅、羽床伊豆等と共に兵六千餘人を率ひ來り此城を攻む、師郷死守する能はず城を棄て、大西氏に之く、奈良氏之を新目彈正に與へ精兵五百人を以て成らしむ、是歳土佐元親五千人を以て之を攻む、城兵殆死して戦ひ皆戦歿す、師郷復此の城に入る是れ土佐の師讚岐に入るの始めなり。  
 一説此の城攻めを天正四年のこととす、四國大平記には齋藤下總守のこと見えす、(青野重行の條參照)

### 三枝 保年

名は保年、通稱松太郎、香川郡由佐村に住す、本は小豆島の人、馬嶺に花鳥人物を學び、又京人某に佛畫を學ぶ、明治二十二年歿す、年七十五。

### 三枝 重太郎

小豆郡土庄町の人、天保十二年五月二十八日本町に生る、資性溫雅、多年縣會議員、村會議員、村長等の公職に勤めて公共に盡せり、年僅に八九歳の頃より俳句に巧にして往々人を驚すことあり、十八歳にして斯道の大家京都芹舎宗匠に従ひ、熱心教を受けて頗る上達し俳名を竹亭節水と號し宗匠となりて名聲各地に聞ゆ、遠近教を乞ふもの其數を知らず性多藝にして團扇淨瑠璃等の如き亦地方に於て一頭地を抜きたり、大正三年一月二十七日歿す、年七十四。  
 (小豆郡史)

辭世 南無大師遍照金剛春の旅

三枝忠次郎

忠次郎氏は小豆郡土庄町の産導園翁の仲子たり、五竹と號す、爲入質直にして信義を重んず少にして高松に遊び山川孫水に従學す、後歸郷して研學の傍ら武道を練り、文久年間津山藩の足輕小頭を命ぜらる、慶應二年長州征伐に従軍し、維新後商業に従事し傍ら文學に耽り地方青年の教養と作詩とを樂みとし、晩年詩書とも其堂に入れり、明治十八年三月二十九日歿す、年五十一。

三田蘭室

名は義勝、通稱清七郎又傳左衛門、號蘭室又桐江、丸龜藩三田宗壽の三男、母は通女、同族勝富に養はる、國典を跡部光海(江戸人)伴部武等に、經史を室鳩巢に受く後藩の教授兼侍讀たり、安永六年七月十九日歿す、年七十七。著書、守成筆錄、大星龍雷軍配之傳、明斷說、才志論、正學說、先妣井上孺人行狀、養子訓、南山興廢記等あり。

佐佐十竹

名は宗淳、字は士朴、通稱助三郎、號十竹齋、讀較某島に生る、因て幼名島之助、初京にて僧となる後還俗勤學して水戸に仕へ、彰考館編修總裁に至る、元禄十一年六月三日病みて歿す、時に歳五十有九なり、水戸の城西増井邑の勝樂寺に葬る、始め志村氏を娶りしも間もなく歿し再び淡河氏を娶り二女を産む、男子なし故に姪の宗立を以て嗣子となし、祿を襲かしむ、著すところ南行雜錄六卷、西行

雜錄四卷、輜軒山錄三卷、十竹齋文十卷、詩稿二卷、六物輯釋六卷あり。

佐久間大華

名は包然、字は文華、通稱初め作之進後ち立仙、號大華、丸龜の人、和漢學を能くす、天明三年十二月十日歿す、著書、和漢明辨、斷經鸞篇一冊等あり。

佐々木雲屋

名は九萬、字は鵬程、通稱萬九郎、號雲屋、香川郡鶴市の人、竹石の高弟、山水花竹に妙なり、天保二年三月十一日歿す、年五十五。房號鶴市山房、畫譜に出づ、又同譜に其刻の印もあり、刻印は良山に學ぶ。

佐々木高庸

名は高庸、通稱歡吾、三木郡田中の人、歌を能くす。

佐々木文山

名は臥龍、通稱百助、號を文山又墨華堂、江戸の人、高松侯に仕ふ、兄池庵と共に書名あり、幕命により朝鮮の復書を書す、其角と親交あり、享保二十年五月歿す、年七十七。

佐佐木黄愚

黄愚と號す、志度の人、嘉永頃の人、歌を能くす、志度浦十二詠あり、圖會に出づ八栗層雲。志度晚鐘。高島晴風。惠遠島蟬。鹽籠夕烟。神池群螢。珠浦秋月。津村牧笛。八浦漁舟。屋島暮雪。原汀白鷗。天野夜雨。八浦漁舟、いさりする海人の小舟の音はして見る目も分かぬ浦の八重霧。

佐々木井翁

通稱井三郎、字を知備、號を春梧、晩に井翁と稱す、大川郡志度町の人、書畫詩文和歌等に造詣深し、明治十六年十一月歿す、享年六十八。

佐伯恭順

小豆郡大鐸村肥土山の人、少時岡山難波立愿の門に遊び、刀圭の學を修むること年あり、業成りて家に歸り父に亞て其の業を始む、最も外科に長じ其名遠近に聞ゆ、之れを以て門前常に市をなせしと云ふ本務の傍ら風雅を嗜み書畫を能くし、且つ賑恤の義氣に深かりしと云ふ、明治十三年十一月歿す。

佐伯旭雅

師は文政十一年阿波國三好郡勢力村に生る、内田熊三郎の末子なり、十二歳にして出家し、十七歳の高松大護寺に來り義海仁照に佛典を學ぶ、後三十一歳の時迄讀阿及京都の寺院を巡り研學せり、安政

五年八月五岳山主嚴猷の遺囑により善通寺の後董となり、慶應年間同寺五重塔を再建す、明治九年(四十九歳)にして隨心院主となり、明治十一年泉涌寺に轉し、同二十三年大僧正に補せられ、同二十四年一月二十一日示寂す、壽六十四。師は雲洞と號し學徳俱に高く佛敎界に盡くす事多大にして、著書二十三種あり

むかしより今に高野に佛法と僧もかすかにきこへけるかな

佐伯法遵

師は伊豫國宇摩郡上分村薦田伍平の二男なり、十三歳の時大師降誕の地を景慕し、讀岐に來り善通寺旭雅和尚の門に入り研學の結果高弟となり、明治十一年善通寺に住職するに至り、同年より大塔の再建に着手し、同三十四年に至て落成す、同三十九年洛南隨心院門跡に昇り四山管長大僧正となり、京都聯合大中學の學長總理を勤め又泉涌寺住職をも兼攝されしが疾の爲め劇務に堪へざるを以て泉山を辭し、單に隨心院のみとして専ら靜養されしも遂に明治四十五年五月二十七日遷化す、壽七十。師は皆水と號し詩書畫を能くし、皆水餘韻の著あり。

佐野數二

綾歌郡府中村字綾坂の人、弘化三年正月三日宇多津町豊島茂八郎の二男として生る、後ち佐野氏を繼ぐ氏天性慎厚、徳望闔郷に隆し、夙に村政に従ひて村長となり又殖産興業に盡力しては中筋佛坂二道の開墾、三十八ヶ所溜池の新墾又は修理等を爲して灌漑の便を圖り、山林の造林を奨めては一般村

民の永久の計を樹て、麥稈眞田の製造を教習しては細民の福利をなし、教育に衛生に率先して膺り、其の他公共の獻身頗る大なりしも、明治三十四年八月二十一日歿す、享年五十六。生前藍綬褒章を賜はりて功を顯はす、今に至るも村民の欽慕厚し。

### 向山助總

通稱助總、大内郡三本松の人、明和中齋靜齋に漢學を學ぶ。

### 向山周慶

周慶名は政章、大内郡湊村に生れ、醫を池田玄丈に學び傍ら殖産の志あり、適々藩主頼恭甘蔗の栽培の法を獎勵するも製造の法を知らず、之を玄丈に命ず、玄丈病の爲め歿して果さず、周慶遺囑を受けて研究する年あり、幸に薩の人良助なるもの讃岐に來り病を得て困む、周慶爲めに施療し癒ゆるを得たるを以て良助報恩の爲め、砂糖の製法を教ゆ、因て其製法を知り得て周ねく國內に改良法を施し、之より讃岐砂糖の聲價を高めたり。文政二年九月二十六日歿す、享年七十四。世に砂糖の神様と云ひ向良神社と祀る、明治十三年綿糖共進會に於て周慶の功勞を追賞し金幣一百圓を賜ふ、明治十九年祠宇を今の處に移し向山神社と改稱せり。

### 坂本龍慧

師は綾歌郡山内村の人、明治六年十歳にして屋島寺の徒弟となり、後ち東寺に入り雲照律師に學び明

治十三年牟禮村西林寺住職、同二十三年鴻元村地藏寺、同二十七年屋島寺住職(權少僧正)となり屋島保勝會に盡す處あり、爾後病魔に侵され遂に大正元年十月十日寂す、年五十。

### 坂本定五郎

小豆郡草壁町に於て町制實施以來の殊勳者として、最初の町葬を以てせられたる人に坂本定五郎君がある。氏は明治九年愛媛縣小豆郡上村至善小學校教授を振出しとして教育界に身を投じ、それより郡書記に亞いで池田村外一ヶ村々長として自治制に與り郡會議員、縣會議員等を経て、大正七年草壁町長に就任、大正十二年一月病歿するまで町長として盡力せしものにして、その間同郡組合立女學校、中學校を設立するに與つて力ありしのみならず、同島の主要産物たる醬油醸造業である、島醬油、内海醬油等の各株式會社創立に關して多大の功績ありし人なりき。

### 坂齋道一 (來寓人)

椅岳と號す、埼玉縣北葛飾郡田宮村の人、幼より學を好み夙に東京に出で中等科を修め後早稻田専門校科に入り勉學の功空しからず、明治十九年邦語政治科を卒へ尙研學を怠らざりしが偶々同二十一年十二月に至り香川新報社の創設さるゝに際し招かれて其主筆となり、毎日社説に於て侃諤の議論を吐き世論を指導せり、明治三十二年三月高松市二級より撰ばれて市會議員となり市政上に盡す處あり、明治三十六年頃心機一轉、政界を脱し實業界に身を投ぜんとし、香川新報社を辭し郷里に歸りしが暫くして足尾銅山の役員となり、明治四十年の同山の暴動事件に關し其善後策に盡瘁し、後之を辭して

強靱紙製造會社を設立し其事務取締役となりしも失敗に終はり、晩年は郷里に歸り大農法により農業に従事せしが遂に昭和二年六月十六日六十一歳を一期として逝けり、法號「斯文院能仁椅岳居士」と稱す、氏は餘暇に作詩を樂しみ居たり、左記は大正十五年新正の作なり。  
去年六十始歸農。不羨人間萬戶封。聖代春風新換曆。三盃椒酒味方濃。  
(録田連氏談)

澤井 此君

號を此君、天保頃象頭山の人、書畫及俳句を能くす。

眞田 圓山

名は彦治、略して彦とす、字は公美、通稱元四郎、號圓山、齋號玉蘭齋、寒川郡富田村の人、眞田初次の男にして文政九年十二月生れなり、幼より畫事を好み藤田湘軒(號板屋)に隨ひ畫及詩文を學び、後金子雪操の門に入り又詩文を藤澤東咳に學び、宋元以來の古畫を臨寫し小曾根乾堂、平野五岳等に交り、後阿淡、但馬、播磨、京阪、長崎等を遊歴せしことありしと、明治二十一年七月歿す、年六十三

眞本 田正家

國弘の後裔宇平太數代の孫にして嘉太夫なる者實曆十年に三木郡井戸村へ移居其の子孫今に井戸村に住居せり。

同家近代の累系

嘉太夫弘光——弘幸——金十郎正弘——磯藏幸光——米一國直——幸一

相馬 示肇

諱は肇、字は元基九万と號す、幼名宣五郎、本姓は片山氏高松藩士、片山某の子なり後相馬と改姓す天性卓犖豪宕にして小節に拘はらず尤經學文章に長ず、少壯故あり脱藩し三備の間に流寓す、幼にして中山城山に従ひ徂徠派の學を修せしが後馬良玉に交り専ら韓柳の文を習ふ、而て京師に遊び交を奇傑の士に結び功名を以て當世に馳聘せんとするも不遇を以て、去て江戸に遊びしが亦不遇にして志を伸ばすこと能はず、會て自ら文章を録し二卷と爲す、森田節齋之を讀み歎じて曰く文氣豪邁一世を壓するに足れりと晩年岸和田藩の聘に應じ教官と爲り講習館を創開し群材を陶鑄す、明治十二年三月二十八日病で歿す、享年七十九、著す所立誠堂詩文存一卷あり。

笹山 屋山

通稱小馬太郎、字は仲應、又璋董とも號す、高松の人、貫名松翁風の書を能くす、大正九年九月十九日歿す、年六十八。

鷲岡 溫

名は温、俗稱省助、字は如玉と云ひ、琴崖と號す、宇足郡二村の人、藤川三溪に學んで詩文を能くす安政頃の人。

鷺岡唯雄

鷺足郡西二村の醫師なり、諱は保宗と云ふ、長益の季子なり、初め紀州に遊び外科を花岡氏に受け、又京師に至り吉益氏に従ひ内科を攻め、經史を貫名氏の門に讀み、業成り郷に歸りて開業せしに治を乞ふ者常に門に滿てりと、又從學する者諸國より至り南海の一妙手と稱せらると云ふ、文久元年六月二十七日歿す、年五十八。

齋田五蕉

名は吉碩、通稱四角、號五蕉、丸龜藩士、俳を蒼虬翁に學び、四種器及南無庵の號を受く又書射に達す、明治六年六月三日歿す、年七十六。増浦、夜は波の戦ふ音や磯時雨。辭世、ちる花や舍利も生るい沙の上。

齋藤元慎

元慎は青山又新意軒と號す、丸龜の人、藩の物頭役を勤め江戸勤番の時細川廣澤の門に入り書を學び能くす、安永九年八月二日歿す、墓は同市寶津寺にあり。

齋藤碧梧

名は包容、字は土寛、通稱初め太兵衛後ち洪造、號碧梧又閑靜齋、丸龜藩士、詩文及書畫を能くす、明治六年五月五日歿す、年六十一。大阪藩邸留守居役たり。

齋藤龜溪

通稱を辰次郎、號龜溪又動鼻山人、高松の人、醉中時に畫く、明治年中歿す。

齋藤葛子

名は葛子、天保頃の人、歌を能くす、木村重成、あたら身を玉と碎きし功こそ後の世までの光なりけり。  
三等法印  
法師は三木郡大町村に生る、名は三等、字は哲眞、號南月、父は高島氏、幼にして無量壽院に雜髮す常に不動明王を信じ以て世に施す、備中賣島寺寂嚴の學友たり、仁尾の覺城院を中興し、廣く檀越を募る、法印博學にして佛學漢學及詩を能くす、著述多し即ち不動明王靈應記、般若心經秘鍵、蛇鱗記二卷、土佛篇上下、絶倒集、仁尾八景詩、覺城院縁起、觀音寺道中吟等あり、延享三年六月寂す、壽六十九。



僧 敏

僧敏は安永五年三野郡寺家村に生る、俗姓小西氏、字は密成と云ふ、幼より沈重にして群童と遊戯せず、甫めて九歳備中國福壽院の慈主に就いて剃髮し、天台教を學ぶ後西山拙齋に經史を學び又比叡山に入り、政は天王寺に菩薩戒を受け、時には淨土の易行門を叩く等大いに信仰の道を究む、後師の示寂に遇ひ備中に歸り、禪誦自適す、幾もなく嚴島に移る、後石見より京都に入り又嚴島に歸る等東奔西走席暖る暇なく、法燈のために盡瘁す、嘉永四年九月七日備中笠岡の海上にて入寂す、時に保壽七十六、慧命六十九なり。著書に神國決疑編考證、念佛追佛編、散心持名往生編、六字名號呼法辯等十餘部あり、皆世に行はる。

三 靈

字は泰麟と云ひ、幼にして大護寺慈舟和上に就き祝髮し、佛學の傍ら詩文を好み、初め岡内氏に師事し後城山の門に入り其學益々進む、文化頃の人。

山

名は空山、號山田、俗姓岡、阿野郡山田永覺寺住僧、書を竹處に學び、山水四君子を能くす、明治三十五年七月歿す、年八十。

山 尾

姓を梶原、名は景美、號柏月庵、山田郡水田の人、梅室の門人にして俳句を能くす、芭臣の祖父、鳴中に今來た蟬の聞えけり。

山 槐

麥歌舎と號す、高松の俳人。

珊 樂

花月齋と號す、寒瓜門、讀岐の俳人。

藏 海

藏海は多度郡碑殿村遍照院牛額寺の住職にして有名な勤王僧月照の師たり、天保六年五月遷化す。

藻 南

號藻南、山田郡下田井西樂寺住僧、植田箕山に學びて詩を能くし又俳句も能くす、明治年中に寂す。

讚 窯 道 八

道八は普通さんかまと稱し、頼恕公の時代に三本松の堤治兵衛氏が公の旨を受け、二代道八を京都より招き陶製せしものにて現今非常の人氣を以てはやする、因て左に其來歴を示す。

讚窯道八の窯墟

窯墟は三本松字五輪(大川中學校の南方數町)に在り、高松藩主松平頼恕大に國產獎勵に志し天保三年堤治兵衛を召し命ずるに京都の陶工仁阿彌道八を聘して器物を造るを以てす、堤氏は細川掃部頭直之の裔にして世々三本松に住し名家を以て聞ゆ、治兵衛は實に其の十代とす、治兵衛乃ち京都の清水五條坂に赴きて、二代高橋道八(華中亭と號す、後剃髮して法橋仁阿彌と稱す)及び三代道八並に其弟子三人を伴ひ歸り陶窯を所有地なる五輪東阜に築けり、窯場南北三十尺東西二十一尺瓦屋重葺なり、而して其の素磁甕は松の下別荘に在り、其の南區は南北三十尺東西十五尺これを手工場とす、北區は東西二十四尺南北十二尺是を素磁甕埴土場となす、製陶用土石は當國大内郡富田村に産するもの外なほ支那及び肥前山城等より之を採れり、器成りて翌年正月これを藩主に獻す、其精巧優美眞に目を驚すに足れりとぞ、同年八月十日治兵衛を藩廳に召し特に讚窯の二字を賜ひて其の陶器に銘せしむ。

讚窯

天保四年癸巳八月吉日

命堤治兵衛司造陶器因賜其窯名曰讚窯

治兵衛嘗て其の法を仁阿彌に受け屢々自ら之を製せり、銘に曰く醉茗また曰く必良また曰く珠淵其の器今存するもの殆ど稀なり、嘉永四年三月藩廳は十一代治兵衛(父の名を繼ぐ)を召し再び讚窯の

事を督せしむ、會々治兵衛病に罹りしを以て里正高畑作兵衛は請ひ代て之を董せしめたり、其の四月仁阿彌父子及び三弟子復た來りて從事すること故の如し、頼恕公親しく作兵衛方に臨み其の陶技を閱す、世に之を御庭焼と稱せり。

讚窯は當時營利の爲めに製せるに非ざれど其の聲價遠近に轟き、薄茶碗一箇銀五兩の領收書今に存するによりて其の精巧無比なるを察すべし、然るに明治十八年五月に至り陶窯は毀たれて稻田に化し別墅は壞たれて菜圃に變せり(現今傘提灯商友國祐造の住宅地)此に於て醉茗亭治兵衛の孫直太郎は後藤直外をして窯墟を畫かしめ又濱垣松圃に請ひて讚窯記を作らしめ、讚窯醉茗庵等諸種の銘印と併せて之を尙藏し以て家寶と爲せり。(大川郡史)

西行法師

俗の名に佐藤憲清、一に儀清と云つた、弓術に長じ、兵法に踐じ、鳥羽上皇に愛せられ北面の侍となるなり、從五位下に叙し左兵衛尉に任ぜられたが遁世せり、崇徳天皇の延保六年十月嵯峨に行き僧となる、時に年二十三法名を園位と號した、其後西行と改め行脚に志し全國を周遊し到る處風詠と樂み文治五年京都に歸り東山雙林寺に庵を結び建久九年二月十六日入滅した、享年七十三。

崇徳院

六年帝仁安三年西行法師親ら天下を巡り讚國を周覽し崇徳院の廟を拜して倭詠一篇を奉る

よしや君むかしの玉の床とても

かゝらん後は何にかはせむ



浮雲はあらしに晴れてやしま山峰さしみゆるゆみはりの月

佐々木喬得

通稱又吉、藩の武術流砲術師役佐々木家二代目、七年十月十七日歿す、初代は又七弘隆。

佐分利之助

佐分利流鎗術流の名家にて備前に生れ、頼重、頼常に仕へた、天保七年八月二十三日歿す。

笹島長裕

通稱嘉右衛門、藩の無山自現流劔術師役笹島家の二代頼豊の師範であつた。

齋田喬

丸龜市中府の出身にして東京市外千歳村下祖師ヶ谷に現住す、成城學園繪畫教師を勤め日本挿畫協會員、二科展へ洋畫出品入賞、書籍裝幀百冊を超す、童話劇集、童話集、兒童讀物數冊餘技として出版す、  
佐々木孝丸 文士、東京市外武蔵野町吉祥寺八五五に現住せり。

寒川恒貞

京大電氣科卒、大日本電氣製銅所、木曾川電力社長外數會社重役、東京市外大崎町上大崎三〇〇。

### キ之部

#### 岐陽

名は方秀、字は岐陽、不二道人と號す、俗姓佐伯氏、父を清泰と云ひ、母源氏夢に珠劍を得たり、而して姪む、康安元年十二月二十五日、三野郡熊岡郷比地村に生る、天性充實にして文藻典麗なりき、初め父故ありて北越に奔るや母之を携へて京都に出で外祖父源某により詩書を學ぶ、幾何もなく祖父歿し、窓泉和尚に従て東福寺に入るを初とす、又雲州人夢巖に就きて佛學を修む、後安國寺源澄和尚に學び和解益々進む、長じて宋學を學ぶ、應永十年我が使船四書及詩經集傳等を舶載して歸る、當時は劍戟盛にして儒學を好くするもの少し、爲めに自ら四書に和點を施して一般人士の讀書に便を與へたり、岐陽の如きは實に當代稀に見る博學なる名僧と云ふべし、著す所琴川錄不二遺稿、同自曆譜等あり、應永卅一年二月三日東福寺に寂す、享年六十二。

#### 紀伊守信親

木田郡下井戸、井戸城の城主にして時の人此れを井戸殿と稱せりと云ふ、蓋し安富氏の部下にして年代は天正以前の人ならん。

#### 木屋原若狹定矩

大川郡富田村時氏古城に在りし人にて土佐元親の部下なり、天正十三年豊公南州征伐の後阿州木屋原の城に歸りしと云ふ。

#### 鬼無兵庫

香西氏の部將にして一に香西兵庫とも云ふ、其城址は香川郡上笠居村字袋山にあり、天正前後の人。

#### 久昌院

源英公の實母水戸家臣谷ヒサ、英公及光圀公を生む、寛文元年英公生母の爲に高松天神前に廣昌寺を建つ。

#### 丸龜京極家

徳川將軍家光の萬治元年二月播磨龍野の城主京極高和西讃に封ぜられて丸龜に居城し、明治二年に至る迄七代二百十二年間續いたり、而して朗徹は明治二年三月十九日土地人民を返上し、丸龜藩は七代二百十二年にして藩政は廢されて、左の家祿を下賜されたり。三千三百二石。

(1) 高和

高政の子なり、初め小法師と稱す、寛永十七年正月九日從五位下刑部少輔に任ず播磨國龍野にて六萬石を領せしが萬治元年二月廿六日丸龜の城を賜ひ、西讃岐五萬六十七石、播磨國揖保郡の内一萬石を下し賜ふ、同年五月五日入城す、寛文二年九月十三日京都にて逝去す、年四十四。

(2) 高 豊

幼名百助と稱す、高和の子、寛文九年從五位下備中守に任ず、寛文二年十二月四日封を襲ふ、元祿七年五月江戸よりの歸途痘瘡を患ひ、五月十八日播磨國加古川にて逝去す、年四十。畫を能くす。

(3) 高 或

幼名縫殿と云ひ高豊の第四子なり、元祿七年六月十八日封を襲ふ、同日父高豊生前の請を許し庶弟(實は庶兄)高通を多度津城に分封するを許さる、實永三年從五位下に叙し若狹守に任ず、享保四年九月朝鮮信使來聘す、命を受け之を駿州江尻驛に饗す、同九年六月二十九日丸龜にて卒す、在職三十一年享年三十三。

(4) 高 矩

幼名縫殿助、初め高定と云ふ、高或の長子なり、享保九年八月二十三日封を襲ふ、同十六年十二月二十二日從五位下に叙し佐渡守と稱す、同十九年六月江戸を發し、同二十五日始て封に就く、寶曆十三年九月二十四日卒す、在職四十年、享年四十六。

(5) 高 中

幼名英吉、初め高躬と稱す、寶曆十三年十月晦日封を襲ふ、明和七年十二月十六日從五位下に叙し能登守に任ず、文化七年六月二十五日若狹守に任ず、同八年正月十三日逝去す、年五十八。

(6) 高 朗

字季融、琴峰と號す、幼名友三郎、高中の四子なり、文化八年三月九日封を襲ふ、同十年十月十六日從五位下に叙し長門守と稱す、明治七年二月十四日逝去す、年七十七。安政四年西讃府志成る、琴峰自序す、巖村秩、加藤毅、大塚敏、秋山惟恭等を用ゐ文武を修め、詩を能し、角力を好む、謚は薦枕高則比古命、著書、琴峰詩集八冊、巡封詩草、五山は其集に序して、甚だ詩才を稱揚す、葛原、松村竹落絶還連。老樹陰中荒徑穿。廳處野畦收稻後。麥苗寸寸似鋪氈。款に或は陶水郎とあり。

(7) 朗 徹

寶嶺と號す、幼名を岩根、後ち榮三郎、實は支族右近の第五子なり、高朗養て世子とす、嘉永二年十月十六日從五位下に叙し佐渡守と稱す、同三年封を襲ふ、安政元年十一月四日、五日地大に震ふ、封内人家傾壊するもの多く土民皆居外に家居す。明治四年四月十日丸龜藩を廢し、丸龜縣を置かれ朗徹其知事に任じ、同八月十五日知事を免ぜられ十月十八日東京に歸り、同十五年五月十一日卒す、年五十三。兄高峰の長子實徳を養ふて嗣とす。夫人を鉦子と云ふ。

高 徳 子

高德子は高岑の長男、安政五年十一月五日を以て丸龜西屋敷に生る、後ち朗徹の嗣子として丸龜藩主京極家の後を襲ふ、初期以來貴族院議員に互選され、明治十九年以降青山御所勤務、明宮祇候等に歴任せり、餘技としては書及び圍碁を能くし、若き時より先代に負けざる相撲好きなり。昭和三年五月廿一日歿す、年七十一。危篤の報天聽に達するや左の御沙汰ありたり。

京極松垞

幼名を富丸、名を高美、號松垞琴峯の長男にして詩文を大窪詩佛に學び能くす、書も詩佛に酷似す、惜哉弘化二年七月十六日齡二十八を以て逝けりと云ふ、詩集五卷あり。

京極伊知子

京極伊知子は右近衛權少將忠高の女なり、才勝れて貞淑の稱あり、家臣多賀宮内常良に嫁し、寛永十九年五月一子高房を生む、越へて二ヶ月夫常良死す、伊知子素より歌文に長じたり、萬治三年四月二十七日歿す、諡號壽昌院殿茂林宗繁大姉といふ墓は丸龜玄要寺内林溪院にあり、夫を慕ひ愛兒を養ふ上につけて心事を書きつらねて涙草といふ、其中の歌皆情眞に語優なり、左に聊抄す。  
よそに見し尾花が露も此秋は我袖よりぞこぼれそめける  
夕暮の空に漂ふ浮雲やはかなき人の行くへなるらむ

小車のめぐり逢ふ瀬も頼まれず我玉のをの限り知らねば

諸共に行くべき身にもあらずに涙ばかりや先に立つらむ  
新玉の年立つ日より戀しきは古巢を出でし鶯の聲  
思ひやる心遣ひは東路を日に幾度か行き返るらむ  
右第一二首は亡夫を慕ふなり、第三四首は愛子が江戸に行く時に別れを惜むなり、第五六首は愛子が江戸に著きて又の歳の暮に思ひやりし由なり。かくて此子は成長の後遺託により幕府に請て三千石を讓り與へて、京極高房と稱せしが延寶五年五月二十一日逝去す、年三十四。

多度津京極家

將軍綱吉の元祿七年京極高和の孫、高道を多度津に封じ一萬石を與へて多度津藩を起したが六代の高典は明治二年二月に版籍を朝廷に奉還し、六代百七十六年にして廢され、左の家祿を下附された。一七四十四石

(1) 高澄

幼名喜内又内膳と稱す、諱は高道後高澄と改む、丸龜藩主二代高豊の次男なり、元祿七年六月十八日父歿後生前の請を以て讃州多度津に於て高一萬石の所領を分ち賜ふ。正徳元年始て封に就き丸龜城内に邸を設け之に住す、享保二十年九月二十四日封を世子高慶に襲はしめて致仕す、在職四十二年寛保三年四月二十日江戸にて卒す、年五十三。

(2) 高 慶

幼名千吉後内膳と改む、高澄の第一子なり、享保二十年九月二十四日封を襲ふ、同年十二月從五位下に叙し出羽守と稱す、元文二年五月始て封に就き丸龜に住す、寶曆六年二月二十六日丸龜にて卒す、在職二十二年、享年三十七。

(3) 高 文

幼名内膳、初の名は高武後高文と改む、高慶の第六子なり、寶曆六年五月二日封を襲ふ、明和六年十二月十八日從五位下に叙し壹岐守と稱す、安永八年七月五日世子高賢をして封を襲はしめて致仕す、在職四十二年、同年十月十六日卒す、享年四十四。

(4) 高 賢

幼名秀松後内膳と改む、高文の第一子なり、寛政八年七月五日封を襲ふ、同十二月十九日從五位下に叙し壹岐守と稱す、同九年四月江戸を發して初めて封に就き丸龜城に居る、文政十年三月二十一日陣屋を多度津に造り、移住せんことを請ふて許され、十一月を以て多度津に移る、是より先き高澄分封以後丸龜城の郭内に居館を設け之に住するもの數世、但多度津に別館を設け十數戸の家臣を移して之を守らしめしが是に於て居館二所、倉庫八所、營門三所、鼓樓學館馬場射場等完備し、更に外郭を作り外門を三所に置けり、天保四年三月高賢封を世子に襲はしめて致仕す、在職三十七年、同九年三月六日卒す、享年六十三。

(5) 高 琢

幼名辰之助後内膳と改む、高賢の第二子なり、文化八年十二月十八日世子となる、天保四年三月封を襲ひ同年四月始て封に就く、同五年十二月十六日從五位下に叙し壹岐守と稱す、同九年多度津築港成る。

多度津築港

是より先き天保五年を以て工を起し、家老川口久右衛門之を督す、東方突堤百十八間北より折れて西に向ふ、西突堤七十間中央別に百十間の防波堤を設け、其兩端二所に港門あり、此費額凡金六千二百餘兩を要せりと云ふ。

安政四年四月六日庶弟高寶の次男於菟之助、高德を養ふて世子とす、同六年三月十一日高琢致仕す、在職二十七年、慶應三年三月二十二日卒す、享年五十七。

(6) 高 典

幼名於菟之助、名を高徳と云ふ、實は高琢の庶弟高寶の次男なり、天保七年十月十九日生る、安政四年四月六日世子となる、同五年十二月名を高典と改む、同六年三月封を襲ふ、同十二月十五日從五位下に叙し壹岐守と稱す、後河内守又下總守と改む、明治二年六月多度津藩知事に任ぜらる、同年二月七日多度津藩を廢せられ知事を免ぜられ、同四月八日東京に歸る後貴族院議員たり、明治三十九年頃歿す、年六十餘歳。



高 備 子

子は高典の二男にして明治六年七月三十日を以て生る、明治四十三年貴族院議員となり今尙其任にあり、夫人を弘子と云ひ、一女あり。

北 原 梅 庵

名孝繼、字善夫、通稱初め直次郎、後ち直一郎、號梅庵、高松人、孝幹の子、書を米庵に學ぶ、慶應二年講道館習字指南となる、明治元年八月歿す、小村田之助の碑文は其撰なり。

北 岡 政

字は子正、石臺と號し、丸龜藩士にして詩を能くす、弘化頃の人、鼓腹集の著あり。

北川伊兵衛常吉

常吉は日本に於ける特有織物として高松の名産たる保多織の元祖なり、氏は京都の人、伊兵衛は蒲生家の臣北川治部兵衛宣勝五世の孫なり。元祿二年藩主頼重公の召によりて讃岐に來り中村に工場を設け、元祿二年十月二十六日絹織二十六反を藩邸に上納す、然して苦心の末保多織を發明す、同五年四月五日絹保多織五段を上納せるを嚆矢とす正徳元年十一月十三日歿す。

北 村 雅 尙

名を雅尙、通稱平三郎、安雅の父なり、歌を能くす、文化頃の人。

北 村 安 雅

名を安雅、通稱庄之助、號翠竹、高松人、父は平三郎雅尙、書は撲齋に、歌は方升に學ぶ、文久三年五月歿す、年四十九。池邊柳、幾春か池の鏡に影うつす柳の眉は老せざるらむ。

久 家 暢 齋

名は高朗、通稱彌榮喜、改稱令助、號暢齋、高松藩儒、文化九年講道館儒員、詩文及書畫を能くす、弘化元年四月歿す、年五十四。梅村輓詩に歲次今年恰屬龍とあり、暢齋歿年甲辰なり、落款に久朗とあり、姓名を取るなり、吟社を設け玉蘭社といふ、五山堂詩話に見ゆ、著書、昇平樂事集等あり。

久 家 克 堂

名は高恒、字を大中、通稱令三、號克堂、實は太田正心の次男、暢齋の養子、弘化元年講道館儒員、記録所總裁、詩文を能くす、明治三十年五月歿す、年八十。

岸 本 謙 崖

通稱安平と云ふ、天保元年六月二十三日大川郡鶴羽村に於て生る、別號清春と云ひ書は津田の島村にて習ひ出藍の譽れあり、書は壯時江都に行き某氏に學び山水を能くす、明治三十八年一月一日歿す、年七十五。

### 岸田竹潭

名は茂篤、字を竹潭、俗稱亮仲、號默翁、香川郡大野村人、由良養的の次男、同郡由佐人岸田勘八の養子となる、高洲に經義を受く又歌を能くす、天性篤實善く養父に事ふ、嘉永六年七月歿す、年七十七私誼一玄、醫暇子弟を教ふ、之に示す歌、よく習へ今習はずは年たけて悔の八千度かひなからまし、晩年盲となる、其頃書ける短冊も存す、著書、百首櫻歌等あり。

### 岸田月窓

名は鴻、字を子漸、初名は茂元、字を長瑞、通稱元介、號月窓又琴谷、亮仲の子、由佐人、書は吉浦に學び六體皆能くす、詩文は城山、篆刻は林谷に學ぶ、天保五年三月歿す、年二十一、墓は謙谷撰文書は箕山にて年十三の時なり、箕山は幼時此人に學ぶ、著書、六體書苑等あり、箕山遺詩を輯めて、琴谷詩集といふ、題猿畫、巴東巫峽秀。月黒叫清猿。時破愁人夢。不令到故園。

### 岸田青城

名は遊、字を世遠、號青城、文化頃東讃の人、書を能くす、畫譜に出づ。

### 木下新十郎

詩は善、字は子伯、號を芦浦とす、通稱亮朝、高橋中谷翁の仲子にして小豆郡安田村に生る、幼より學を好み少時高松に遊び藤澤先生に業を受く、日夜研鑽怠りなし、後浪華に赴き賀川氏の門に入り醫術を學ぶ、年有り後東遊、西泳百氏の業を窺ふ成つて郷に歸り苗羽村木下與左門の女を妻としてその姓を肩す、一男三女あり、長女は安田村鳥井氏に、二女は天死し、三女は坂手村山村氏に嫁す、郷にあるや附近の子弟を集め經書を請じ或ひは醫術を爲し、貧を救ふを以て己れの任となす、性義を好み甚だ郷里に重んぜらる、文久三年四月廿四日病歿す、享年六十。墓碑は友人日下逸撰し、山村亮哲の書する所なり。

### 木内靜好

龍山の養母にして歌を能くす、八十二歳にして左の歌を作れり、明治の初年歿せり。  
三千とせになるてう桃のことしより花さく春に逢そうれしき

### 木内龍山

名は倫、字を仲和、通稱順二、號龍山、香川郡同座の人、小橋道寧の子にて安藏の弟、文化八年十二月五日同座村に於て生る、天保二年山田郡古高松木内茂邦の養子、福江六山に書を學び、伊藤南岳、謙谷綾川に經史を學ぶ、少壯著述に耽り又勤王に盡瘁す、慶應三年十一月二十七日歿す、年五十七。



亙諱は通明、小字は熊次郎、老後黙老と稱す、季明の孫なり、幼時書を藩學に學び每試甲科に上る、高松藩の世臣なり、藩主之を近侍とし遂に愨公の家老と爲し、委するに會計を以てす、是時に當りて藩國財政振はず家殆んど支ふ可からず、亙經營備さに至り同僚寛速水と相謀り坂出の鹽田を開き永富の坡池を修し、砂糖爲替の法を立て十數年の後府庫充實す、學和漢を兼ね殊に歌繪畫を能くす、其注戸藩邸に在る曲亭馬琴と莫逆の交を結び、朝夕往來殆んど虚日なかりしと云ふ、曾て膳所藩士平井兄弟の讐を當國綾歌郡羽床村に復するや村吏臨檢書を藩廳に致す、僚屬之を視て曰く人を殺し咽喉を刺さず是恐らくは武道を解せざるものと、既にして其書を執政に出す亙一閱して曰く平井學ぶ所の劍術は必ず陰流ならんか、屬吏何の謂たるを解せず陰に人を馳せて之を劍術師某氏に質す、曰く屍の耳後に疵一と所あるは是陰術の秘法なりと、是に於て其劍法も亦蘊奥を究むるに服す、安政三年十二月病で歿す、享年八十五。

別號痴齋、又漁隱又樟川等あり著書左の如し。  
隨聞記、續聞まきの記、戲場思出艸、戲作者考、江城朝儀式、國字小説通、京攝戲作者考、金瓶梅批評、宇津良衣、懿公遺事、篋底秘記、鄙言兒孫噓、本朝水滸傳初輯評、和寶女大學、海底錄、龍集說考、忠臣記、通明近思錄、中陵漫錄、釣狐尾芬梅、新玉藻前譚、不知火譚、曲亭戲作目錄、談月亭藏書目錄、木村家譜、島牛記、初學臨池抄、戲場一觀顯微鏡。

### 木村子柔

諱は直、字は子柔、綾歌郡岡田村の人なり寛保二年に生る、幼より學を好みその學に忠なること驚く

ほどにして、天暑にも雨降るにも路の遠近を問はずして説を聞くを樂みとせりと、斯くて天明二年正月五日歿す、年四十二。子なきを以て其の親戚の子恒二を取りて嗣となせりと、學友三野無逸其墓銘を撰すと云ふ。

### 木村環翠

名は成憲、通稱才助、號環翠、大内郡三股人、許重の子、世々里正たり、草書篆書を能くす、之を以て諸國を遊歴す、天明中大内郡水利土工に盡力す、文政九年四月歿す、年七十八。家に其書六曲屏風及大筆あり、墓は泉川世寧撰文。

右側に殘せしは殘し、の語格なれど元のまゝなり、左の辭世を刻せり。  
何一つ思ひ殘せし事もなく只故郷の月を眺めむ

### 木村文齋

號は文齋、文化頃東讃の人、書を能くす、竹石展觀錄にあり。

### 木戸長秀

名は長秀、字を元造、文化頃高松の人、書を能くす、書譜に出づ。

### 木谷蓼村

字士厚、諱崇禮、號蓼村、通稱綱助と云ふ、多度郡葛原村の人、尾池松灣に學んで詩書を能くす、加藤梅崖、戸祭鷗村等と親交あり、明治六年十月十八日歿す、年五十八。梅隱詩稿は崇禮の校する處なり。夏夜偶作、雷雨忽開霽。村齋夜自涼。微風檐柳外。時見一螢翔。

### 木谷竹村

竹村は通稱を虎之助と云ひ多度郡葛原村の人、元同郡筆岡村高口古門の次男なり、木谷綱助に養はれ其嗣となる、木谷愚山に學んで詩書を能くす、明治十八年五月一日歿す、年四十一。

### 木曾壽平

諱は貞庸、字は徳言、愚山と號す、通稱四郎、晩年壽平と改む、父は與三兵衛貞正と稱す、初め香川克齋に學び、長じて伊豫小松藩儒近藤篤山に學ぶ、後ち東都に遊び昌平費に學び居ること幾何もなく父の病報に接し歸ると其の喪に遭ひ、再び遊學する能はず郷里に於て子弟を教養せり。明治十年八月歿す、年六十六。

### 木村公景

公景は琴平の畫家なり、本名は科野萬之助と稱し、もと大阪堺筋の商賈なりしが幼より畫を好み西山芳園に就き學び堂に入る、明治二十年頃琴平に來り畫壇を開き、畫筆に親しみつゝありしが大正二年十二月二十一日歿す、年六十九。子暉峯あり、父の業を繼げり。

### 木村笠堂

通稱勇吉、蕉陰窩と號す、志度人、安政六年三月同町多田家に生れ、後ち五名山村木村家の嗣子となる畫は初め雪江、後ち守山湘圃、鐵齋、立齋等に學び能くす、就中花鳥と蝶の畫は最も得意とする處なり、詩は石橋雲來に學び能くす、尙餘暇に圍棋を好めり、大正九年二月六日歿す、年六十三。遊志度寺、梵鐘隱々碧烟橫。古殿烹茶弄晚晴。黃鳥何來也添興。數聲宛轉法華經。

### 紀杏園

小豆郡滿寄村の人、通稱雄次郎、天保五年三月三十日高松市丸龜町に生る、父を木内彦門と云ふ、其の三男なり、翠亭の弟、丁年の頃木村上庄郷正紀家の養子となり其の職を襲ふ、性頗る熱心にして且つ義侠心に富む、明治廢藩の後或は庄管に或は小區長に或は縣會議員となり、又香川縣に出仕して職勉精勵克く其の責務に執掌せり、餘暇南宗の繪畫を能くし、名を吉、字は吉人、杏園と號す、明治二十三年二月三日歿す、年五十七。  
(小豆郡史)

### 紀太紫峰

通稱作兵衛、慶安二年英公高松に召し、紀太理兵衛と改稱せしむ、陶業餘暇畫を能くす、號紫峰又理空、本姓森嶋、江州信樂の人、父半彌、明人に陶法を受く、理兵衛京師粟田口に陶す、因て英公に知らる、歿年未詳、但し其畫に時年七十六と歎せるあり、其家陶業半彌を初代とす、但し理兵衛燒は紫



名は武韶、通稱左膳、武雅の嫡子、享保三年父の祿を嗣ぐ、寶曆二年十二月故あり祿を奪はる、子武充通稱波江、改稱順治、父に連坐して放たる、天保二年七月十三日父子共五山の請に因り赦さる。

### 菊池五山

名は桐孫、字は無絃、通稱初め左太夫、後ち佐太夫、號五山又娛庵、繩武の弟、寛政九年出奔、文化九年赦免文政八年武雅の家を繼ぎ高松藩に仕ふ、記室となる、嘉永二年四月致仕、六年六月歿す、年八十四。江戸市河寛齋に學び詩名世に高し、著書、五山堂詩話十六卷、題畫小詩、五山堂詩話補遺等あり、詩佛、五山、細庵、此合集を三家妙絶といふ、五山の落款を書く時五字常に頭を太くす、文晁が晁の下を太く書くが如し。

### 菊池黄山

名は武賢、字を庭實、初め名元仲。通稱八右衛門、號黄山又崧溪、清河牧又別に綾小路左太夫又入吉江只とも稱す、増田正宅の次男、高松人にして菊池家中興の老儒なり、宮村經弼に學ぶ、後ち岡井氷室に左傳を受く、詩文書畫及武術を能くす、寶曆初め講道館儒員となる、經學篤行、門人數多あり其中芝山最も著はる、安永五年三月朔日歿す、年八十。謚を安靖處士、自作壽藏銘、讀有愚民。字曰庭實。大喜過望。能事已畢。奥村無我及片山志摩後藤頼貞(芝山父)碑文は其撰なり。七十の賀に、芝山は序、長洲は詩を贈る、又芝山集に、題黄山先生畫鶴詩あり。著書、讚州府志觀面集あり。武賢又和歌を能くす、存ふる我身の昔し思ふにもうしと見し世を今は忘れし。

### 明和乙酉之春

祖父増田太兵衛、初め勘定奉行手代、貞享三年藏奉行ち後故ありて改易され、其子八右衛門増田を改め菊池と號す、寶曆十三年小寄合より御目見儒者となり、其子八太夫中寄合代々儒者となれり。

### 菊池室山

名は武保、通稱八太夫、改稱八右衛門、號室山、武賢の養子、實は常福寺法專の末子、五山の父なり寶曆五年林家に入り昌平費に學ぶ、又中村蘭林に就く後歸藩し講道館儒員となる、天明五年七月歿す

### 菊池守拙

名は繩武、字は萬年、通稱八太夫、號守拙、又六友、五山の兄、武保の養子、實は池内清三郎の次男、安永三年栗山に推選せられ、林家に學び詩文を能くす、八年講道館儒員、文化二年其總裁となる、文政五年四月歿す、年六十九。

### 菊池藻洲

名は武幹、通稱初め直藏、後ち八太夫、號藻洲、繩武の嫡子、文化八年碧海と同じく林家に入る、十一年講道館儒員となる、武幹又書を能くす、天保五年四月歿す、年四十七。

### 菊池楊所

名は武章、通稱章之進、改稱八右衛門、號揚所、その邸を醉香邸と云ふ、武幹の嫡子、天保六年豫州近藤篤山に學ぶ、十一年歸藩、十二年儒員、弘化二年林家に入る、元治明治間從軍、明治三年三月歿す、年五十一。子あり、武修といふ。

菊池 高洲

名は武矩、字周夫、通稱助三郎、號高洲、本加藤氏、香川郡由佐人、高松藩士菊池徐風の養子となる初め黃山に學び後ち京にて齋必簡に學び古文辭を修む、又國學に通ず、又書を能くす、由佐冠櫻神社の書の類あり、文化五年七月歿す、年六十二。墓は綾川撰文。著書、史記文訣二冊、堀川夜討文論、詩經管見十冊、讚岐孝子傳二十冊、阿州祖谷紀行、筑紫包二冊、高洲文集、雞助集二冊、高洲雜記十冊等あり、友安三冬、加藤西郭、岸田茂篤皆其門に出づ。

菊池 秋峰

初め名は武晋、後ち改名して蓋、字を修夫、通稱新三郎、號秋峰、五山の養子、嘉永五年藩に仕ふ、明治四年致仕東京に寓す、十五年頃歿す、書及書を能くす。子香橋、通稱得之助、改稱香平、明治元年講道館素讀指南、同四年正月父祿二十石を繼ぐ。

菊池 香橋

通稱得之助、改稱して香平と云ふ、秋峰の子、明治元年講道館素讀指南、明治三年皇漢學教官となる

明治の末年歿す。

鬼無 半山

通稱は甚三郎、天保五年十一月香川郡上笠居村に生る、夙に學を片山冲堂及山田梅村に受け詩書を能くし、隣里の子弟に教授す、後殖産に志し、力を公益に竭し、且つ農家の副業を奨励することに貢獻す殊に鬼無に於ける果樹特に林檎の栽培の功勞者にして、夫れがために苦心慘澹せしも遂に今日の盛大を爲す、功により官より木盃及賞狀を賜ふ、その後斯業の發達に意を用ひしも明治四十年一月十一日病歿せり、年七十四。

吉 補

號は吉補、香川郡天福寺住僧、書を能くす、從學の者頗る多し、岸田月窓も其門なり、天保頃の人。九 號は九峰又拙者庵、又願鑑室、諱は主拙、後ち清拙、初め越前大安寺にて學び後ち三野郡仁保常徳寺第四世となる俗姓小山氏、書畫を能くす、寛政九年九月寂す、年六十七。

玉 泉

名は昇道、號玉泉、高松人、詩畫又篆刻を能くす、京に寓し、後枚方光照寺、又伏見西養寺に住す。



玉

名は壽滿、號を玉芝、高松の人、細谷松坡の妻、蘭石芝石を畫く、明治十一年一月歿す、年七十。

玉

瑛

高松市大護寺第八世の住職にして閑雅道人と號す、佛學の餘技として竹石に學んで畫を能くす、印に神光とあり、俗稱森某の子(中の村住)市原陶々と親しみ好し、先代第七世慈寶の弟子なり、天保十二年十月五日寂す、左の弟子あり、孰れも勤王僧なり。

實英 實英 實英 實英

義

立 (僧)

一名は法水、字を洗心、號松莊、西讃の人、牧詩牛の友人、著書、松莊道人藁あり、此人奈良松莊の前身なり、(奈良松莊の項参照)

李白 一杯一杯又一杯。一日須傾三百杯。戲取先生詩句一算。一年十万八千杯。

徽

石

綾歌郡西分村善福寺の僧にして詩書畫を能くす、長らく木田郡水上村常光寺に寓し居たり、明治二年頃寂す、年七十餘才。

汲

霞

丸龜疊屋町明石屋某、木長に學んで俳句を能くす、安政頃の人。

幾

曉

安永頃高松の俳人、山風舎と號す、麥浪の門人。

麥浪先師七とせの忌に

七文字は流れてはやく月更ぬ

傾城のとほし火飽てほたる哉

其

岳

豊田郡河内村大北五郎兵衛、嘉永頃の人。

淇

水

丸龜蘇鐵屋敷見附屋、嘉永頃の人。

箕

柳

箕柳は幼名を新吾、後ち勘三郎と稱す、俳名栗陰齊箕柳、木田郡牟禮村伏見氏、性格淡にして寡欲同

精心に當心、俳を好み尾張の甫、羽洲の指導を受け其堂に入り、高松の穂屋等と深交あり、又花道は正風遠州流を茶道は千家表流を學び何れも能くす、明治三十年三月三日歿す、年七十餘歳。辭世 翻れんとする時しろし草の露

金陵

號を金陵又琴陵、又獨角、又獅子窟と云ふ字は宥怡、金光院住僧、文化十一年入院、文化七年隱居す、書は大雅風を學び又詩文俳句を能くす、弘化元年十二月二十日寂す、年六十一。又畫譜に名を牧鳥、字を浪仙、號を金陵とあり、或は同人なるべし、後考を俟つ。

龜山

高松西通町龜田屋(楠氏)、安政万延頃の俳人。

龜水

龜水、南畫を好くす、下笠居南原氏ならん、弘化頃の人、余嘗つて、小袋瀑布の眞景を寫せるを觀たることあり。

吉瀨元厚

元厚師は福岡縣浮羽郡浮羽村の人、大生寺に育ち、宇和島の金剛山に、東京の哲學館に、京都の叡山

や、銀閣寺等に長年間苦學せられたる、俗望を放下して學道の爲めに精進し弘法の爲めに側目もふらず戦ひ續けて來た事も、相提携して臨濟宗大學に十餘年間も奉職、宗門子弟教養の爲めに献身努力した、温順に勤めて居れば臨大の教授、いつまでも宗門教育會の長老たるべき身分を義理の爲めには之れを捨てて顧みず、開山大師にはすまぬが氣の合はぬ當局の下に働くのはいやと断然辭表を叩きつけて慈恩寺に引退した其の氣持又懇望されても大地の大生寺へ歸らずに、觀音堂の堂守然として小庵に晏如たりし其境涯は共に吉瀨師の面目と性分を實に克く表はして居ると思ふ、引退後は専ら講學と禪風擧揚の爲めに盡瘁し社會教化の爲めに働き通じた、其意氣は實に吾人が範として以て深く敬慕私淑せねばならぬ点であると思ふ、吉瀨師は本來教禪兩學の達者である、然し晩年には詩あり、歌あり、又俳句あり、社會教化の方面にも活躍されて居つた事であるから其處に綿上更鋪花底の妙趣が含蓄されて居ることと思ふ。

履歴 高松市四番丁禪宗慈恩寺住職、慶應貳年參月拾五日生、明治十四年四月八日福岡縣浮羽郡浮羽村禪宗妙心寺派一等地大生寺住職故日種典嶺師に就き得度す、同十五年四月京都花園妙心寺派宗立普通學林に入學同十八年三月卒業す、同十八年九月より同二十年八月まで大分縣日田郡豆田町感宜園に於て漢學修業す、同二十年十月より同二十三年九月まで神戸市祥福寺禪堂に於て禪學修業す、同二十六年四月東京私立大道學館に入學同二十八年九月同館前期卒業、同二十八年十月比叡山天台宗大學に入學同三十年四月妙心寺派内典佛教學研究生を命ぜられ同三十三年四月滿五ヶ年を経て三大五小部研究了る、同三十三年四月より同三十六年三月まで淨宗應々谷專門大學院に於て唯識學華嚴學研究、同三十六年四月より東京小石川東洋大學に於て哲學科倫理科研究、同

四十四年三月三十日教育勸學の廉に由得業學士の稱號を授與せらる、同三十八年十二月十八日臨濟宗京都花園中學教義講師囑託、同三十九年四月二十日花園中學教員たる事を文部大臣より認可同四十四年十月十九日京都花園臨濟大學教授認可、大正七年三月教員辭職、大正九年高松市佛教會講師囑託、昭和三年高松市佛教會長囑託、同四年九月廿一日妙心寺派管長より表彰、同六年十月五日六十七歳にして遷去す。

橘川喜三次

東大獨法科卒、函館地方裁判所判事、函館市汐見町官舎に現住。

紀太理平

號は紫山、香川縣高松市中野町公園前の人、五十一歳。初代理平は家康に屬し居り、それが爲讃岐守松平頼重公に召され御庭焼として慶安二年より今日三百餘年繼續し當代まで十二代目なり、氏は明治四十年より後繼し理平焼に従事し其の間京都の實山氏に入門し陶器研究に苦心し今日迄約二十五ケ年間斯道に従事す、明治三十五年聯合共進會、同三十六年第五回勸業博覽會等に陶器火鉢を出品し入賞其の他各宮殿下の御買上の光榮に俗し大正十三年商工省展に入選す、勳八等に叙せらる。

木内貞見

通稱作之右衛門、瀋寶藏院流鎗術師役、木内家初代寛延三年六月二十五日歿す。

木田梧樓

小豆郡淵崎村の出身、高松市藤塚町一六に現住、三十五歳。東京美術鑄造科卒業、現在香川縣立工藝學校教諭の職にあり。

北原千祿

號は千祿、高松市の出身、東京府下巢鴨町上駒込三九〇に現住、四十五歳。香川縣工藝學校出身、東京美術卒業後東京府立工藝學校教諭たりしことあり、有名なる工藝展覽會の審査員として又工人社を主宰し帝展特選(二回)となる。

山貞

山貞の對ニ傳フテ、...

山貞

讀校人名辭書

ユ之部

由佐氏

景豊後の役に戦死す、季子久右衛門生駒氏に仕ふと云ふ、由佐氏は代々繼續し當村に居れり、今の村長由佐圭太郎氏は其末裔なりと云ふ。

由良遠江

山田郡上田井村由良山城主、蓋し十河氏の麾下ならん、天正前の人。

由佐貞幹

名は貞幹、香川郡由佐の人、天保頃歌を詠す、栗洞展観録にあり。

由佐敬之

名は敬之、香川郡由佐の人、天保頃歌を詠す、栗洞展観録にあり。

雪田番女

雪は山田郡(木田郡)西植田村字稗山、南直次の女、幼より性、貞潔孝心深し、家貧窮にして常に人に備はれて生計を立つ、然るに父罪を犯して刑死されんとす、雪悲嘆やるせなく代つて刑死されんことを哀訴す、時に明治五年にして雪女二十三歳のときなり、されど公法破り難く、吏懇にさとして解得せしむ、と云へども人々をして哀泣悲痛せしむ、至孝の者なるにより名東縣より金五圓を賜ひて褒賞す。

メ之部

妙 瑞

高野山學匠、字は慧課、讚州三野郡の人、姓は田淵氏、十二歳同國威徳院に於て慧了に従つて薙髮す、後ち登山交衆し、寶嚴寺に住す、後ち如意輪寺へ轉住し、英同に中院西院の法を受け、又安流を維實に傳受し、小島流を南院教榮に受く、寛保三年九月進具、圓通寺を嗣ぎ、兼て和州久米寺及弘福寺に住し、又勸流を東寺賢賢に受く、撰ぶ所の大疏鈔卷、寶鑰見光、鈔三卷等二百有餘卷あり、享保五年寂す。

高野山學匠、字は慧課、讚州三野郡の人、姓は田淵氏、十二歳同國威徳院に於て慧了に従つて薙髮す、後ち登山交衆し、寶嚴寺に住す、後ち如意輪寺へ轉住し、英同に中院西院の法を受け、又安流を維實に傳受し、小島流を南院教榮に受く、寛保三年九月進具、圓通寺を嗣ぎ、兼て和州久米寺及弘福寺に住し、又勸流を東寺賢賢に受く、撰ぶ所の大疏鈔卷、寶鑰見光、鈔三卷等二百有餘卷あり、享保五年寂す。

ミ之部

三井 大炊貞次

琴平町西山城の城主なり、天正前の人。

三好 隼人佐

隼人佐は十河存保の老臣にして平木城主なりしが、天正十年八月頃は存保の名代として十河城に居たりしが、同十一年五月土佐元親に迫られ庵治浦へ退き、後ち備前へ遁れたりと云ふ。

三木 高長

三木の郡主は三木紀伊守橋高長也、初め高岡村に居城せしが其後平木村に移り居城す、故に俗平木殿と稱す、然るに高長三木全郡を領するに非ず、朝倉村池戸村等は夫々城主あり、除外されたり、此人は長祿頃歿して其嗣絶ゆ、因て安富氏其後を承け平木を居城とせしが後ち盛方の時に至り虎丸城に移りたり。

三谷 出羽入道

木田郡阪元出羽城の城主なり、天正頃の人。

(参照) 出羽城阪元に在り、三谷出羽入道之に居れり。

### 三野高包外四氏

高包は三郎太夫と稱し、壽永年間に於ける三豊郡勝間城主なり、壽永三年源平戦の起るや左の諸氏と共に平家に背いて、源氏に應じ軍勢を率ひて都に上つた、此等も皆同族にして三豊の住人なりしならん。三野首領盛資、三野九郎有忠、三野首領太郎、同 次郎

### 其一 三野大炊頭

三野家に三野物部にして代々讃州に采地あり西讃の豪族なり其系統高親に出づ元暦元年綾高親が三野郡大領に任ぜられしより姓を三野と稱す、菊右衛門は其嫡流なり、父を大炊と稱し詫間村に居りしもの、如し、大炊は足利將軍義輝の時軍法違反の罪により采地を没收せられ浪々の身となりたり。

### 其二 三野菊右衛門

菊右衛門は三野大炊の子なり、性勇猛にして香川信景の老臣となり、左記の如く各地に轉戦して功あり、香川家亡び仙石秀久讃岐に封ぜらるゝに及び、三野郡に退きて郡司となる次で、生駒近矩當國に封ぜらるゝに及び天正十七年菊右衛門父子六人を召抱へ、左の祿高を給せられたり。

三野千石菊右衛門、千石四郎左衛門、二百石嫡子孫之尉弟理兵衛(淺野村に知行あり)四百石庄左衛門

(寛永十二年十月癸) 嫡子權六、四百石彌右衛門。

菊右衛門は香川氏の部下にして天正三年頃の勝間城主、同年金倉顯忠を征する時一方の大將たり、香川之景の老臣にして天正三年信長の許に使ひせし人、天正七年土佐元親兵を率ひ羽床を攻る時香川氏の命を受け河田七郎兵衛と共に先鋒を勤む、香川氏亡びて後生駒近矩に仕へ祿三千石を以て老臣に召抱へられ、香東郡淺野村に采を受け北の坊に住す、天正十四年十二月秀吉の命を受け、九州島津征討軍に参加し豊後戸次川に於て苦戦せしも身命を全うして歸りたり。

### 其三 三野四郎左衛門

四郎左衛門は菊右衛門の子なり、初め孫七、父の少年の時土佐へ人質となつて行きたり、祿を受け采を淺野村に食み生駒一正の老臣たり、父に劣らざる勇士なりしと見へ關ヶ原の戦に生駒一正に従ひ、田中兵部大輔金吉法印と共に石田三成の本陣に向ひ突撃し、四郎左衛門等必死に首を争うて一正を助けて奮戦し忽ちにして石田の軍を撃破し、島左近蒲生備中父子戦死す。一説に一正は大谷刑部松尾山より討下る先手と戦ふ、此時四郎左衛門は刑部の部將大谷源左衛門を組打にし仍つて一正より感状を賜はりしと。

四郎左衛門は天正の末祿千石、弟共は二百石より五百石迄にて生駒高俊へ召抱へられ高俊の國家老となり、政務を預り居りしが高俊國除の際政事向作法不正の爲め、寛永十七年八月丹州宮津京極丹後守に預けられしも正義派たりしたため、旗下預の待遇を受けたり、後豫州松山へ五百人扶持にて召抱へられしと云ふ、讃州府志に據ると四郎左衛門は生駒四君に歴事し、寛永十九年四月三日豫州に於て歿し

法名を月山宗園居士と云ひ寺町地藏寺に位牌ありと、而して四郎左衛門以下の系左の如し。  
子孫之尉あり、生駒家にて二千石を領したり、寛永十二年十月四郎左衛門弟庄左衛門病死す、嫡子  
權六其時十八才にして能き生立なりしも助左衛門遺恨を以て本知四百石の内那珂郡三條村にて百石  
を没收し、香川郡川部村二百石計を宛行ふ、依て四郎左衛門一類不平なり、理兵衛は四郎左衛門弟  
にて庄左衛門には兄也、弟彌右衛門、庄左衛門四百石、理兵衛は兄ながらも二百石淺野村にて知行  
ありしも病氣とて二百石没收さる、庄左衛門は一番組を勤め栗熊東村にて當分五十石、寛永二年病  
死し跡は浪人となれり。

### 三谷掃部景晴と其子孫

三谷掃部景晴、通稱彌七郎(後兵庫)は木田郡池田山の城一に王佐山城の城主なり。  
(参照) 池田山城は池田村にあり、王佐山東の小岡ならんかと全讃史には言へり、三谷掃部景廣之れ  
に居れり、景廣曾祖三谷彌七郎景晴射術を能くす後花園院、永享二年京師に參勤す其時奉勅、妖鳥  
を禁中に射る、その功源三位頼政に比す、帝之を嘉し兵庫頭に任ず、是より兵庫頭と稱す、彌七郎  
を三谷氏の通名とせり、景晴後名古屋の役(尾張)に戦死す。

### 三谷景久

景久は景晴の子なり、驍勇にして善く戦ふ、文明元年九月廿五日寒川左馬允が居城に押寄せ夜戦をな  
し民屋を放火す、寒川氏怒りて文明二年十一月十九日三谷の城に寄せ來る景久と抗戦せしも敗れ走り

て王佐山の城に入る、寒川氏三谷を放火して王佐山の城を攻む、城險しく守備かたし、戦を交へしも  
味方死傷者多く遂に抜く能はずして退く。

### 三谷景廣

景久の子なり、京師に於て細川政元害に遇ふの後香西氏と好からず、永正五年香西氏二千五百人を率  
て山田郡に入り、三谷の城に押寄せ四面より圍む、景廣逃れて王佐山の城に立籠りて拒守の備をなす  
香西氏城兵の少きを侮り追手搦手より攻上る、景久搦手の敵近づきたる時、堀の手の釣石を切り落せ  
しかば若干の兵石にうたれて死傷せり、平尾より攻上りたるものは輪木を切り落とされて死するもの  
少なからず、追手の攻口は上るべき方便もなく、彼是する内に日も暮れかゝりぬれば軍を收めんとす  
る處に城兵今は得たりとこゝかしこより礮を打て攻め合ふ事七八度に及べり、日既に暮ぬれば相圖の  
螺を吹て攻手次第に引上ぐるを城兵四方八面より関を上げ攻め寄するにより、城兵隊を亂して敗れ走  
り死傷七八十人餘とぞ聞えし。

景久の子兵庫頭光廣、光廣の子掃部頭景廣の世に至り、長曾我部氏由佐秀武をして攻めしむ、是れ  
と坂本河原に戦ひ軍敗れて滅びたり。

西讃府志には三谷氏は、景辰の弟景之(一に景隆に作る)三谷の城に居り三谷八郎と稱す、景之の子  
又五郎景包、景包の子彌七郎景晴といへりとあり。

縣史には三谷の本城を三谷の城となせども、讃州府志並に名勝圖會には池田山城となせり、現に兵  
庫頭の墓が池田に在りしを見れば此城を三谷の本城となす方正當ならんか、因に三谷兵庫頭景晴の

三谷掃部左衛門は木田郡三谷の城主にして、有名なる弓の名人、彌七景晴の後なり、香西氏の老臣にして元成、元載、佳清の三世に仕へて其戰場に外るゝことなし。

### 三谷掃部左衛門

天正十年八月五日土佐軍進入の時西光寺前第二陣の軍使を爲せし人。天正十三年香西氏滅びて浪人すと、されど百六歳以上長命せりと云ふ。

### 宮脇織部

香川郡松繩城の城主なり、讃州府志に曰く、松繩城には宮脇織部之に居れり。宮脇六太夫及びその支流多し、宮脇氏の祖に熊野清光と云ふものあり、熊野權現と共に田中村に居る、中頃十河(山田)に徙り後ち松繩に住し、同時に熊野權現も遷せり、即ち宮脇氏の祖なり。

### 宮脇長貞

其先は紀州藤代の人也、應仁二年讃州香東郡宮脇村に來住し、姓を宮脇と更め香東郡松繩村に築き野原庄(宮脇、上村、中村、中黒)太田庄(松繩、太田、伏石)の七村を領せり、絞所藤丸内に叶字也とあり

### 宮脇元長

元長は彈正、後兵庫と改め又半入齋と號す、長貞の子なり、十三歳の時安原國廣の養子となりしが山家住居がいやになり逃げ歸り後ち常州に遊び佐竹家に仕へ、五年を経て歸り香東郡高丸小竹砦に住す天文中同所に於て歿す、其戰績左の如し。

### 宮脇義長

永正三年細川讚岐守六郎澄元阿州勢を率ひて山田郡に來陣す、元長二百餘騎に將として細川氏と戦ひ大に之を敗る、同五年香西元定軍を山田郡に發し元長に兵二百餘騎を授け勝を得た。天文十八年香西元成細川氏の爲めに五畿内に出張した時、元長は讃料城に入り元定に代り軍務を指揮して勇名を四方に顯はしたり。

### 宮脇長利

又兵衛と稱し後頼母之助又長門と號す、彈正の弟なり、永祿年中織田信長に屬し天王寺に住す、荒木村重の反するや信長の命を受け是を討ち功あり、天正中光秀の信長を弑するや秀吉に屬し山崎に於て勇戦す、秀吉より即時の賞として長刀を受く、後天正八年播州大守池田信輝に仕ふ、同十九年八月五日岡山に於て歿す、子長重、其子長信、其子長治等皆池田家に仕ふ。



俊に仕へ秩千石を給ふ、寛永十七年前野助左衛門と中悪くして浪人し因州の池田家に仕へ、寛永十三年十一月十九日因州にて歿す、年五十五。

### 宮脇彈正と兵庫

初め若狭後ち彈正と稱す、元長の子にして松繩の城主なり、元龜元年香西元載に屬し手勢數百人を率ひ備前兒島に至り加陽の城を攻め大に武勇を顯はす、天正十年土佐元親の大軍綾郡に攻入の時弟兵庫と俱に香川信景の兵と戦て大に之を敗る、天正末年頃の人なり。妹某は香西氏の老臣植松備後の妻なり。其戦績左の如し。

天正十年八月五日土佐軍香西へ進入の時西光寺前の先鋒を爲せり、天正十三年五月佳清が香西を引揚げ長尾に移る時盡力せり。

兵庫は長治と稱し元長の末子なり兄と俱に松繩に住し、同一行動をとりし人なり。

### 宮武 六右衛門

香西氏の部將なり、天正十年八月五日土佐軍進入の時天神郭を守りし人、六右衛門は銃砲の上手なれば敵數人打落し敵又乗入る時鎗を取て突落し、後太刀にて數人切伏せ手を負せて戦死す。天正中宮武氏の女某上笠居村養福寺主教順の妻となると云ふ。

### 宮本 助左衛門

其弟作右衛門鹽飽の海賊頭にして本島の人、天正十四年十一月秀吉の命を受け島津征討軍に参加し、讃岐軍人輸送の任務を帯び九州に出張せしが讃岐軍豊後戸次川に於て敗績せしを以て其殘兵を收容し歸國したり、後世に至り本島に宮本傳太夫同傳右衛門等あり其子孫なり。

### 宮本 佐渡守

佐渡守は本島の人秀吉は天正十九年三月十一日に宮本佐渡守に鎧一領を送り、水夫六百五十人船三十二艘を徴發して釜山方面の水先案内たらしめたり。

### 溝口 飛彈

溝口飛彈は木田郡池田村池田城主なり、大日記には溝淵に作る。  
(参照) 池田城、池田村字本村にあり、城屋敷と云ふ、初め池田遠江景光之れに居りしが後溝口飛彈之れを守り、植田氏の麾下なり。

### 三 井 松 堂

名は篤、字は伯敬、通稱光慶、號松堂、高松藩の眼科醫、沖堂に學び詩を能くす、明治初年に歿す、年五十餘。

### 三 井 嘉 暢

名は嘉暢、通稱豊治郎、那珂郡苗田人、寶曆中靜齋に學ぶ、其門人姓名錄にあり。

### 三井雪航

名は重清、字は子潔、通稱隆齋、號を雪航と云ふ、寛政七年那珂郡田村に生る、幼少の時琴平の醫家三井氏を繼ぐ、長するに及び家業を承けて醫業に従ひ、傍ら儒學を修めて名ありしが其の後弘化年間備後に遊び、菅茶山の門に入り學業を大成し、詩文を能くす、頼山陽、篠崎小竹、後藤松陰等と交り詩文を以て應酬し詩客の名を繼にす、晩年學舎を起し子弟を教授し、名付けて正風館と稱せり、地方の學書是れより大いに興起せりと云ふ、嘉永四年六月歿せり、年五十六。著書、雪航翁遺集は嘉永癸丑(六年)暮春後藤松陰が序文を書き而して出版された、其トビラには象山懶雲樓藏版とあり又別に芳怨傳の著あり本書は未刊なり。

### 三井竹莊

通稱莊三郎、諱は子養、竹窓と號す、嘉永五年正月琴平に生る、三井雪航の孫なり、初め醫術を高松の醫師橋尚賢に學び、後東都に遊び漢學を重野成齋に受け、また獨人「ルウトコフ」氏に就きて獨逸語を修め、「ヤウケツコ」に従ふて物理、化學、解剖、生理等の學を研究し、業成り歸つて高松、松山等の病院に勤めて専ら醫業界に盡すところありしが、後琴平に歸りて一醫院を開きて斯業に従事し又此間選ばれて縣會議員となり公益に盡せり、傍ら好みて忠好義烈の詩を賦し文を作るを以て樂みとし其の作るところのもの數百首に上る。又嘗て本郡の勤王家日柳燕石、美馬君田の傳記を作り之を日柳

操志、櫻水操志と號け、明治十八年江湖に頌ち其の英名を後世に傳へたり、明治二十七年六月二十三

日歿す、年四十二。著書、「世に詞を傳へ、山に名を留め、、「世に詞を傳へ、山に名を留め、、「世に詞を傳へ、山に名を留め、

慨然夙欲學英雄。書劍多年西又東。今日回頭眞是夢。空過四十一春風。

### 三井善庵

名は善庵、道安の子にて梅山の弟なり、文化頃眼科醫、浪華に遊び、諸書を參考し、銅關醫通十六卷の著あり。

### 三井金鱗

名は愿、字を文蔚、通稱初め公圭、後秀造、號金鱗、丸龜醫、本那珂郡吉野の人、弱冠醫を大坂吉益氏に學ぶ又長崎にて蘭人シーボルトに就き研究す、業暇詩作す、明治廿三年二月歿す、年八十二。著書、「世に詞を傳へ、山に名を留め、、「世に詞を傳へ、山に名を留め、、「世に詞を傳へ、山に名を留め、

### 三好應岸

通稱又八郎、號應岸、天保弘化頃の人、書を雪溪に學ぶ。

名は興、字を是力、號幸祿、文化頃高松の人、書を能くす、畫譜にあり。

三好 對 鷗

名は暢、字を子美、通稱與市左衛門、號對鷗、高松藩士、漢學は片山恬齋に受く、詩歌書畫俳茶琴棋等皆能くす、慶應頃歿す。谷本雲齋の妹、某家に嫁して離縁となるもの又本に歸る時對鷗之を世話す其狂歌うんさいの底の意は知らねどもこいのもんぢやと思へ妹よ。春曉、一囀嬌鶯呼夢回。春寒爐底火全灰。苦吟昨夜梅花句。忽到今朝入手來。

三好 清次郎

小豆郡草壁村下村の人、屋號をかな屋と云ふ、故に通稱かな清と呼ぶ、燒酎を製し、之れを鬻ぐを業とす、本業の傍ら學を好み書を能くし又俳句に巧みなり、吟詠頗る多し、享和二年に生れ、明治元年九月家に歿す、年六十七。霞章はその俳號なり。

辭世 暮れて行く秋の眺や草もみぢ

三好 信彦

小豆郡草壁村下村の人、家世々福田屋と稱し、雜貨の本店なり、性風流を嗜み殊に俳句を能くし、俳號を可涼と號し吟詠頗る多しと云ふ、明治十六年四月三十日歿す。

辭世 水空蟬の無事なすがたや蓮の上

三好 京太郎

名は義清、殿山と號す、鶴足郡炭所西村の人、其先は阿波三好氏の裔、光清五代の孫なり、幼より學を好む然れども家貧にして學に就く事能はず、日々三好玄忠の塾庭に遊び他人の讀書するを暗記す、某日父に従ひ榎井村に赴き夜中大學を暗誦しつゝ歸る、忽ち後方より聲あり、若輩何をか云ふと、義清徐ろに答ふるに實を以てす、父おくれて至り兒の無禮を謝し熟視すれば則ち日柳燕石なり、曰く敢て無禮なし暫らく此子を余に託せよ、然らば充分教育を加へ一角の人物にせんと云ひければ、則ち燕石の學僕となし、而して後氏は燕石の信任を得て如何なる秘密の席へも出入を許され、天川の役にも燕石の命を受け偵察の爲め行きたりと、燕石没後は東京に至り品川、副島、福羽等の諸氏に交はり國事に盡くさんとせしが眼疾に罹りしを以て已むなく故山に歸り自ら殿山の地九段歩を開き耕樂亭を建て詩歌に親み、文人逸士と交り優悠自適し傍ら郷黨の子弟を薰育しつゝあり。大正十年頃の人、氏は詩歌を能くす、其數積んで數百首に至る、大正十年川崎叱天是れを蒐め殿山雜藻と題して出版せり、其中一二首を左に録す。

世をかこちみくつとなれば久方の月にまかへる胸の白玉

韓國 合邦

日東政化及韓民。事々仁々月々新。八道風光收掌上。正知萬里太平春。

三 好 良 好

高松の人、漢學を講道館に學び、明治の初年由良神社の神官たり、翠廬舎と稱し歌を能くす、大正十五年四月二十四日歿す、年七十四。  
六道 いきしにのちまたいくたひゆきかへりむつのみちにしまよふばかりそ

三 好 元 好

元八郎と稱し、白櫻、撫松と稱し、元と高松藩の時代警察方の掛の方なり歌を能くし、京都の歌人忠秋を師とし雷名あり、晩年多く歌を作られ、安政五年四月廿一日生れて、大正二年十月六日歿す、年九十三歳。元好の各歌二首左に掲げり、  
喜美とわれ万都たけ梅に祝ひつる  
あめ茂とともに幾代経哉  
いゝるかへぬみきりの竹に千代込て  
君か齡ひの久しかるらん

三 宅 師 鉦

名は師鉦、通稱十太夫、高松人、明治元年正月松平頼聰の家老となる、歌を尙輔に學ぶ、明治三十年頃歿す、海上雁、ほに上げて来る聲遠の初雁の八重の鹽路のあけぼの、空、中村尙輔判四十二番歌合にあり。

三 崎 龜 之 助

龜之助は安政五年一月丸龜に生る、幼より學を好み、性快瀾大志あり、明治十七年帝國大學法科を卒業し法學士の稱號を得、直ちに外務省御用掛となり尋て外務書記生として米國公使館に在動す、後交際官試補となり更に公使館書記官に任し華盛頓府に在動せり、爾來外務省參事官、内務省縣治局長に歴任す、明治二十三年以降香川縣第四區より衆議院議員に當選せしこと三回才名頗る政海に鳴る、此間東京法學院其他各法律學校に出講し國際公法の著あり、廿九年貴族院に勅任せられ、又横濱正金銀行副頭取となり、財界に盡す處ありしが明治三十九年三月十六日前途有爲の才を懷て病歿せり、享年四十九。

讀米國史 よむまにまのあたりみるむかし人よくものせりふみの跡かな

三 木 雲 門

名毅、字士訥、通稱宗太夫、號雲門、三木武啓の弟、高松藩儒、寛玩卒の師なり、寛政元年講道館督學たり同十一年三月歿す、著書四書類編(三冊板本)あり、天保六年深井修之に跋して雲門先師歿後數十年後嗣華陰出版せし由いへり。

### 三木半村

名は篤、字周祐、通稱彌總左衛門、號半村又鷗洲、高松藩儒、亭號山高水長亭、文化十二年講道館總裁久保城山に學び詩を能くす、晩年釣を樂む、嘉永中歿す、著書、天保八年歿乃一聲集を發行す。

### 三木據徳

名は初め游藝、後ち據徳、通稱初め勘四郎後ち宗太夫、同姓武啓三男、雲門の養子、文化十年講道館講釋、天保六年使番、七年六月歿す。

### 三木分流

小豆郡池田村の人、名は審、字は君井、宋庵齋、暮川と號す、又雪溪の別號あり。元阿波の藩士、幼より畫を好み壯なるに及んで京都に遊び又江戸に適き清人宋紫石の門に入る、業成るの後本村に來りて光明寺に寓し悠々筆を揮つて年を閑し遂に留て家を成せり、寫生に長じ殊に動物を畫くに巧なり、就中鯛魚及曼荼羅は佳中の佳なり、丹精を凝らせし一軸の鯛魚一夜猫の襲ふ所なりしとすら傳へる。實に本島畫工の嚆矢なり、其の逸品は光明寺及香川郡の某寺に遺れり、其の外遺墨少からず寛政十一年七月歿す、年八十四。  
(小豆郡史)

### 三木算柳

小豆郡池田村北池の人、幼にして畫を好み寫生畫最も巧みなり、龜山神社々頭の扁額張飛の畫は最も丹精を盡せしもの年代を審かにせずと雖も、或は三木分流の舍弟なりしと云ふ、畫號を楚江齋峯寫と云ふ。  
(小豆郡史)

### 三木貫朔

小豆郡福田村の人、壯にして醫に志し大阪に遊んで醫學を研鑽し、業成り歸郷し開業大に仁術を施す本業の傍ら心を公共事業に傾け學校建築費の爲め官林拂下をなしたるを始とし、明治五年以來村役人副戸長、學區世話係、村惣代、醫務調査係、戸長、勸業世話係、郡醫學務委員等の名譽職に任じ各其の任を全ふす、明治十九年皇居御造營に付き獻金をなし又木村に石材御用を命ぜられしかば最も周旋に努む、且つ勤王家田中河内介の建碑に付奔走至らざるなし、餘暇を以て書畫俳諧茶花香曲の遊藝を樂みとせり、明治三十一年七月十四日歿す、年五十六。  
(小豆郡史)

### 三木受益

名は受益、通稱利平太、高松藩士、歌初は友部方升後中村尙輔に學ぶ、明治三十八年六月歿す、年七十九。養子政輔、通稱政次郎、寺井吉謙の子、亦歌を詠む、受益と同年歿す。年四十五。受益寄松祝松ばかり常盤ならぬと思ひしは君を見あげぬ折にぞありける。

### 三木半雲



棹搖鷗不疑。忘機猶汎汎。一任晚風吹。八十七歳の時紅葉の歌あり、歌は賀茂眞淵に就くといふ。

### 三野 無逸

名は無逸、字仲壽、通稱貞之進、號藻海、象麓の弟、寶曆十年榎井村に生る、父を喜昌と云ふ、齋靜齋に學び詩文を能くす、兄に従ひ高松に移居す、寛政七年十一月十三日歿す、年三十六。著書、藻海文集十卷及び詩書易論語解等若干あり、墓銘は菊池高洲撰す、齋靜齋は安藝人、京都に帷を下し、儒名高し、當時我讀より從學せし者、象麓兄弟其他多し、其名は齋門姓名錄にあり、析衷學は齋氏より傳へたりと見ゆ。

### 三野 有裕

字は有裕、俗稱總八郎と稱す、那珂郡榎井村の人なり、父を喜昌と云ひ兄を伯愼及び無逸とす、友愛に富み兩兄出で仕へ、或は遊學し殘るものは有裕の家に在りて克く父母に仕へ、二兄をして後顧の患なからしめによる、寛政二年九月二日歿す、年二十六。

### 三野 謙谷

名は知彰、字子剛、通稱初新藏後信平、號謙谷、象麓の子、文化六年記録所出仕、家學を承け詩文を能くす、十年栗山異學禁令を行ふ、謙谷從はず高松に退く、廣嶋に遊び杏坪に従ひ、轉じて神邊に至り茶山に學び熟頭となり研學さる事久し、文政十一年復藩に仕へ小寄合となる、嘉永五年七月七日歿す。

す、年七十。曾て絲濱に居り對鶴亭と號す、永富池堤防告成碑文其撰なり、坐臨水石、石奇山亦奇、獨樂只魚知。願借巨靈手。向吾舊硯移。著書及筆記書數多あり、其中重なるもの左の如し。文政三謙谷雜抄、同詩文雜抄、骨董鈔、時賢文集、郭注莊子覆玄要言、齊子傳、觀漁園詩集、齋門姓名錄

### 三野 盤溪

名知充、通稱初辰之助、次信平、後彌兵衛、號磐溪、本高松藩士綾田松峰の次男、謙谷の養子、昌平費に學ぶ、元治元年歸て講道館に出仕す、廢藩後阿野郡富熊に教授し又高松に歸り龜阜校教員となり後榮義塾なる私塾を開く、明治十八年歿す、年五十四。

### 三野 喜敏

名喜敏、安永天明頃靜齋の門人、天明四年喜敏が長藏既往談序を作りて、靜齋の點を乞ひし事あり、長藏は高松村の人。

### 宮井 元錫

諱祖禹、字元錫、通稱清七、鞆足郡川原村の大里正教盛の子なり、年十六にして職事を襲ふ。性慈善に富み施與すること多し、部民懷服す、明治五年十一月十八日歿す、年六十九。

### 宮崎 巴陵

號巴陵、鶴足郡川津人、鶴遊女史の父なり、書を能くす、文化文政頃の人。

宮村忠藏

名は經弼、字は貞幹、號を荆山、性篤實古人の風あり、少きとき京師に遊學して中村惕齋の門に遊ぶ業成つて國に歸り生徒を教授す、母に仕へて孝なり、人の嘉言善行を聞き感奮して自ら勵みしと、元文三年戊午五月二十三日歿す、享年六十七。室磯貝氏一男を擧げしが歿して後なし、其の教を受けし者二千餘人あり、中にも青葉内藏助、中村彦三郎、良野平助、菊池八右衛門、各儒を業として名あり中にも公子一風君篤く先生を信じ玉ひ、其御子皆諸侯とならせられ、學校を起し玉ふ、先生の徳の及ぶ所博廣にして人皆知らず惜哉。

(藍窓茶話)

(附記) 忠藏は惠公の時の處士にして慎公及其二弟も教育を受けられたりと云ふ。

宮武青洲

號青洲、文化頃東讀人、書を能くす。

宮武室山

名は展親、字君玉、通稱全吾、號室山、高松藩士、宮武包叔の子、文化五年講道館習字指南、文政九年六月歿す。

宮武七三郎

通稱七三郎、西讀人、菅茶山に從學す、事茶山集に見ゆ。

宮武好水

名は百折、幼名百介、本町川小仙次の子、宮武氏を嗣ぎ醫となる、俳號好水、裾につく袴もどかし里踊、雁なくや朝越寒し箱根山。

宮武丹崖

名は正敏、字孟厚、號丹崖、三野郡比地大村人、應舉に學で書を能くす、文化頃の人。

宮武梅宇

名は高朗、字令終、通稱良齋、高松藩士、冲堂に學ぶ、維新頃の人、年五十餘にて終る。

宮武唯壽

名は唯壽、通稱初正太郎後正朔又正策、號如圭又青邱、高松藩醫正作の子、文久三年奥醫師、明治三十一年五月歿す、年六十七。歌を能くす。



宮武直哉

名は直哉、通稱初正立後尙齋、高松藩醫、嘉永五年表醫師、明治三十七年七月歿す、年六十八。歌は中村尙輔に學ぶ。

宮武七五郎

羽床村小野の人なり、竹内雲崖に就きて射を學び頗る其の術に長ず、高松藩執政木村默老、金毘羅參詣の途中竹内太長次宅に投宿して古物古書畫を觀、翌朝七五郎を召して射を命ず、七五郎は鏢鏢たる老翁にて鵜衣袴を着し四矢を發す、皆鶴に入る、尋て大的を射十二を發し鶴の中央より上下左右に十字形に貫通し、矢場の貫通點の距離毫釐も違はず、默老之れを見て大いにその妙を嘆賞し、尙種々射術の奥儀を聽いて歸りたりと云ふ、文化文政頃の人。

密成

字密成、俗姓小西、三野郡人、備中にて僧となる、嚴島に廣島に轉住す、天台教を學ぶ、又西山拙齋に經史を受く、嘉永四年九月寂す、年七十六。著書、神國決疑編考證等十餘部あり。某書に僧敏とあるは此人にて敏は二字名の略せるなり。

宮本綾一浦

宮本璋庵

通稱直一郎、綾浦と號す、鶴足郡川津人、書を初め黒田綾山に後中川馬嶺に學び能くす、嘉永頃の人、名は璋庵、字繩祖、通稱敬哉、號璋庵又六六洞天、晚年依竹編史又風月翁と號す、本琴彈山下の人、富山潛齋に招かれ高松に移る、詩文は中井竹山に、畫は介石に學び山水特に妙なり。嘉永三年五月高松に於て歿す、年七十五。墓は萬日に在り、茶山集に宮敬哉、昇平樂事集に、宮繩祖とあり、名璋庵未詳姑く某書に依る、畫譜に城矩とあり、此人の事にて城は其本姓などにや。

宮脇長孝

名は長孝、文化頃東讀人、歌を能くす。

宮本信義

名は信義、通稱牧郎、香川郡宮脇人、歌を能くす、琴平神社主典となる、明治四十四年十一月歿す、年五十九。寄松祝、動きなき巖に根ざす高松の千年を君が齡ともがな

### 宮田英太郎

(來寓人)

氏は大分縣宇佐町御幡高卿氏の長男にして、少壯笈を負ふて東都に出で刻苦精勵司法省法學院に入り佛人ボアソナード氏の薫陶を受け、業成るの後判官に任ぜられ、明治二十年高松地方裁判所に來任し爾後大阪、宮津、淡路等の各地方裁判所に歴任し、大正二年退いて高松市に來り濱ノ丁に寓居し、後辯護士となり優悠傍ら自適吟哦に耽り居りしが大正六年十一月十八日病歿せり、享年五十六。

### 宮崎熊三郎

氏は綾歌郡坂出町寺町の人、夙に教育界に身を投じ、縣下斯界の重鎮として重きを爲しその教鞭をとれる、坂出尋常高等小學校は模範學校として文部省より薦奨され、身は奏任官の待遇を受け在職正に三十年に及び、門下に多くの俊才を出し弘く徳化を布いた温良の君子であつたが、教育界を去つて後は録田共濟會に入り専ら育英及び救濟事業に盡す、傍ら坂出銀行の行務を督してゐたが大正十年三月十七日歿す、年五十三。

### 宮野海石

名は爲久或は略して宮劣、號海石、梅蕉園、鶯居とも云ふ。播洲姫路の藩士、少壯三豊郡常磐村に來寓す、漢詩文、和歌、俳句、繪畫等文藝方面に涉り何れも能くせざるなし、後坂出に移居し、明治四十二年迄坂出町役場の助役を勤め居たり。漢學は明治十三年に豊後日田に至り廣瀬林外に就き學び

繪畫は初め原春暈、後京都淺井柳塘(白山)に學び俳句は別に師事する所なく一家を成し、梅蕉園鶯居

と稱し、坂出に於て芙蓉俳壇を組織し數多の門人あり、嘗て花の本聴秋より免狀を受けしも聴秋の人物に嫌たらざる所ありて幾許もなく之を聴秋に返せり、晩年病の爲め意氣前日の如くならざれども尙文事に親しみつゝありしが、昭和二年八月十五日腦溢血にかゝり齡七十歳を以て逝けり。

### 明了 (且過庵)

明了は宇多津の人なり、一夜夢に武藏守頼之召して我が念持の觀世音京師にあり、汝往いて取來れと云ふに、やがて其處に至り山門に入りけるに岩窟中に其像あり、明了は背負つて歸り頼之に獻す、寤て怪しきことに思ひしに翌日武藏守明了に命じて攝津國鈴羊谷に行て絶海師を召せしむ、明了命を受けて鈴羊谷に至れば其處前に夢見し所に違はず、聞く人皆明了を稱して道納ありと云ふ。

### 明印法師

法師は大内郡長尾東村、寶藏院の住僧なり、碩學の聞えあり、仁和年間官公の當國に守たるとき此寺に遊び詩文の贈答あり、後延喜二年公築紫へ左遷さるとき、明印小舟に搭じ公を房前の浦に迎ひ詩一詩を呈す、其後半に曰く「不期天上一月月、忽入海西萬里雲」と公之れを見て別れを惜まれしと云

ふ、明印は延喜八年秋七月十八日寂す。延喜七年五月明印寶善寺を神前村に神創す。

明 範

明範は寒川郡石田村極樂寺主範傳の弟子なり、建武四年冬十月十八日院主となる、其小歴左の如し。建武六年春二月讃州兵亂により寺を長尾吉祥院に移し寶藏院と號す、同年秋七月亂兵寺社頽を削る。正平十二年秋七月二十四日曾て親交ありし細川相模守清氏綾郡高屋にて戦死せしを以て其遺骸を收容し、引導を爲し三木郡高岡白山に葬る、かくて明範は天授二年(五六歳)四月十二日入寂せり。

明 珍 宗 春

公は宗知、(通稱琢磨、七十一歳にして歿す)の子にして天保十四年十一月十五日高松に生る、幼名七五三、稍や長じて卯次郎と改め後更に宗春と稱す、人と爲り豪膽細心甲冑作製の技に秀で、年少已に名を爲す、萬延元年(十八才)江戸に遊び十ヶ年間甲冑煉煉の業を研究し、明治二年歸郷自ら作る處の兜面鏡を藩主に献じ、家祿を下附さる、維新後甲冑等の需用絶へたるを以て時代の推移を達觀し煉鐵を以て香爐花瓶其他室内用品を製作し大に社會に歡迎さる、翁今や年齢九十三歳に達するも矍鑠壯者を凌ぐの概あり、日々工場へ入り製作にいそしみ居れり。翁の家太祖は増田と稱し第三十二世宗介(文治年間の人)に至り明珍と改め第五十八世宗妙の子宗最が享和元年九月十六日江戸より讃州に移り九十四歳を以て歿す、爾後宗知、宗春、宗正皆な父祖の業を

續ぎ現今に至る。

翁の作品にして皇室にお買上の榮を得たるもの其他著名品左の如し。古時、紀元千八百九十四年米國シカゴ市に於て開催の關龍世界博覽會に於て名譽賞狀を受く。松平頼壽伯の命により軍神指揮金杖を製し藩祖廟に納む。明治卅六年春宮殿下當縣へ行啓の時鐵香爐を製作し本縣より献上す。明治四十三年大演習の際岡山大本營に於て天覽を賜ひたる蓮葉式饌盒御買上の光榮を賜ふ。大正四年御大典奉祝記念として本縣より献上すべき鐵製花瓶一對を謹製す。同上の際市より献納の火焰式香爐を製作す。大正八年兵庫縣へ行幸の際三徳式天下泰平鼎を献納せり。大正十一年攝政殿下香川縣へ行啓の際蝦鞘短刀を献納せり。

港 百 助

小豆郡福田村の人、諱は宗貞、九左衛門宗正の長子なり、伯父平井氏政、富士の潮侵漁事件に關して幕府に召され下民を煽動せりとの咎を以て斬罪となり。池田村江尻村の濱の露と消へ、尋て父宗正之に連り、正徳二年高松藩の獄中にて毒殺せられ、其の家闕所となる、宗貞性沈毅豪勇當時年尚ほ幼かりしと雖も、慈母の悲憤の狀を傍觀するに忍びず、決然家を脱して具に辛酸苦楚を嘗めて幾多の歲月を海道驛路に送り遂に江戸に達し臥薪嘗膽豫て父及び伯父の讐敵と目せし某藩士を吉原某樓浴場内に殺害したり。時正徳五年歲僅かに十八なり、其後常陸國筑波郡谷原領小張下福田村に赴き、名主吉葉藤三郎の養嗣子となり、名を太右衛門と改め後ち家督相續の上更に喜左衛門と改名し、家運益々榮達せりといふ、明和年間に歿す。

港 九左衛門

小豆郡福田村の人、元祿寶永頃の大里正にして、人と爲り沈毅勇敢、池田郷大里正平井兵左衛門氏政の妹を娶る、因て氏政と親みて善し、氏政幕府に召さるゝや同志たりとの嫌疑を以て高松藩の獄に繋かれ氏政が斬刑に處せらるゝの後獄中にて毒殺せらるゝ、實に正徳二年十二月二十八日なり。(小豆郡史)

水野 金七

小豆郡西村字水木の人、幼にして父を失ひ、母に従ひて夙夜致々山に樵り野に耕し海に漁して具さに辛酸を嘗め家業に熱中す、性理財の術に長ぜしを以て産を治め家を興し遂に郡内屈指の富を重ぬる至る、其の醤油製造に従事するや、明治二年僅に石高六十石なりしも三十八年に至つては二千三百石に達せり。其他諸會社の經營に投資するもの夥からず、發明計畫研究せし事項及び公共團體の爲めに盡瘁せしこと枚擧に遑あらず、明治三十九年十二月十三日歿す、年六十八。

水野 秋彦

諱は秋彦、通稱を瀧之助、二峯と號す、常陸國笠間郡稻田村郷士、世々笠間の藩臣にして父を水野半仙(諱清重)と云ふ、幼より穎悟にして異才あり、初め小川容齋に就きて經書を學び、後國典を三村安臣、鬼澤大海、加藤千浪に受け、和漢の學に達せり。後磐前縣屬郡々古別神社權宮司等となり、後又職を辭して郷里に於て子弟を教養しつゝありしが、明治十二年金刀比羅明道館の招聘に應じ來りて其

の長となり、國典科を擔任して二百の子弟を教養せり、明治二十二年十一月廿五日病歿す、年四十一著書、延喜式祝詞詔語解四冊あり。

源 利方

名は利方、丸龜藩士、江戸にて津輕侯家臣藤原尙賢に書を習ふ事三年、楷に長ず、寛政六年嘗公書法華經を模寫す、無逸之に題す、姓常には源に非ざるべけれど未詳なる故に此處に入る。

溝口 萬年

通稱要藏、號萬年、鶴足郡西二村の人、東野の高弟なり、東野の子萬年天す、因て其名を襲ぐ、明治十二年六月歿す、年七十一。

箕輪 彌六

名は彌六、高松の人、書を能くし源英公の右筆となり祿五十石を受く、其能を自負して樂まず遂に仕を辭し、江戸に行き遂に同所に於て歿すと云ふ。

美馬 君田

名は諧、字は和甫、通稱授造、初め三嶺と號し後君田と號す、入獄するに及び櫻水と改め晩年には休

翁と號す、阿波國美馬郡重清村の人、幼より郡里村願勝寺に入り弟子となり釋典を學び、傍ら美馬太玄に従つて經史を學ぶ、好んで華嚴維摩を讀む、又書畫和歌詩文等を研究す、安政元年の秋一朝感する所あり還俗して姓を美馬と改め、飄然四方に歴遊し、以て士風國政を觀察し、俊髦奇傑の士を求めて之に交る、長門人高杉晋作土佐人坂本龍馬と最も親しみ善し、安政四年の冬外艦浦賀港に泊し、海内騷然たゞ孝明天皇深く之を憂ひさせ給ふ、援造ほのかに傳へ聞き諸國に奔走し以て尊攘の大義を鼓舞す、既にして四方輻輳の境は以て天下の形勢を察するに足るとし、安政六年讃岐國琴平に來り住す、金山寺町の一陋屋を賃し筆耕硯田し以て生計を營む、偶高杉晋作、桂小五郎長門より琴平に來り寓す、援造日柳耕吉、植田宗平等と共に之と相往來し、文酒を以て交を結び互に肝膽を吐露し、謀て將に皇運を振興せんとす、幾もなく晋作小五郎等歸國し宗平去つて長門に入る、援造燕石と共に天下の形勢を長門に漏し以て尊攘の計を爲す、慶應元年幕府益々横暴にして邊海屢々警す、援造憤慨に堪へず益々慷慨の士と交り遂に高松藩の嫌疑に觸れ、燕石と同日縛に遭ひ高松の獄に投ぜられ、縲絏四年辛楚をなめしも憂國の氣少しも挫けず、憂國文を作り時弊を痛論せり、明治元年官師賊軍を鳥羽伏見に破りて大に勝つ、此に至り世局一變し援造漸く出獄す、朝野其入つて大政に參するを望む、援造慨然として曰く「余もと微賤にして聖恩を蒙り青天白日の身となる因つて殘賊を誅し功績を立て以つて其恩に報ぜん」と乃ち將に劍を抜き燕石と共に上京せんとす、而して不幸疾病に罹り遂に果すことを得ず、爾後身體羸瘦英氣大に衰へ自ら爲す可らざるを知り、帷を琴平に下し生徒に授く、其の書を講ずるや聲を抗し辯を飾る等のことなく、恂々として講話するが如く蘊を摘發し、人をして得せしめ而して後止む、門弟の詩文稍々觀るべきものあれば嘆賞して置かず、拙陋の作と雖も反覆改削して朱黃

爛然必ず意の如くして而して止む、君田書畫詩歌俳句等を能くす、詩は詠史畫をは氣韻を主と爲す、俳句は土佛と號し又驚物と歎せるもあり、明治七年七月中澁偶々痲疾再び發し同月廿七日を以て歿す、臨終に臨み胸をうち大息して曰く「男子尸を包む馬革を以てせずして枉席上に徒死す寔に恥すべし」と享年六十有三、明治三十六年十一月十三日特旨を以て正五位を贈らる。墓は琴平西山墓地にあり。

宮脇探水

丸龜渡し場の人、俳句を能くす又畫も能くす、安政五年出版の玉藻日記に深水筆の畫いつ、又志度林氏所藏の西讃人合作中にも動物の畫見ゆ、嘉永頃の人、秋風や戸口まで來る沙明り

宮武芦秋

友一と云ふ、高松の人なり、畫を中川愛山に學ぶ、天保十三年二月生る、久米喜代助の男なり。

宮武瑞嶺

香川郡池西村の人、初め南岳と稱し、幼より畫を好み富田觀星に就き修業し、後南北混合の畫を畫く成年の頃京師に上り某畫師に就きて修業し、業成りて諸國を巡遊す、山水人物はその得意とする處なり、斯くて揮毫に従事せしが大正十一年九州佐賀より歸りて病に臥し、同年十二月五日終に逝けり、享年五十三。

宮武

### 宮武梅嶺

通稱秀三郎、一得齋又梅嶺と號す、高松市天神前の人、明治初年高松總卓校の教員となり後香川郡書記に轉ず初め詩文を梅村に、書を森良敬に後和歌を堀秀成に學び能くす、明治十七八年頃郡書記を辭し、風流の道を楽しみ優遊自適せしが大正十二年七月十五日歿す、年七十四。

### 三土謙三

諱武剛、號鼓丘、傳左衛門の子、綾歌郡西庄村の里正たり、後戸長を勤め武技劍道に達し傍ら儒學等に通じ郷黨に重んぜらる、明治十五年一月十八日歿す、年六十五。

### 三土梅堂

諱宣、字元節、號梅堂、通稱幸太郎、綾歌郡西庄村の人、謙三の子なり、幼より學を好み秋山嚴山、富家松浦、片山冲堂の三氏に就き和漢學を修め、後東京に至り川田甕江の門に遊び經史を究め、業成り名古屋藩に聘せられ、後歸郷し坂出公學校長、飯山中學校長、丸龜中學校教諭を歴任し、各方面より教育功勞者として表彰され明治四十二年十二月辭職し、悠々詩文に親しみ居りしが大正七年十一月五日高屋に於て歿す、年七十六。著書、樸堂遺稿、近賢要録、玉藻略史あり。

乙卯 新年

十萬紕絳奏凱旋。日章旗輝映晴天。聖明天子揚殊績。遺憾先皇不見旃。

### 三野攝平

諱は知周、字は子車柿堂と號す、慈溪の子なり、性温厚にして家庭に學んで後梅村、冲堂の二翁に學び詩文を能くし且書に巧なり、少壯大阪師範學校を出で香川、大阪、愛媛の師範學校に教鞭をとり、最後に高松市高等小學校の校長として數多の子弟を教育し、令名ありしが後職を辭し、大阪住友家の家庭教師となり、明治四十三年三月上阪し、優悠文墨に親しみ居りしが大正五年二月六日歿せり、年六十二。氏は又書畫鑑定に妙を得一目すれば百發百中誤認なかりしと云ふ。

### 密傳

三豊郡笠岡村長林寺の住職にして、寛延三年七月七義民の助命を乞ひしも許されざりしかば、刑場の土を天神山に移して其英魂を弔ひし奇特の僧なり。

### 光宗

讃岐の刀工、安生太夫と云ひ、業宗の子なり、寛喜年間(今より七百六年前)の人なり。

### 三江

安原枝澄の俳號、高松の人、明治十九年歿す、年七十一。ふさ崎にまかりて、溝に影おかてきゆるや冬の月

御 廐 燒

(彦四郎を見られよ)

明 珍 宗 勗

江戸より來る、代々甲冑師役宗春鍊鐵工藝を以て聞ゆ。開(今より)百八(平藤)の人なり。

宮 武 行 齋

通稱八郎右衛門、藩内種用流鎗術師役、宮武家初代、文化二年十月八日歿す。

光 宗 繁 久

通稱次兵衛、藩の直心影流劍術師役、光宗家初代、文政二年正月二十日歿す。

三 木 嘉 猛

通稱良助、藩の井上流砲術師役、三木家六代目、安政三年九月二十三日歿す、墓は泉立寺にあり初代は半大夫にして三代目嘉利以後は測量術を做ふ。

宮 脇 長 則

通稱雜太郎、藩の佐分利流鎗術師役、宮脇家七代で武名高く文久三年六月仕致初代は文右衛門吉重。

三 好 眞 長

高松市天神前一四九の人、年四十七才なり、東京美術學校金工科を卒業し、東京府立工藝學校教諭に奉職、現在香川縣立工藝學校教諭たり、尙美術品の蒐集家にして斯道の造詣深し。

高松市の出身、二市野雅日六一(現)年二十八才。香川縣立工藝學校出身、東京府立工藝學校

號は雅堂、高松市西内町二五の人、年四十九才。香川縣立工藝學校木彫刻本科卒業し東京美術學校圖案科卒業、石川縣立工業學校教諭拜命、現在香川縣立商品陳列所長の職にありて商工の眼識深く人望あり、氏の作品商工省方面の展覽會並佛國巴里萬國博覽會に出品受賞、書も亦巧にして風流を好み書を餘技として楽しむ。

三 井 犀 二 郎

號は飯山、綾歌郡飯野村の出身にして京都市中京區西ノ京御輿岡町に現住す、年五十二才。資性繪畫を好み弱冠にして南畫を玉洋田村直入先生につき専攻し、目下京都に於ける耆宥たり、令弟は洋畫をよくす、四季旅行して其の技を練り作品亦多し、門弟を指導す。

三 谷 九 八

號は象雲、仲多度郡琴平町の人、年六十五才。東京、名古屋、京都、大阪各地の名家と交際多く書畫の鑑定に妙を得、漢字を能くす、其の作品に受賞するもの多し。

三 井文二

號は一尾、綾歌郡飯野村の出身にして京都市上京區土屋町下長者町上ルに現住す、年四十一才。明治四十二年四月京都關西美術學院入學、大正二年東上、川端畫學校洋畫科入學、大正十年歸京現在に至る。二科展を第一回より第六回、大正十五年十月氏の作品を京都に處女展として開催、昭和二年歸郷し本縣多度津町にて第二回展を發表す、昭和六年二月大阪新燈社美術展覽會の同人となる、氏は三升飯山畫伯の令弟なり。

三 湊弘夫

高松市の出身、神戸市片山町四丁目六に現住す、年二十八才。香川縣立工藝學校を出で東京川端畫學校に遊び、大阪美術學校に學び、信濃橋研究所に學ぶ、後東京に於て意識的構成主義の作品を發表す。文學を良くし、詩文を各誌に發表、各展に毎回出品受賞、帝展にも入選せし事あり。

三 木武吉

早大政治科を卒業す、現代議士民政黨相談役たり、東京市牛込區若松町一四に現住す。

三 木末治郎

奉天取計所、信託取締役外會社重役たり、滿洲國奉天市八幡町五に現住す。

三 土忠造

東京高師卒業、現鐵道大臣、代議士立憲政友會顧問、東京市麴町區一ノ一七(官舎)麻布區廣屋町一六(私宅)

宮武外骨

著述家として有名なり、東京市本郷區龍田町一五に現住せり。

宮武恒造

高松百十四銀行、讚岐信託外二會社重役、高松市外磨屋町五一に住居す。

宮武亮三郎

東大機械科卒業、内務省神戸土木出張所技師、神戸市神戸區山本三ノ一五三に現住す。

宮脇梅吉



東大獨法科卒業、岐阜縣知事、岐阜市京町一に寓す。

宮脇長吉

陸軍士官學校卒業、現代議士、在郷陸軍航空兵大佐、東京市外澁谷町青葉二一に現住す。

宮丸田

宮丸田

三土忠

三木末苗

シ之部 四宮右近之進

右近之進は本信濃國の人、文明年頃讃岐に來つて寒川丹後の老臣となり、引田與治山(攀山)を守り數代續き居りしが其曾孫太郎左衛門光武の代に至り、此城を去りて阿波の武田氏に倚る、是に於て阿波の大川郡史に左の記事あり。

郷社 諏訪神社 造田村

昔永正の頃四宮左近なる者あり、信州より寒川氏に仕へ大内郡安堵城に居り、自ら諏訪大明神の裔と稱せしが、其四世の孫太郎左衛門光武、豊公に従ひ屢々武功ありて末村乙井に封を得たり、茲を以て天正年間信州上諏訪大神の御分神を奉じ來り、當山麓に鎮齋し奉れり云々。

大川郡史萬生寺創立の項に、引田城の城主四宮上總介利之又四宮佐馬佐家福は天文二十年八月十五日入道して萬生寺を再興し永錄二年十一月卒すとあり。

四宮隱岐守其子主計

備前日比の海賊頭にして香西佳清の妻の父なり、天正十四年十一月秀吉公の命を受け島津征討軍に參加し、讃岐軍人輸送の任務を帯び九州に出張せしが、讃岐軍豊後戸次川に於て敗績せしを以て其殘兵を收容し歸國したり。

嶋喜四郎

喜四郎は植松四郎資茂と同時代の人にして、資茂に劣らず強弓の名手たり、或時資茂と弓術の競争せんとして、阿野郡新居村字大谷の山端より香川郡御厩村原引の野中まで八町距て、大的を立て、相併んで射たるに其同じ處に當りしと云ふ、因つて此に矢塚を築きて後の世の證とせりと傳ふ。

(西讃府志、南海治亂記)

(附記) 喜四郎は香川郡の人にして年代は天文頃ならんか。

新名内膳

本名光景と云ふ、藤太夫章隆の裔にして阿野郡新居村菟上山(全讃史鷲山に作る)の城主なり、蓋し香西氏の麾下ならん、天正七年土佐元親に攻められ、羽床氏に扱に依つて土佐方に和平し、天正十年十月中旬土佐軍に加はり十河城攻に出陣せしも、遂に天正十一年五月元親に誘殺され、其跡へは土佐の部將入交藏人を入れ東讃の押へとせり。

新名源左衛門

阿野郡山内村新名柏原城の城主なり、蓋し天正前に於ける香西氏の部下ならん。

白鳥玄蕃

玄蕃は寒川氏の老臣にして白鳥郷に居りし人なり、文明頃より天正頃迄の人。城址は白鳥城東にありたりと傳ふ、蓋し現今城が端と呼べる地ならんかと大川郡史に見へたり。

白鳥永徳

永徳は大内郡松原村一向宗教蓮寺の僧なり、教清と號す、四國靈場を巡拜して終に寺に歸らず安戸海岸の巖窟中に入りて一日一度食を乞ひ巖上に起臥す、隱居五十餘年、世人其の終を知らずと、永徳は天正二年の生れにして元和八年(四十九歳)迄は存命なれば其後歿せしならん。

神内氏

植田吉保の兄次郎景辰を西植田神内に封し築き居れり、因て氏とす、右京進清定に至り木太郷に新城を築て相保てり、植田の内三百石、木太の内七百石を領す、何時亡びしか詳ならず。

神内廣忠及其子孫

神内岩見守廣忠は木田郡神内の城主なり。(参照) 神内城、上東神内にあり、臺山の城と云ふ、元暦年間植田の族岩見守廣忠なる者此城に居れ

り。源平戦争の時源義經に屬して功あり、降りて貞治のとき神内太郎景成あり、天文天正の頃神内右近進景之及後の右近進清定あり、皆相次て之れに居り、一城を木太郷に構へ之れを兼有し、邑を西植田三百石、木太郷七百石凡て一千石を食む、戸田城廢頼と同時に墟となるもの、如し。(讚)

進士隼人佐

隼人佐は奈良元政の重臣なりしが天正七年以來數度土軍の攻むる所となり領土を保守することを得ず遂に主人と共に阿波に奔り三好存保の軍に合し、中富川に於て土軍と交戦し同所に於て晴なる戦死を遂げたり。

丈

愚

丈愚は丸龜善龍寺に住めり、學を好んで多識なり、頗文藻あり詩並に書を能くす、著書數編あり、中にも改悔文の私記、梓に上さすといへども尙世に傳はれり。

周

阿

周阿は香川郡太田村の人なり、前名は伴阿彌と云ふ、其性明秀にして文書に通じ連歌を善くす、康暦元年細川頼之是を進め京都に至り將軍義滿に仕へしめ周阿と改む、賢才を以て世に鳴る。康應頃(五四〇前)年の人。

月夜に頼之の句、靜なる月を都の友もがな

周阿之を續ぐ、萩の錦を君が家苞

周阿の屋敷址

此地今詳ならず周阿初名を近藤平治兵衛盛政と云ふ、後出家して周阿彌と改む、周阿は其略稱なり、

實

淨

高野山學匠、字は眞海、讃岐高松市の人、姓鶴川氏延寶三年を以て生る、年十三蓮花寺翁胤に隨て薙髮す、元祿九年笈を負ふて野山に登り、享保二年安祥寺法流を教榮に受け、三寶院流を榮智に稟け、其奥旨を究む又西元院良容等に就き宗乘の義を研き、元文三年碩學となる、寛保元年快道に隨ひ、庭儀灌頂を元祿四年正月十八日化す、壽七十曾て檀越の請に依りて施餓鬼修習川集三卷を著す、其他述作多し。

守寵(傳燈大師)

守寵俗姓は佐伯氏、延暦三甲子年多度郡に生る、幼より穎悟深く佛道に志し、同二十四年二十二歳にして得度し、法相宗の巨匠たる護命僧正に従ひて、法相宗を學び論辯に長ず、承和の初年傳燈大法師位に任ぜられ、承和八年十二月寂す、行年五十八。

實慧(道興大師)

實慧は俗姓、佐伯氏にして善通寺に生る、幼より學を好み、同族佐伯直、葛野酒麿に就きて儒學を修

し長じて上洛し、空海に従つて兩部の密教を禀け、苦學精進盡し其の秘契を傳へられ東寺の長者となる空海第一の弟子にて學徳兼備の高僧となれり、承和十四年十一月十三日河内國觀心寺に於て寂す。行年六十三、安永三年八月十三日勅して道興大師の謚號を賜ふ。

### 七位坊榮海

榮海は南光坊天海大僧正の弟子にして有徳の僧なるにより、高松藩祖源英公御歸依淺からず、寛永十九年御入國の際召連れられ、香川郡止笠居村藥師寺中興開基の住職とせらる、其頃境内に西岡櫻と云ふ櫻の老樹三株あり、寺主榮海彼岸櫻五十餘株を増植し追々繁茂し、世人は此れを花の藥師七位の櫻と稱し、花時觀覽者多かりしと云ふ、正保頃の人なり。

### 眞

### 然

眞然は俗姓、佐伯氏にして多度郡の人、空海の甥なり、(田公の末男酒麿の子ならん)早くより佛法を尊信し、高野山に登りて大師に侍して密乘を學び、又眞雅に就いて灌頂を受く、大師臨終に際して當山を汝に附囑すと遺言す、仍りて金剛峯寺の造營に力を盡くし幾くもなくして成る、寛平二年僧正に任ぜられ、同三年九月十一日寂す、行年八十八。

### 眞雅(法光大師)

眞雅は佐伯直田公の三男にして延暦二十四年善通寺に生る、空海の實弟なり、十五の年上京して空海

### 眞

### 體

に眞言の法を學び、齋衛三年大僧都に任ぜられ、貞觀元年法印大和尚位を授けられ、貞觀六年僧正となる、同六年轡車を許さる、貞觀十六年春實祚を祝して眞觀寺を建立し自らその寺主となり、元慶三年正月三日遷化す、行年七十九、文政十一年六月二日勅して法光大師の謚を賜ふ。

眞體は俗姓和氣氏、少くして父母を失ひ、空海に従ひて戒を蒙り、天長三年十月八日家資を捨て、佛物として永く神護寺に納れて傳法料として諸靈に薦む、時に至心歸命の人と稱せらるると云ふ。

### 聖寶(理源大師)

聖寶は天長十年鶴足郡狹岑島(仲多度郡與島村)に生る、始め恒蔭と稱す、葛野王の裔、幼より穎悟年十六にして上洛し、眞觀寺に入り眞雅僧正に従て得度し、名を聖寶と改め三論を元興寺の順曉及び圓宗に學び、後玄榮、眞然源仁等に事へ顯密共に通ず名山靈地に遊歴し道路を修繕し、渡し場を設け佛像を作る等頗る福事に勤む、貞觀の末年醍醐寺を創建し僧正となる、延喜九年七月六日普明寺に寂す、行年七十八。應徳元年(白川天皇)勅して理源大師の謚號を賜ふ、著す所の書左の如し。

疏鈔一卷、胎藏次第一卷、五大虚空藏式法一卷、持資金剛次第二帖、如意輪次第一卷、聖寶記一卷等

理源大師の歌

讃岐人名辭書 シ之部

はをはじめるをはてにてながめをかけて時の歌よめと人のいひければよめる  
はなのなかに飽くやとて分けゆけば心ぞ共にちりぬべうなる (古今集)

### 聖 一 國 師

嘉禎元年宗に入り禪山寺に登り、仁治二年に歸朝し東福寺を造る、後弘安三年十月十七日寂す、正和二年國師號を諡る。(辯圓を見よ)

### 七 義 士

寛延二年十月より同三年正月十六日迄の間に、丸龜、多度津兩藩領内の百姓徒黨を換し藩吏の苛酷を訴へて救済方を願ひ出で、願意に聽許されしも左の七氏は強訴の首謀の罪名の下に、同年七月二十八日金倉川原に於て斬罪に處せらる、殊に權右衛門は妻子までも併せて刑場の露と消えぬ、後三疊郡笠岡村天神山に神社を建て、七氏の靈を祀る。權兵衛の辭世に、此世をば泡とみて來し我心民に代りて今日も嬉しき。  
即ち七氏は左の如し。

- 平笠岡(笠田村の内) 大西權兵衛 一平六日二日 碑殿(吉原村の内) 甚右衛門
- 帆山(半郷村の内) 金右衛門 大野(財田大野村の内) 兵治郎
- 三井(四箇村の内) 金右衛門 天神(笠田村の内) 彌太郎

南(笠田村の内) 嘉兵衛 然して此の強訴の首謀者の妻子

權兵衛の長男新五郎(十六才)にして、同妻よね、二男源治郎(十三才)、同三男平七(九才)、同四男龜之助(五才)及び笠岡(笠田村の内)大工平九郎も共に斬せらる。

### 下 津 權 右 衛 門

定公の御時寺社奉行にてありしが恭儉篤實にして母につかへて孝也、年五十餘坐して歌ひ起て舞ひ、母の心を悦ばしめ朝夕定省怠ることなく、みづから母の足を洗ひしと也。(高洲漫筆)

### 七 條 宗 貞

名は宗貞、通稱權藏、高松藩儒者、祿百五十石、子を潤身、孫を權藏といふ、皆詩を能くす、宗貞著書、讀陽簪筆錄。同人會鶴林寺詩、團々離海到天心。不受浮雲一片侵。冷炙殘杯實未散。婢姪彷彿昨猶今。宗貞は福善寺僧の弟にして、林春齋の門人なり、英公に徴さる、節公の師たり。享保頃の人。

### 七 條 耕 岳

號耕岳、文化頃東嶺の人、畫を能くす。

### 十 摩 蘆 洲

有祥と稱す、多度津の人、石原淺治の男にして嘉永六年八月五日に生る、滿を藤田苔石に學びたり。

壽昌院

(京極伊知子を見られよ)

常諦院

名は壽子、有馬中務太夫の女、松平頼熙の室、歌を能くす、明治維新前歿す、院號常諦院といふ、頼熙は(遠公の子見之助)と稱す、弘化三年歿す。

島村默齋

名は信厚、字徳歸、通稱孫太夫、實は岡長孝の弟、文化四年島信亨の養子、高松藩に仕ふ、太田町柯の友にて史籍を研究し、詩書を能くす、天保八年三月歿す、雲井御所の碑は厚の書せしなり。

島田柳圃

號を柳圃、文化頃西讃の人なり。詩書を能くす。

庄太郎

庄太郎は香川郡横井村(池西村)の農夫なり、力田を以て稱せらる、頗る信仰心厚し、親鸞蓮如の教を

奉じ正直にして人を疑はず、穀を賣るにも常に掛目を懸者に任ず、嘗つて法然寺に靈佛靈寶を一般に縦覽せしめしことあり、傍らに戯場及珍禽奇獸の見物あり、同村の者戯場の事を主る、故に錢を出さずして觀る者多し、庄太郎は「俳優業とせるを錢を出さずしてみるは非道なり、然り吾産薄ければみざるに如かず」と過ぎて頓ざりきとなり。

志形秋香

文化頃東讃の人、滿を能くす、竹石展觀錄に松陵(武田)の母とあり。

新莊濱名

名は濱名、天保頃の人、歌を能くす、木村重成、武士の仕ふる道に身はすて操の鏡世々に残しつ

新莊長喜

名は長喜、號三休、通稱太左衛門、天保頃高松の人、歌を能くす、木村重成、畏しな益荒武男の身をすて、君に仕へし赤き心は

柴野彌五右衛門

方高と云ひ惠公の時の郡奉行なり、民の奢靡を憂へ其身至つて質素を守り、常にたゞ人馬に乗て郷中をかけめぐり惰農をいましめ力田を稱しける、故今に至る迄民間の語に五左衛門の「馬の行しだい」

といへり、ある時養笠をきて馬に乗り白鳥の社へ詣けるに、郡方の手代りつばなる裝束して來りけるに彌五右衛門より違に馬上より飛下り、御歴きに對し無禮の段恐入たりと謝ち、下役の手代大に迷惑し赤面して厚く謝し、それより下役の面々かげひなたなく質素を守りしとなり。

柴野彦輔

彦輔(彦助)諱は邦彦、栗山と號す、又號古愚或は古愚軒と云ひ、堂號三近堂と云ふ、元文元年三木郡牟禮村八栗山下に生る、平左衛門軌道の子なり、長じて高松藩儒後藤芝山に學ぶ、芝山賞して我門の顔子と云へり、業成りて京師に寓し經學文章を以て生徒に教授し其名大に聞ゆ、明和四年阿波藩主蜂須賀氏に聘せられ其藩學を振興す、天明八年正月幕府徳川氏に召されて昌平黌の教授となり大に學政を整理す、寛政中松平定信の老中と爲るや拔擢して待問儒員とし、天下の學政を整理することを掌らしむ、首として定信に建議し異學の禁令を發す、且定信が皇室に奉ずる勤王の美蹟、大内の造營皇陵の修理等多くは其建築に出づと云ふ、其畝火山の陵を拜する詩あり曰く、遺陵纒向三里民、求半死孤松數畝丘。非有聖神開帝統、誰教下品庶三脫、夷流、既王像設專、金閣、藤相墳營曆、玉樓、百代本文麗不、億、幾人來、此一回頭。以て其抱負を知るべし、是に於て後藤芝山の江戸駿河臺私邸に薰陶大に光輝を發揚す、文化四年十二月病て歿す、享年七十二。著す所、國鑑聖賢像圖考、資治格言、冠服考證、栗山文集、栗山堂詩集、栗山上封等あり、栗山國學は京にて高橋圖南に受け詩文書皆絶妙傍ら黒竹を畫きしと云ふ。明治四十四年六月一日從四位を贈らる。栗山墓、東京大塚御厩島と京都東寺町西方寺。

柴野貞毅

名は貞毅、諱は養貞、通稱小輔、栗山の弟なり、栗山輯録せる雜字類編を、辻子禮と共に訂修して、明和元年出版す、長子某、次允升、允中、允常等あり、孰れも秀才にて三人とも栗山に養はれしが允中(仲吉)は僅か十二歳にて天明六年六月逝けり。

柴野碧海

名は允升、字は應登又東霞、通稱平次郎號碧海安永二年牟禮に生る、貞毅の次男、栗山に養はる、詩文を能くす、栗山幕府に徴さるゝに及び其後を襲うて阿波藩の儒員となる、尤も詩文に長ず。天保六年七月十六日歿す、年六十五、著書、枕上集、栗山先生遺事等あり、大正十三年三月教育の功により正五位を贈らる。墓は徳島市佐古三谷常嚴寺にあり。

柴野方閑

名は允常、字は恒甫、一に霞嶠と號す、貞毅の四男にして伯父栗山に養はれ詩文を能くす、どこかの大名に仕へ居りしも年四十にして隠居し方閑と號す、天保頃の人なり。

柴野竹齋

通稱は助三郎、號竹齋、碧海の男なり、碧海歿し阿波藩の儒官となる、明治八年歿す、年六十

柴野格

名は格、通稱政之進、香川郡同座村の人、寛政元年西行六百年追善集に歌五十首入る。

松貞尼

松貞は尼號、西讃の人なり、松岡五左衛門の母にて井上通の歌の友なり。

柴田麻載計

小豆郡池田村北地の人、文化五年を以て生る、性篤實にして好く人に交はる、夙に風雅を愛し兼ねて俳句を能くす、吟詠少からず、俳號を麿人と云ふ、當時俳壇の泰斗なり。明治十九年十二月二十七日老歿す、壽七十九。

椎名南浦

名は秀胤、號南浦、山田郡の人、後高松に住す、明治末年歿す、詩を好む、曾呂利新左衛門、君學東方朝。寓言即諫言。布衣友關白。名姓至今傳。

甚右衛門

仲多度郡吉原村大字神殿の農にして、寛延三年正月領主丸龜侯に強訴せんとせし七義民の一人なり、

白井芝石

同年七月二十八日金倉川原に於て斬罪に處せらる。名は昇、號芝石、寒川郡長尾の人、篆刻を能くし、餘技に山水四君子を畫がく氣韻あり。中年時代より備中倉敷に住居し同地方に文人思想を鼓吹せり。明治三十四年同地に於て歿す、年五十五。

白井九畹

號を九畹、文化頃東讃の畫人なり。

白井尹諧

名は尹諧、通稱潔、高松藩士、歌を中村氏に學ぶ、明治三十八九年頃歿す。

寄松祝、君が代はつくる事なし常磐なる松の縁のあらむ限は

白井適齋

名は彪、字は無文、號適齋、文化頃高松の人、書を能くす、畫譜に見ゆ。

白木蘭溪

名は因宗、字は元陵、號蘭溪、丸龜藩士、經史を三田蘭室に學ぶ、天明四年八月歿す。



白木半山

名は彰、字は有常、號半山、丸龜藩儒、浪華に寓し、儒を以て肆を開き、後僧となり、道契と名づく詩を能くす、著書、半山集行餘偶筆等あり。

白石知重

名は知重、通稱嘉右衛門、香川郡川部の人、寛政元年西行六百年追善集に歌五首入る。

神内謙

通稱捨三、喬木と號す、木田郡井戸村高木の醫師なり、業暇詩文を能くす、萬延元年農家撰種録の著あり、明治二十四、五年頃歿す、年七十餘歳。

神保直吉

神保直吉、諱は茂直、寒川郡造田村に生る、處士茂一郎の第二子なり、直吉七歳の時父に従ふて志度村に移居す、幼より算術を學び成章にして己に數理を解得し、自から自鳴鐘を製せり、弱冠高松南紺屋町に移り藩の公族松平左近の命を以て四季自鳴鐘を作る、觀るもの歎賞せざるなし、安政以降諸藩競ふて洋式砲術を學ぶもの多し、時に高島四郎太夫の門人麾下の士江川太郎左衛門幕府の命を以て高島流砲術を教授す、藩主直吉を擢んで就て學ばしむ、夙夜勉勵數年一日の如し、終に大に其術を得る

を以て江川氏直吉をして師範代たらしむ、文久二年業成り將に藩に歸らんとす、幕府劄に之を徵さんとす、彦根藩も亦祿三百石を以て之を聘せんとす、直吉藩の三人口俸に甘んじ並に之を謝絶す、是より藩に歸り高島流砲術を教授す、同三年登庸して俸祿を加賜す、慶應三年一藩の軍制を一變し藩士擧て門人たり、是より先高知宇和島大洲丸龜多度津の諸藩士來りて學ぶ者多し、其螺旋砲を鑄造し蒸汽船を模形する皆手自ら之を製造す、其緻密奇巧歐米人を凌駕すと云ふ、大政維新後民政部に徵されしが明治四年正月辭して國に歸り、厚生利用の諸器械を製して娛樂とす、二十五年七月病て歿す、享年七十三、萬日原に葬る。

篠原市造

市造は那珂郡東高篠村の人、初め惰農なりしが小國牛山の教を受け精農となり、牛山に従ひ鄉村を巡回して農人を訓戒して善行を奨励せり。市造の事業中その著きものは被川の架橋なり、毎年九月より翌年三月迄市造獨力を以て被川に板橋を架設して、通行の便を圖り衆人の寒苦を救へり。此事業は左の數代前の祖先より行ひし所にして、市造は祖先の遺業を繼承し慈善事業を遂行せしものなり。

與三衛門一彌三衛門一彌三七一市造

而して與三衛門より以後官命により代々牛頭山を守りて草木の濫伐を監視し、山奉行とも稱すべき職に在りて常に帶刀を許され、また組頭役をも勤めたりと云ふ、天保六年九月三日歿す。

篠原箭太郎

三豊郡二ノ宮村大字羽方の郷士にして、夙に九州に至り漢詩文を豊後日出の碩儒帆足萬里に學び其高足たり、書も亦能くせり兼て武道に熱中し劍槍の兩技に達せり、維新前諸國の勤王志士と氣脈を通じ勤王討幕の旗擧を爲さんとせしが、同志者捕吏の手に捕はれ遂に數年の處刑を受けたりと云ふ、明治初年頃の人。

莊司和之輔

諱は正暢、號物外晩年改めて松齋と云ふ、通稱和之輔、豊郡大野原の人なり、父を正本と云ふ。其の次子なり、人となり、良直にして長ずるに及び和歌を好み、書畫を愛玩し恒々慈善を爲すを娛み、家世々日蓮宗を奉じ信佛の念甚だ篤し、明治七年七月十六日歿す、年七十。

莊司丘霞

通稱駒之助、號丘霞又翠雲、三豊郡大野原の人、立齋に花鳥を學ぶ又俳を能くす、明治四十一年五月歿す、年七十。

莊野秋平

名は初め知彰、後秋平、初め孫平次と稱す、號莊園、高松藩士、歌を能くす、曾て堀秀成に學ぶ後石清尾社司たり、明治三十六年九月歿す、年七十四。

寄松祝 君が代は大木の松の深緑千年の影を仰ぐ嬉しさ

鹽津可知

名は可知、鹽津氏、井上通の歌友にて安達氏の妻なり、享保中の人。

塩田梅峯

梅峯は龜市と號す、三豊郡仁尾村の人、鹽田直治の男にして天保十四年五月朔日の生れ、安政元年より畫を村田筆岳に學び、後守山湘帆に隨ひ長崎に遊び又名草逸峯等を師とす。

塩田遊圃

又兵衛は通稱なり、三豊郡仁尾村の人、鹽田安治郎の男にして、嘉永三年正月生れ、明治五年より畫を大西雪溪に學ぶ。

鹽田時敏

名は時敏、通稱良珉、鹽田文庵の嫡男、文化十一年文庵に繼ぎ、高松襄公に仕ふ、蘭方を唱へ外科全書、醫方握機等を著す、文政八年十二月二十六日歿す、法名良翁自然居士。

信海

名は初め義藏後信海と改め又信介と書し、左少辨と字す、幼名は綱五郎或は長丸と稱す、文政四年生る、月照の弟なり、幼にして僧となり佛學を高野山に修め、又經史を後藤某に歌を近衛公に學び、天保十四年高野山に在りし時同九月二日夜高野山大火あり、伽藍炎燒す、信海衆に先だち御影堂に進み戸を排し入つて尊影を卷攝し總持院に移す、園山尤も其の功を賞し生涯俸を出し學資に供す、弘化元年八月靈明遷化し遺命により同山修學院の住職となる、嘉永元年同山萬勝院に轉住し、同六年八月清水寺に歸り光乘院に再任す、安政元年二月二日月照の職を嗣きて成就院へ轉住す、寺務一乘院宮より正官本願兩職の輔任を給はり、尋て紫重の絹衣を聽さる、同年七月十五日江戸に行き同八月十九日將軍に謁し時服二領黄金一枚を賜はる、同二年三月十一日近衛忠熙公に謁し和歌の門葉に列し勤王に努む、安政四年十二月亞米利加船浦賀に來りて通商を請ふこと甚だ急なり、信海深く之を憂ひ同月十三日より大衆を集會せしめ本堂觀音前に於て十座十萬遍の法を修し夷賊降伏を禱る、同五年に至り墨夷益驕梁憂憤に堪へず、同年四月二十五日八千枚護摩供を修し寶祚無窮天下泰平外船退去の旨を祈る和歌を詠して曰く、

動きなき誓と君か真心をたまの緒にこそよりて祈らめ

遂に寂閑に達し深く嘉納せらる同五年二月十九日近衛公より月照信海兩僧に内命あり、即ち其の旨を奉じ高野山に登り正智院良基に就て青巖寺法印鑄由、寶性院門主海雄及び有志の徒に謀る一同敬諾し種々祈念別行等を修し、國家安全夷狄降伏を祈請す、五月二十五日近衛公の傳達にて月照信海兩僧へ御内勅あり、御撫物御劍御願文御檀料等を守護し高野山に登り謀議し衆と同じく種々の秘法を修す。就中太元明王溫座護摩の法に於て現驗を得乃ち御撫物を返上し寶牘數卷を獻納す、寂感斜ならず兩僧

並に高野山大衆の精誠を嘉し給ふ、信海皇室の式微を慨き佛法の萎微を憂へ斯く熱心祈禱に従事せしを以て幕吏大に搜索す、信海到底免るべからざるを察し、和歌を詠して曰く、

真心を盡さん時と思ふにはうきに逢ふ身ぞ嬉しかりける

安政六年正月五日終に京都西町奉行所に幽囚せらる、此の時獄中にて見月照の僕重助は面會し見の死狀を聞き悲痛慟哭す、同二月二十二日江戸に檻送せらる、幕吏拷問甚だ殘酷なり、信海豪爽屈する色なく口を極めて時政を罵る、其の言ふ所理義整然たり、幕吏も大に感嘆せりと、同三月十八日獄中に死す、死に臨み和歌を詠して曰く、

西の海あつまの空とかはれどもころはおなし君か代のため

時に年三十九、僧臘三十。明治二十四年十一月二十七日靖國神社に合祀せられ又同年十二月十七日從四位を贈らる。信海墓、京都東山清水寺中成就院。

乘 雲

讃岐の僧にして音韻學者なり、享保三年(一九〇年前)韻鏡三冊を著はし版行せり。

實 山

字は徳充、號指山又無爲翁、本江戸人、初め狩野家の養子となり居りしが後に實子生れたるを以て去て僧となり、享保中高松見性寺に住す、後見性寺住職を辭して自性庵に隱居して畫道に親しめり、佛像山水尤も妙なり、寶曆元年八月二日寂す。藍窓茶話に寶曆明和頃我讃岐にて、鶴洲實山の外に能畫

僧は無き由記せり、三代物語に指山翁は近古の名畫家也と稱せり。  
**春** 號春溪嘉永安政頃の女畫人、東讀の人山一説撫養の人、編者嘗て嘉永六年に畫きし着色畫を見しことありき。

**松 岳**

名は有彦、號松岳、文化頃象頭山金光院僧、畫を能くす、畫譜に見ゆ。

**瑟**

號瑟瑟、長町竹石の妻なり、畫を能くす、文化十年九月竹石七年祭に盛に書畫展觀會を開く、漆谷藍渠五松良山幹事たり、瑟瑟は會主たり。

**秀 峰**

名は秀峰、高松淨願寺住僧、本山田郡上田井の人、松井長太夫の弟なり、江戸にて久しく美仲及仲英に漢學を學ぶ、因て内典を外にし外典を内にすと自ら云へり、文化十二年十一月十九日歿す、年九十餘歳。靈牌に正蓮社覺譽上人等阿萬俊秀峰大和尚とあり、好んで莊子を研く、著書、唐詩選指掌、糸濱亭集、郭注莊子數支あり、又詩を能くす、五劍山、懸崖登上海方僧。五劍嶽、圓影寒。半嶺化來龍

氣勢。一天晴去暗雲殘。作文、三谷景晴形矢記。寺務を辭して後糸濱に住す。

**秋 仙**

大川郡富田村大字西富田平藏免に僧秋仙の墳墓あり、彼れ今より二百年前郷民のために直訴し刑死されたる、徳武、久森の放免を藩主に願ひしに、その一味と誤解されて斬罪に處せらる、哀むべしとす

**紫 山**

名は辨如、號紫山、文化頃高松淨願寺住僧、講及歌を能くす、畫譜に玉瑛堂主といふは是なり、後鹽飽寺に住せしことあり、紫山は他にも一人あり、智幢と稱す。

**紫 雲**

名は知周、號文溪又紫雲、高松靈源寺四世僧、荒川九郎兵衛の男、佛畫を能くす、天明二年八月歿す

**舜 玉**

名は美加、號舜玉、後松榮尼と稱す、西原竹屋の妻、京都宇都宮秀壽の女なり、雲屋に山水を學んで能くす、明治八年歿す、年七十六。

**省 我**



塩谷安貞

通稱岡右衛門、藩の大坪本流馬術師役鹽谷家二代、享保十九年十月十二日歿す。

鹽田伊三郎

東京専門學校卒業す、高松市高松百十四銀行常務外各會社重役、高松市外磨屋町七三に現住す。

柴田貞輝

京大法科卒業、現に佐賀地方裁判長判事なり、佐賀市松原町に住す。

白石寛

高松市東瓦町の出身にして東京府下瀨野川町上中里五一九に現住す、年三十五才。香川縣立工藝學校木彫科に學び、推朱を習ひ太平洋々會彫塑部を了へ日本プロレタリア美術家同盟員たり、日本美術院太平洋々畫會、國際美術展に出品大衆向き作品の創作に精進す。

神内正芳

本田郡木太村の出身、高松市櫻町八〇七ノ四に現住す、年三十才。縣立大川中學校を大正十一年卒業、東京美術學校師範科を大正十五年卒業、鹿兒島縣立大口高等女學校教諭拜命、昭和四年高松第一中學

校教諭拜命、専ら斯道を研鑽中なり。

嶋吐鳥

嶋吐鳥は高松の有名な俳人にして別に孤閑堂とも稱せり、文政三年辰十一月歿す、本名鳥六三郎と云ひ、法名は普宜院正覺道性居士と云ふ。色に香に殊更花の道は兄桃さくや立場くゝの表替

白井要

號は東岳花の舎、風來、三豊郡上高瀬村の人、年七十一才。經書を柳川竹堂に學び、明治十二年愛媛縣師範學校卒業後東京にて醫學を修業す、明治二十年現地にて開業、詩歌俳句を樂み書を能くす。

鹽田龜市

號は梅峯、三豊郡仁尾町の人、年九十二才。七十年前長崎の人、森山洲繁、名草一峯の兩先生に師事し郷にありて専ら繪筆を揮ふ其の作品多し。

ヒ之部

日置毗登乙虫

續日本紀に天平神護元年(稱徳天皇)八月讃岐國の人、外大初位下、日置毗登乙虫、錢百万を献ず、依りて外從五位下を授け玉ふ、云々とあり。

尾藤知宣

初め知定後知宣、通稱甚右衛門後左衛門尉と改む、幼より秀吉に仕へて功あり、天正十五年正月豊臣秀吉の命を以て當國に主たり、豊後の役大和納言秀長に従ふ、秀長軍を進め高城を攻む、島津兵庫頭後詰として官部善祥坊の陣に迫る、其防ぎ難きを見て家臣南條玄珠來り救ふ敵見て大軍と爲し敗走す、秀長之を聞き追撃せんとす、知宣諫已止む無幾して島津氏降り秀長高城より戦はずして歸る、豊臣秀吉赤間關(長門)にあり、高松の戦況を聞き知宣の秀長を諫め追撃せしめざるを怒り、天正十六年四月當國の封を奪ひ之を生駒近規に賜ふ、知宣後北條氏に仕へ居りしが天正十八年北條氏滅び同時に誅せらる。

肥田和泉

政勝と稱す、寛永十九年四月六日水戸お付き英公の大老となり、彦坂織部の上に班す祿六千石、與力三十六人、此祿三千石、別に足輕料千石合して一万石を給され、高松城中西郭に居る城代と稱す、承應三年八月十九日歿す、年九十。

平賀源内

源内諱は國倫、字は士舞鳩溪又松籟子、又森羅萬象翁又福内鬼外、無根叟、天竺浪人、風來山人、古今獨歩我慢坊と號す、幼名を源吉又四方吉と稱す、寒川郡志度村(大川郡志度町)の人なり、幼より讀書算術を好み、資性聰才智業に超ゆ、延享の始齡猶十二の時より既に國益を起し名を竹帛に垂んことを期し、乃ち醫學に志し特に本草の學を研究す、高松藩主松平頼恭之を奇とし擢て藥園係の小吏と爲し月俸四口銀十枚を給す、是に於て源内阿野郡白峯山上に朝鮮人參を移植し、香川郡東濱村に甘蔗を栽培す、寶曆十二年致仕して江戸に遊び業を田村藍水に受け益物産の學を修む、明和元年火浣布を創製し之を幕府に献す、其他金唐草紅革玻璃鏡等皆其創製する所と云ふ、同七年長崎に遊び譯官吉雄等に依り和蘭人に就て和蘭本草の學を修む、偶西洋に越歴電機器あるを聞き考案數日にして之を模造す、此模造せしもの曾孫熊太郎方に收藏せり、人其奇巧に驚かざるなし、是時に當り支那交趾製の陶器多く本邦に輸入し價格太た貴し源内邦價の濫出を憂へ其陶窯釋法に倣ひ多くの陶器を製造せり、抑源内絶世の抱負を行はんとするも事志と違ひ快々として樂まず、依て世間を愚弄し院本又は小説を作り、以て世人の欣賞を博するを以て平素の不平を慰したり、後門人某に双傷を負はせし事により獄に繋が

れしが安永八年十二月十八日獄中に歿死す、于時年五十二。墓は東京橋場總泉寺にあり、題して智見靈雄居士と云ふ、是れ友人杉田玄伯の建る處なり、大正十三年二月十一日從五位を贈らる。源内の享年に就ては縣史には四十八とあれども、人名辭書には五十七とあり今平賀家に傳る系圖によれば五十二とあり此れが正しかるべし。又死因に就ても諸種の說あれども彼れは少し神經質の人で秘密書類を他人に示す事をいみて居つたが、或時門人が同書を見たので憤怒の餘り劍を抜て其者を斬殺した爲め、牢獄へ投ぜられ遂に獄内にて憤死したものなりとの說眞に近しと云ふ。著すところ頗る多し、即ち物類品隴六卷、淨貞五百介圖三卷、神農本草經圖四卷、神農本草和名考二卷、本草比肩十二卷、食物本草一卷、火流布考一卷、火流布略說一卷、四季名物正名四卷、日本物産譜二十四卷、その他神靈矢口渡根無草、院劇話本の如き多數の書を述ぶ。

源内燒

本朝陶記考證に左の記事あり、鳩溪は志度浦の産なり、寶曆年間長崎に至り交趾燒の傳を得て歸り、後茶器及諸物意に任せて製す遠近之を珍とす。平賀源吾は源内の甥なり、燒物の傳を源内に受け種々の品を製作す、歿後其業を繼ぐ事なし。

(附記) 本書に源吾は源内の甥とあれど、源吾は志度町某肴屋の子にして常に源内に從ひ陶法を會得し、現今世に残存せる源内燒と稱する器は多く源吾の製せしものなりと云ふ。

松平家登仕録に左の記事あり。定府平賀元内國倫、(江)初め源内寶曆十年辰五月二十七日更元内、初給三口(以學術也)寶曆十年辰

五月十二日給四口銀十枚爲藥坊主格、同十一年巳九月二十一日辭職俸。

左の文は友人渡邊桃源の追悼文なり、錄して其友情の厚きを知らしむ。

鳩溪雅伯は讚の豪傑にしてしかも風月の情あり、年頃吾と交はり厚く詩作の吟席劍馬の藝術かりそめの旅にも此人なくはと樂に思ふて琴を斷の友なり、生質志高ふして東都に赴き聖堂に寓居し螢雲に眼をさらし、中にも本草物産に長じ聲名四方に聞ゆ筆をはなさず机を去らず綺語戲言車馬に汗すべし、程なく候より俸祿を賜はり前淺からず故郷へ供奉して歸る事兩三度に及べり、或時「故郷へもいまた木綿の袴哉」といひ送りけるを思へば五斗米の爲めに腰折無事もむつかしと思ひけん、官を辭して神田に卜居し高貴にむつひ卑賤に交はり、關の八州又は筑紫にかけ歩行て國家の益なる事而已に心を盡しその氣象の大なるは大鵬の如し、もろこし紅毛の人にも名を知られ才を賞せられ、去年の冬不慮の災難ありて程なく極月十八日病を以て世を去給ふと訃音を聞、したしき限りはなを更しらぬ人までも手叩いて惜まぬはなしなくてぞ人は忍はるゝ習、まして兩の手の如くしける友なれば此事を聞て魂消、胸ちきれて百年の悲しみを生ず、年頃里の東に杖を曳きて松崎象瀉へ伴はんと約せしに、此時東行の思ひを失ふ半白の齡なを志しの遂さる事をさそ口惟くもあるべきと今は時の間さへ思ひやられて胸ふさかりぬ「村雨や夜は衾に蓋は袖」とは其時の愁吟なり、光陰流れてはや小祥忌になりぬ、驚き定めて又涙を閑窓に拭ふて昔を思ふのみ。

友呼はよく我を知千鳥哉

三千舍桃源拜

左記は源内が四十八歳の時院本の處女作で世の稱讚を博したもので、新田義興の末路其の弟義峰(義宗)の流離の狀を叙し、終に義興の亡靈が神に祀られる次第を綴つてある、其の四ツ目の奥頓兵衛住家の段は今も淨瑠璃に誦ら



れ、劇に演ぜられて人の耳目に觸れる事が多い。此淨瑠璃は新田神社の神官が同社が追々朽壞に傾くので同社の興復を計るべく寮内に囑して作らしめ、此を其當時の演劇に演ぜしめ爲に同社の復興が成りしものなりと云ふ。

矢口

渡

六郷は近き世よりの渡にて其の古へは都より、東へ通ふ旅人の、廻るも遙々と弦。矢口の渡と聞えたる其の水は調布や、さらす垣根の朝露を、貫き留めぬ玉川の、舟を浮ぶる流より、知らぬ心の底深き、渡守の頼兵衛が、内とは思ひかけ作り、物好したる亭座敷渡世には似ぬ家作りは、瑠璃の階、瑠璃のとばり、龍宮城の乙姫かそれかあらぬが娘のお舟、菖が孔雀のぼつとり者、田舎に惜しき姿なり。

秀

延

後深草天皇の時の刀工にして志度浦に住す、或は銘に心運と云ひ又秀行とあり、是れ亦子弟相承くるなり、其の鍛ふる所の劍地膚鋒刃の状頗る相州傳に似たりと云ふ。前記事は大川郡史の記す處なるが明和五年出版の類字銘鑑によれば左記の如し、蓋し秀行は子か弟子ならん。秀延、志戸に住す、藤原と打、建長年間の人(六八六)秀行、同、建治年間の人(六六〇)。

久本智實

香川郡圓座村の人、米山と號す、其室を群居和一堂と號す、詩文書を能くし、又篆刻は良山に學んで能くす、文政頃の人。

久本米山

號米山、文化頃東讀の人、書を能くす。

久本竹齋

號竹齋、天保頃青海の人、書畫を能くす。

平尾意美

名は意美、通稱平三郎、藻海又對山と號す、高松藩士、歌を能くす、好んで諸書を抄寫す、明治三十九年頃歿す。寄書懷舊、命毛はきれても残る筆の迹墨の色にも光みえけり。

平澤籟山

號籟山、鶴足郡土器の人、四條派の畫を能くす、明治三十四年二月歿す。

平井兵左衛門

小豆郡池田村の人、池田郷の大里正にして名は氏政、延寶五年の生れなり、人と爲り沈毅剛膽能く其の職務に精勵し大に民望あり、且書を能くし騎馬に長じ挿花に巧みにして謡曲に堪能なり。寛永四年高松藩漁民富士の瀬の漁場を侵すものありしを以て之を幕府に訴へ審理七ヶ月遂に勝訴となれり。翌五年我本島の高松藩主の預り地となるや、島民安んぜず同七年按察使の本島巡回に際し、池田村彦兵衛與次左衛門等島民の疾苦困難の情を具し哀願書を提出せり。因て幕府に召され審問の末氏政は島民を煽動せしものとの罪名の下に斬刑に處せられたり、正徳二年三月十一日なり、時に年三十六、島民痛恨せざるなし、後文化八年一百年に當り其の徳を慕ひ祠を八幡宮馬場に建て平稱靈神と號す、明治四十五年二百年を朝し、郡内官民大祭を擧げて神祠を再建せり。  
(小豆郡史)

平井兵左衛門

小豆郡池田村濱條の人、元大庄屋兵左衛門の裔にして始め定八と稱す、池田村の里正たり、資性謹直にして事蹟頗る擧る、夙に風流を好み殊に俳句に秀づ、揚竿亭鐵蕉と號し吟詠頗る多し、又烏鷺の戦を善くす、天保四年四月十五日生れ、明治十一年五月二十八日歿す、年四十六。

平井純三

小豆郡四海村の人、本村長濱平仲連の男、舊名順二、二山と號す、幼にして父に離れ岡山石井宗軒に

從ひ蘭醫の初歩を學び、後ち江戸に出で蘭醫大槻俊齋(林洞海宇田川と共に將軍家侍醫の三大家)の門に苦學すること六年、郷に歸りて醫業を開く、此れ本郡蘭法醫の創始者なり、既にして高松柏原謙益に知られて其顧問となり、又同地明七義塾員に擧げられ次で古馬場町に開業し、後ち豊島又吉野に轉寓し遂に郷里に歸りて明治二十一年二月四日病歿す、年五十六。

平田與一左衛門

三豊郡大野原の開基者なり、抑も平田家の祖は平貞盛より出づ、數世の後ち甚治なる者あり、江州大津に住す是即ち平田與吉正成の父にして大野原開基與一左衛門の祖父なり、正成は出で、平田小左衛門の養子となり江州湊町に住す、其長子に平田與一左衛門なる者あり、幼名を左平治又は庄右衛門と稱し入道して休甫と號す、明暦二年十月姉小路玄徳の宅に歿す、家世々富豪にして財多し、長男平田源助正澄は幼名を五郎吉と稱ひ後ち與一左衛門と改む、寛文三年大野原に移り貞享四年十一月五十九歳を以て歿す。正澄の子正清、正清の子正富、正富の子正之、正之の子正美、正美の子正容、正容の子正宥、正宥の子正靜は現代平田熊善氏の祖父なりと云ふ。其子孫の世に於て其の祖の遺徳を慕ひ、(附記)大野原の開基は寛永二十年平田與一左衛門が大坂備中屋藤左衛門、三島屋又左衛門、松屋半兵衛三名の共同にて時の藩主山崎甲斐守の許可を得て着手し、慶安二年に至り百八十町歩を開墾せしも水利の便宜しからず、開墾地又荒蕪に歸し收支償はざるを以て他の三名は組合を脱し其權利を平田氏に譲り、翌年より與一左衛門の子與一左衛門一人の有に歸せしより、平田氏は寛文三年京都の邸宅を賣拂ひ家を擧げて之に移住し、遂にその功を遂げて世々大地主たるに至れりと云ふ。



號は松庵、文化頃の人にして書を能くす。

### 廣田 貢

字は子功、號松巷、丸龜の商賈、詩書を能くす、漆谷翁の縁者と聞けり、書風ソツクリ漆谷に似たり天保頃の人。

### 彦 四郎

通稱彦四郎、木田郡川添村元山の人、農徳右衛門の子、享保三年生る、十八歳の時諸國を遍歴し、後ち陶法を尾張に受く、歸つて香川郡御厩に製す、因て御厩焼と稱す、昭和三年五月二十七日氏の墓所に左の碑を建てたり。

#### 彦四郎氏の墓

御厩焼の元祖彦四郎氏は享保三年山田郡元山村に生る、其の父は徳右衛門と稱す、其家世々農を業とせしが氏は幼より大志あり、一大事業を起さんが爲諸國を遍歴し、會々尾張の國に至り製陶業の盛なるを觀て大いに感動し留り學ぶ事数年、郷に歸りて窯を築き之を試みしが土質適せず全く失敗に歸せり、こゝに於て更に國內各地土質を研究し、御厩村津内山麓に於て最好の陶土を發見して大に悦び、終に此所に居を定め専ら力を製陶に致し遂に御厩焼の法を發見せり、此の陶器價格の廉にして實用的なるより販路日に開け、同業者年々増加して現今百戸を算するに至れり、寛政九己年二月朔日歿す、行年八十。村民其遺徳を追慕し相議して碑を建て其事業を後世に傳ふ。

昭和三年三月吉日

尾崎正之撰 御厩紫峯書

### 皮肉骨金右衛門

通稱金右衛門、高松藩の右筆、大水主神社の仕著の悦は其書といふ。

### 肥田 政信

名は政信、通稱忠藏、高松藩の重臣なり、肥田大隅の養子にして明治元年二月執政、同四年陸軍少佐となる、廢藩後松平家の家令となり、明治二十年七月十八日歿す、年五十七。歌を能くす。

元日 天の戸を明けば今朝は新玉の年豊かなる春の初風

### 百 川

三豊郡大麻村の俳人、臨松亭と號す、芝峰の門人、文化三年全國より俳句を募集し、此れを其師芝峰に選擇せしめ一千二百首を得て金刀比羅宮に奉額とし、同時に山莊集と題し大阪八千房木僊と芝峰散人との序文を得て出版せり。

遺詠 冬ながらさいげん言の葉も花も

### 百 靈

名は百靈、寛政文化頃の僧、詩を能くす、僧秀峰の絲濱亭詩集に、讚南獵川百靈上人逸才云々とあり

著書三處庵詩集あり。

### 平林春一

號は春一、琴平町八九〇の人にして年三十一才なり。香川縣立工藝學校を卒業し後ち東京美術學校に學び、京都繪畫專門學校を卒業後目下同校研究科在學中なり。

### 廣瀬瀧次

東大造船科卒業、九州帝國大學教授、在郷海軍造兵大佐、福岡市春吉五番町六四六に現住す。

### 平野烈之介

氣象臺技師、中央氣象臺大阪支臺長なり、大阪市港區鶴町三丁目一三九に現住す。

（以下は極小の文字で記述された人物の紹介が続く）

### モ之部

### 物部 亂

寒川郡の人なり、續日本記和銅六年五月の條に、讚岐守正五位下大伴宿禰道足が寒川郡の人、物部等二十六人曾て良民たりしが、庶資校籍の時誤て飼丁となり居たりしを良民に復したる旨上言せり云々

### 森 權平

權平は仙石秀久の家臣九郎左衛門の嫡男にして秀久の從弟なり、年少なれども勇氣あり。天正十二年秀吉に従ひ東讃に来る、時に同年七月十九日元親大窪越をして寒川郡に入り引田中山にて仙石秀久の軍と開戦す、此時仙石方追立てられて引田中山道に入る權平は十八才の若武者なれ共大剛にして奇才あれば、我兵を下知し返し合て奮撃し敵を破て勝を制し引んとする處に、土佐方稻吉新藏人と名乗て互に馬上にて渡り合ひ、兩敵共に深手を負ひ、權平は續く兵なく新藏人は身方續て權平は爰にて終に戰



寄夏月祝 若竹の葉末の月の影きよみ君が八千代のふしぞみへける

森 文右衛門

文化十三年正月二十七日小豆郡大鐸村黒岩に生れ、幼より俳句を好み、俳名を旭峰座六員笛庵、當日庵、牛守等と號せり、始め廣瀬橋中の門人となり、秀才の聞へあり、後ち妙見員笛庵に學び次で尾張の可大に従ひ、俳道大いに進み關西に冠たり、京都の芹舎出雲の曲川、筑紫の悠々等に交はり實に天保安政明治初年に於ける斯道の大家なり、其の製作したる句數二十萬以上にして、十四歳頃より死歿迄殆んど六十年間平均一日十句以上を作りたりと云ふ、練達なること以て知るべし、明治二十四年四月四日歿す、年七十二。

森 皆山

小豆郡大鐸村の人、通稱森時二と云ひ吳雪、雲溪、皆山等の號あり、俳人座六の長男にして性温厚、文學を好み、殊に書畫を能くす、書は始め子昂に學び後ち董其昌の書風に涉り、畫は能登の李堂を師とす。性頗る熱心緻密にして技能く進み、當時郡中にて名聲高かりき、中年にして一時三小區戸長となる、明治三十五年四月一日歿す。

森 鴻之助

諱は武成、小豆郡草壁村大字下村森棍之助の長男なり、人と爲り勇敢身幹偉大夙に武を好み、劍道に

達し、商業の傍ら近傍の子弟を教養す、諸國修行の劍客にして訪問するもの頗る多かりしも能く其の右に出づるもの殆んどなかりしと云ふ、明治六年卒す、年三十二。(小豆郡史)

森 太郎右衛門

太郎右衛門は小豆郡四海村瀧宮重郎右衛門の長男にして、天正年間備中岡山の城主宇喜多家に奉公中射術の功に依りて刀劍を賜ふ、其の後裔市松現に傳へて左の古文書と共に之を藏せり。森重郎右衛門子太郎右衛門一と也、備中岡山の御城主中納言様へ御奉行仕りその節大なる猿いでわざわい仕候故御家中町中狩り申候へば御城の角やぐらへ上り居申に付小ひやうにては成がたくとて彼の太郎右衛門に御仰付三人はりにて早速射落し高名仕御褒美に刀一腰拜領仕その時の弓や刀于今有之候太郎右衛門子彌右衛門まで五代不相變組頭役相勤居申候森重郎右衛門先祖書如斯候、以上  
寶永四年丁亥二月森彌右衛門尉備前侯より拜領せし刀劍、刀身二尺五寸四分、柄五寸六分、銘備前長船住勝光(猿を射し弓は其後ち小海庄屋へ譲與せしと云ふ)。(小豆郡史)

森 九八

小豆郡四海村瀧宮強十郎の三男、體軀偉大大阪に出で、理髪を業とす、南御堂の門前に於て敵討あり之を傍觀せしに其の主人の稍遜色あるに氣附き場に入りて之を助勢し以て首尾よく本望を達せしむ。演劇(御堂の前の敵討)中の髮結の九八は即ち之なり。そは貞享年間の事なりしと云ふ。(小豆郡史)





治藏は明治十二年八月十一日小豆郡四海村に生る、父を遷といふ、明治三十七年東京帝國大學國文科を首席を以て卒業後ち大學院に入り傳説を研究す、獨逸協會講師、第五高等學校教授、第一高等學校教授に歴任し、傍ら明治大學法政大學に講師として教鞭をとる、官は高等官五等從六位八級俸に至り大正元年十二月六日病歿す、年三十四。著書明治文學者の古人今人、書籍總目錄、小豆郡略史等あり

森口小八郎

小豆郡四海村の人、幼名邦太郎後ち先代の名を襲ふ、赤水と號す、性活潑、少年の頃備前閑谷校に漢學を修め、歸郷詩を賦して自ら娛しむ、津山藩代官所に於て部民の訴訟ある毎に代官の内命を受け其の仲裁の任に當るや如何なる難事も和解せざると云ふことなし。因つて藩はその勞を賞し苗字帶刀を許す、明治維新後同志と相謀り中桐星城を聘して寶幢坊に明親館を開き子弟を集めて漢學を授けしむ後ち之れを郷校とし藩よりも補助費を受けたり、又長瀬時衡を聘し郷醫を集めて西洋醫術を學ばしむ此の間郷校幹事を命ぜられ、後ち學制の發布あるや學校雜事係を命ぜらる、又同志と發起して八幡橋を改築し以て通行の便を圖り、大區の制により大區會を開くや選ばれて議長となり、明治十三年縣會議員に推さる等公共の事業に關し終身東西奔走せり、明治三十二年五月四日歿す、年七十七。

盛澄八郎

小豆郡淵崎村の人、幼より才智業に超へ、少年の頃第三區々務所に給仕として勤むるや種々の法令規則殆んど之を暗記し、其の吏員却て給仕に聞くもの多かりしと云ふ、壯年の頃酒造業を開始し漸次之

を擴張す、嘗て本村戸長又は村長、郡會議員、縣會議員となる、頭腦明敏辯舌善巧にして克く其の職責を完ふせり、又司法省破産管財人を命ぜられ、四國酒造聯合會評議員に擧げられ且つ品評會等より功勞賞杯を贈與せられしこと多かりしと、明治四十四年八月十二日歿す。(小豆郡史)

茂 椎

丸龜の人、藤井氏、名は正容、菊壺と號す、蒼虬の門人、笠着集其他句集の著あり、天保年中の人。網 浦 多田姓、松濤庵と號す、芹舎門、高松の人、明治三十七年十一月歿す、年七十三。

森崎清

素芳と號す、高松市五番丁の出身にして、大阪市外小坂町常盤園に現住す、年五十六才。大阪泊園書院藤澤南岳氏につき漢學を修め傍ら大阪洋書研究所天彩書塾を経て日本書を荒木寛敬氏に學ぶ、後ち東京洋書研究所不同舎に於て研究後ち橋本雅邦氏につき日本書を研究し、現住所にありて揮毫しつゝあり。

本木謙助

繁世遠と云ふ藩士定府文武の才あり、軍騎攬要の著あり、文化十一年十一月歿せり。

セ之部

本木 義成

仙石 秀久 (領主)

初め權兵衛と稱す。姓は源氏美濃土岐の支流なり。幼より秀吉に仕へ寵愛を得たり。天正十三年五月讃岐國を秀吉より賜ひしと雖も性勇猛にして慈愛心なく。入國の際年貢未納者十三人を聖通寺山下に於て釜煎りの刑に處し、又安原の山主甚太郎其下の頭人十二人及庶民百餘人を死刑に處する等横暴の所爲あり、人民親附せず。加之天正十四年十月豊臣氏秀久に命じ豊後の大友義純を援け、島津義久を征せしむるに膺り。十河存保長曾我部元親等と與に六千餘人の兵を率ゐ豊後に赴かしむ。秀久島津勢と戦ひ大に收績の十河存保、長曾我部元親及安富、羽床、香川、矢野、河村等阿讃の諸將並に總兵一千餘人盡く戦歿す、此れに因て秀久其罪を謝し紀州高野山に入る、秀吉大に怒り讃岐の所領を奪ふ、天正十八年秀吉北條氏を征する時尙に其軍に加はり戦功あり、因て信州小諸の城を賜ひ邑五萬石を食ましむ、又九州名護屋陣のお供をもなす、其子孫は今の但馬城主仙石讃岐守なり。

泉房五郎左衛門

香西氏の部將なり。天正十年八月五日土佐軍香西へ進入の時合天神廟を守りしが同日同所にて敵多兵を殺して戦死す。

宣

政

宣政は澄心、阿闍梨と號し、香川郡由佐村原文左衛門の子なり、長じて僧となり、大川郡長尾神正院(宇佐神社の社務を掌りし處今は廢す)の住僧となり、膂力及膽力人に絶す、源英公之れを寵す、一日奉幣の爲め參殿せしが歸るに臨み、大蛇の社殿に蟠り居るを見て神託により會つて、寒川元隣の奉納に係る劍を抜き之れを寸斷し、遂に其劍を斬蛇劍と名づくと云ふ、年代は元祿より正保頃の人ならん

千宗守 (一世)

茶人なり、宗旦の季子千宗佐の弟にして茶道を能くす、一翁と號し武者小路の別宅に住す、似休齋又官休庵と稱す、讃岐高松侯に仕ふ、延寶三年十二月十九日歿す、年八十三、碑面に一翁宗居士とあり

千宗守 (二世)

茶人なり、一翁の男、業を父に受けて茶道を能くす、文叔と號す、讃岐高松侯に仕ふ、寶永五年閏正月二十二日歿す、年五十一。

千宗守 (三世)

茶人なり、眞伯と號す、文叔の男、靜々齋と稱す、高松侯に仕ふ、延享二年三月二十八日歿す、年五十二。

千 宗 守 (四世)

茶人なり、三世宗守に茶道を學びて能くせり、直齋堅叟と號す、眞伯の養子にして高松侯に仕ふ、天明二年二月六日歿す、年五十八。

千 宗 守 (五世)

茶人なり、吸齋と號す、直齋の養子なり、義父に茶道を學びて能くせり、實は川越兵庫頭の男なり、天保九年四月十六日歿す。

千 宗 守 (六世)

茶人なり、五世宗守吸齋に學びて茶事を能くし、好々齋と號す、吸齋の養子、實は柏叟宗室の弟なりと、高松侯に仕ふ、天保六年正月二十二日歿す。

千 野 良 岱

名は元達、號良岱又丹晚、高松藩奥醫師、七世祖三木義敏備前より來る、父標浩千野氏を稱す、良岱兄元琳ありしも先歿せしを以て父の跡を繼ぎ内外科の治術に妙を得、治を請ふもの常に門に充てり又傍ら詩文を能くす、醫書の著書頗る多し、名家裁覽、大東類方、醫按裁斷、和蘭制劑、禁方小續等あり文化十三年十月歿す、年六十七。子寧國あり父の業を嗣ぐ。

千 野 乾 弘

良岱の先代、算數學に達し、明和五年に筆算開平立方法及籌指南を著はし、江戸と大阪にて出版したり

善 次 郎

善次郎は延享四年香川郡檀紙村宇落合に生る、善助の長男なり、早く母を喪ひ繼母のために凡ゆる辛酸を嘗めしも常に孝養を怠らざりき、彼繼母の意を體して家督を弟に譲り身は傍らの小屋に住して職勉業に努め家産を増す、藩主その孝養を憐み屢々金穀を下して表彰す、文政九年四月二十日年八十を以て病歿す。後ち村民共信義に感じて碑を建て、永くその至孝を傳ふ、碑は御厩村宇落合にあり、碑文は片山冲堂の撰なり。

妹 尾 天 愚

名は歌良、號天愚、香川郡淺野の人、俳及畫を好み、世事を抛つ、嘉永五年秋歿す、年五十八。墓銘は阿部絹州撰す、滑稽戲謔。文藻繪圖。和光諧世。樂與人俱。云々。

妹 尾 蒲 浦

丸龜藩士風袋町に住せり、應舉風の畫を能くせり、明治時代歿せり。

妹尾雲處

名は全美、字は士善、通稱初め利平、後ち賢、號雲處、香川郡淺野の人、畫は檜溪に、詩は篁山に學ぶ、風流多藝なり、明治三十九年九月歿す、年五十四。

瀨山登

名は重嘉、通稱四郎兵衛又登、號棠川、丸龜藩士、天明四年正月二十八日生る、文化十年三月十八日家督相續、初め御小姓、文政四年大目付となり、天保元年勘定奉行となり、又天保十年物頭となり江戸邸留守居役たり、漢學は初め加藤梅崖に學び和漢學に達し最も典故の學に通じ、藏書數千卷あり、江戸在役中金比羅籠講を造り新堀築港に力を盡し又丸龜團扇創製者とも云ふ、氏又寫生畫を能くす、藏書中往々自筆の者あり、雅人錄に瀨川とあるは誤りなり、弘化頃歿せりといふ。

瀨川政忠

名は政忠、通稱武平又善九郎、本松原小財次の子、瀨川氏の養子、高松藩士、歌を能くす。木村重成五月雨のふりし昔の功こそ世々に流れて猶残りけれ

清野長太郎

氏は高松市の住人、彦三郎の子にして幼より穎悟、初め東原水平後ち黒木の塾に入り勉學數年、稍や

長じて東都に遊學し初め共立學校、第一高等學校後ち帝大に入り法科を修め、業成りて内務省屬官を振出しに富山、神奈川縣の參事官、内務事務官から兵庫縣書記官を歴仕し、秋田縣知事に轉じ、滿鐵理事となり後ち兵庫縣知事、神奈川縣知事を歴て大正十三年復興局長官となり、帝都の復興事業に身を賭して惓惓せしが不圖疾に罹り大正十五年九月十五日前途有爲の才を抱き五十八歳を以て逝けり氏は子福者にして男六人女六人あり、長男暢一郎氏は現に姫路高等學校の教諭なり、氏又多能にして藻齋と號し、繪畫を能くし就中達磨とお多福は其得意とする所なりと云ふ。

法印是妙

小豆郡淵崎村の人、本村森口氏の出、大僧都龍譽の弟子なり、學深く徳厚く且つ世故に通ず、始め金剛寺に住し寶曆十一年寶生院に轉ず、明和元年甲申大鐘を鑄る、是れより先き先住僧龍門末寺十八ヶ寺を大覺寺直末と爲せしより門末之に服せず、茲に以て法門式微に赴くを懼れ三寶に祈願して寢食を忘るゝに至る、明和八年辛卯遂に裁斷を本山に請ふ、本山慰諭するも十八ヶ寺之に應ぜず、因て本山種々懇達せしと雖も其の内十三ヶ寺は頑として肯かず、遂に安永六年丁酉江戸に出て寺社奉行に訴ふるに至る、奉行之を高野學侶番に移す、在番之を檢覈せんと欲するも其の命を拒しかば已むを得ず事件を奉行に奉還す、茲に於て寺社奉行は十三ヶ寺を以て本山及高野學侶在番の命を拒むものとし咎に依て逼塞を命じ事遂に落着す。末寺の葛藤解決せざるもの實に二十七年其の遂に勝果を得たるもの一つは幽祐に依ると雖も抑亦法印の力與て大なるものなくんばあらず、稱して當山第二の中興とす、天明六年二月二十九日寂す、年五十有三。

(小豆郡史)

星 伊六平二日二十日... 華 大ささのふりふり...

石 字は星華、號を五柳と云ふ、西讃某寺住職なり、詩牛の友人にして詩人なり、文化頃の人。...

窓 名は敬尙、號石窓、香川郡宮脇克軍寺十一世僧、本山田郡古高松川井茂一郎四男、詩書畫を能くし、...

石 小豆郡馬宿村の人、本村新田の村、大内郡馬宿村の村、大内郡馬宿村の村、大内郡馬宿村の村、...

窓 名は玄猷、號初め星岳後ち石窓、小豆島池田保安寺住僧、本中桐貞齋の弟、畫山水を能くす、野呂介石の門人、弘化三年九月寂す。...

雪 大内郡馬宿村の人、本村新田の村、大内郡馬宿村の村、大内郡馬宿村の村、大内郡馬宿村の村、...

峯 大内郡馬宿村の人、本村新田の村、大内郡馬宿村の村、大内郡馬宿村の村、大内郡馬宿村の村、...

節 大内郡馬宿村の人、本村新田の村、大内郡馬宿村の村、大内郡馬宿村の村、大内郡馬宿村の村、...

瀬尾 大内郡馬宿村の人、本村新田の村、大内郡馬宿村の村、大内郡馬宿村の村、大内郡馬宿村の村、...

菅原重員(菅公) 大内郡馬宿村の人、本村新田の村、大内郡馬宿村の村、大内郡馬宿村の村、大内郡馬宿村の村、...

菅原重員(菅公) 大内郡馬宿村の人、本村新田の村、大内郡馬宿村の村、大内郡馬宿村の村、大内郡馬宿村の村、...

ス之部

菅原道眞(菅公) (來寓人)

是善の第二子幼名阿呼、幼にして穎悟學を好み博く經史に通ず、文章博士となり仁和五年正月十六日  
 年四十三にして讃岐守となり、寛平二年任滿ちて歸京し遣唐使となりしも唐末戰亂の爲め廢止となり  
 六年を経て昌泰二年右大臣に任ぜられしが繼に三年にして左大臣藤原時平に讒せられて、延喜元年正  
 月俄に太宰權帥に貶せられ同三年二月配所に薨す、享年五十九。安樂寺に葬る、後ち正一位太政大臣  
 を贈り、天曆中祠を北野に建て靈を祀りて天滿天神と稱す、著す所菅家文章、菅家詩集、新撰萬葉集  
 類聚國史等あり。

菅公の讃岐に於ける任期は僅かに五ヶ年なりしも、其間に政治上及び教育上に就きての事蹟は多大な  
 るものありて國民今に到る迄其徳を敬慕し、公を祭らるゝ其祠は國中殆んど百以上もあるならんが其  
 中にて重なるものは高松市の華下天滿宮、中野天滿宮、瀧宮天神社等にて皆何れも由緒あるものなり  
 而して其讃岐に來られし經路に付ては左の如くである。

仁和二年三月末頃に海路浪華より舟出して四月初旬に庵治まで來られしも風波の爲め三日間同地に  
 舟を停め、而して笑原莊東濱港に着され上陸されしも適當の旅舎なかりしを以て長命寺即ち今の片  
 原町の天神社に宿泊され、同年四月七日に瀧宮の宮府に入られたり、翌三年休暇を乞ひ上京し同四年

三月二十六日再び讃岐に歸り是より寛平二年迄前後五ヶ年間國司として政治教育に盡くされたり  
 一、城山に雨を祈る、同四年頃より降雨なく國民困難其極に達せしを以て公は同四年五月六日齋戒沐  
 浴して、綾歌郡府中村にある城山神社に雨を祈られしに天忽ち曇り沛然として降雨あり、農民皆な  
 蘇生せり。

一、國學の再興、國學は奈良時代の始め既に衰へたるが公の讃岐に來らるゝや直ちに國學を再興し、  
 官舎の北方松崎に孔子の廟を建て春秋二季に釋奠を行はれたり。

一、菅公の左遷、寛平二年春任滿ちて歸京され、後ち五年を経て遣唐使に任ぜられしも當時支那は  
 唐末戰亂の爲め赴任廢止となれり、後ち六年を経て右大臣に任ぜられたが左大臣藤原時平の讒言に  
 より、延喜元年正月二十五日太宰權帥に貶謫せられ、二月二日海路筑前に向はれ途中其乗船香川郡  
 下笠居村牛鼻浦に碇泊されし事三日、舊臣平賀雅俱、秦久利及龍燈院空澄、香西漁人平賀某等之を  
 聞き謁見を請ひしも附添の官吏許さざりしを以て菅公亦別を惜しみ、自ら肖像を畫がき秦久利及平  
 賀某に與へられしと云ふ。

讃岐に於て菅公の教を受け恩寵を蒙りしものは左の如しと云ふ。  
 香川郡の秦久利 三豊郡觀音寺町の日儀 大川郡寶藏院の明印法師  
 高松市内長命寺(今の片原町華下天神社)僧圭 綾歌郡瀧宮の空澄

諏訪 五郎光秀

正曆五年南海賊起る、五郎、平惟時に従ひ賊を征し、香川郡河邊に止る、大治中に及び諏訪少目光親

諏訪神を奉迎し之を祀る天永年中諏訪寺を建て、諏訪神社の祭を主らしむと云ふ。附記 平惟時は惟將(鎮守府將軍)貞盛の次男、從五位上肥後守北條氏の元祖にして、天文四年四月卒す。

諏訪 又右衛門

五郎の末裔にして香西氏の部將なり、天正十年八月五日香西伊勢馬場合戦に参加し奮闘せり。

陶 丹後守義清

阿野郡陶村指月所城の城主なり。(参照) 指月所城、陶村大宮前にあり、相傳ふ陶丹後守茂清之に居る、是れ上古陶村の領主也。

駿河權守高階保遠

鹽飽本島東山城の城主なり、城の位置は本島の東北端東山の中央にありし、鎌倉時代に鹽飽地頭駿河權頭高階保遠の居城たりしが天正の頃に至りては代官福田又次郎是に居たるが如し、保遠は熱烈なる法然上人の崇拜家たりしなり。

末石 五郎兵衛

五郎兵衛は香川郡太田村伏石の城主にして香西氏の部將なり(佐藤掃部が親)天正十五年頃生駒家に

召出され、東讃の郡司となる。

住 吉 廣 夏

(鶴洲を見られよ)

數 越 養 三

通稱初め七内後ち彌次右衛門、致仕後養三といふ、高松藩士、詩歌を能くす、明治の初め歿す、年八十餘。

末 峰 道 言

名は道言、通稱嘉市郎、香川郡三人、歌を能くす、寛政元年西行六百年追善集に二十三首入る。

末 峰 高 恒

名は高恒、文化頃東讃の人なり、歌を能くす。

杉 原 玄 立

名は玄、號玄々堂、高松の醫にして詩文を能くす、寛政十一年此人竹石の畫竹を唐館に持行き、清人に示し、に彼賞觀せし由記して、末に七十老拙玄々叟と歎す、筆山集に玄々圃看花詩あり。

杉山正之

名は正之、高松の人、明治初年頃、詩を能くす、春曉、睡味愈濃懶思纏。東望旭日竹陰連。無端芳夢被驚攪。失却池塘詩半聯。

杉野次義

名は次義、通稱喜傳次、高松藩士、歌を三冬に學ぶ、西濱眺望、白浪のよりきては又港風吹くに任せて出る百舟。嘉永頃の人なり。

杉野次定

名は次定、通稱六郎、高松藩士、芝山に學んで書を能くす、寛政六年正月二十日歿す、年六十九。小國牛山の墓は其書なり。

杉野栗岳

名は次蕃、諱は清保、號栗岳、九郎左衛門と稱す、高松藩士、勤の餘暇南湖に學んで書を能くす、文久二年十月九日歿す、年六十六。

杉野克己

名は克己、通稱長之助、高松藩士、俳を能くす、號滴翠園夏稚、明治四十四年四月歿す、年六十七。

小原女の荷折添へて花の枝

諏訪種義

名は種義、通稱甚兵衛又吉左衛門、高松藩士、本姓上原、國學に通じ歌を能くす、木村重成、返さじと益荒武男が引弓の思ひ放ちて出て行く身か。曉子規、さらでも曉起は露けきに憐をそへて鳴く子規。是大海三冬二人判二十番歌合にあり、天保十五年十月二十八日歿す。

鈴木善兵衛

松平節公の時代に鈴木善兵衛といへる郡奉行あり、(致仕して常賢と號す、常賢は英公に従ひ下館より參れる人也) 循吏の聞へあり、ある時大檢見の後ち兩郡奉行御前へ出て年の豊凶を申上げるに、一人は殊の外豊年なりといふ、善兵衛は豊年にあらずといふ、其故をとへば凡貧民は蕎麥大根を食と致し候然るに當年蕎麥大根皆不熟にて貧民殊に難儀仕候得ば豊年とは申がたしと、常賢は土の理にくはしき人にて當國上田、中田、下田、下々田の分れ並に免定めは多く常賢のせられしとなり、且つ節公の時多く新田を開きし人也。(藍窓茶店)

鈴木義績

高松の人、和歌を能くす、嘉永年頃の人、讃岐名勝圖會に歌數首のせたり。



高橋柳泉、青柳のかけをながるゝ石清水むすぶ袂のいともしきせきなり。

### 鈴木蕃利

通稱直八、高松藩參政となる。致仕して直彌と稱す。鈴木勇の父なり。和歌を能くす。明治十六年五月九日歿す。年七十四。  
鈴木資深、高松藩士、中村尚輔に學び歌を能くす。明治二十五年頃歿す。  
鈴木熊泉、高松藩士、村尾石溪の弟。天保弘化頃の人なり。畫を能くす。  
鈴木鹿泉、高松藩士、中村尚輔に學び歌を能くす。明治二十五年頃歿す。  
鈴木益枝、高松藩士、中村尚輔に學び歌を能くす。明治二十五年頃歿す。  
鈴木熊泉、高松藩士、村尾石溪の弟。天保弘化頃の人なり。畫を能くす。  
鈴木鹿泉、高松藩士、中村尚輔に學び歌を能くす。明治二十五年頃歿す。  
鈴木益枝、高松藩士、中村尚輔に學び歌を能くす。明治二十五年頃歿す。

### 鈴木益枝

名は益枝、高松藩士、中村尚輔に學び歌を能くす。明治二十五年頃歿す。  
窓月、吳竹の葉末の露に影とめてかぜにふき入る窓の月かな。  
鈴木熊泉、高松藩士、村尾石溪の弟。天保弘化頃の人なり。畫を能くす。  
鈴木鹿泉、高松藩士、中村尚輔に學び歌を能くす。明治二十五年頃歿す。  
鈴木益枝、高松藩士、中村尚輔に學び歌を能くす。明治二十五年頃歿す。

### 鈴木熊泉

通稱茂左衛門、號熊泉、村尾石溪の弟。天保弘化頃の人なり。畫を能くす。

鈴木鹿泉、高松藩士、中村尚輔に學び歌を能くす。明治二十五年頃歿す。

名は元鳳、號鹿泉、高松の人。詩を能くす。采風集に姓鈴木とあるは此の人ならん。湖泊、湖山霜冷斷猿愁。落木雲迷古渡頭。一夜蓬窓驛客淚。併成秋雨枕邊流。

### 鈴木三橋

名は詔、字は九成、通稱理兵衛、號梅顛又三橋、高松の人。詩書畫を能くす又鑑識あり、竹石と交はる。文政八年八月歿す。年五十八。畫譜に出づ。記す所上洛日記あり。

### 鈴木青玉

名は美奈、號を青玉、高松の人。伏石屋常三郎の妻、春木南湖に學び花鳥を畫く、最も梅花に妙なり。安政四年正月歿す。年七十八。

### 鈴木義方

名は義方、通稱辰之助、東洋の父なり。歌を能くす。

### 鈴木東洋

名は義和、字は子幹、通稱傳五郎、號東洋又白雲洞、義方の子。畫を愛山に學び墨竹を能くす。初期二期三期四期の貴族院議員たり。明治四十三年十一月歿す。年五十四。

鈴木梅堤

高松市南新町の人、通稱種造、故鈴木東洋翁の義弟として二代目鈴木を襲ぐ、壯年時より風流を好み茶道にいそしみ、又梅堤と號して書を能くせり、大正十五年十二月十三日歿す、年七十二。

燧

山

俗姓大岡、名は篤雄、號燧山又獅岳、又六處隱士又無二庵、晩年に燧翁又如翁と號す、寒川郡末村燧山僧、書畫歌狂歌を能くす、明治十七年九月寂す、年七十二。

穂

屋

高松湊町、俗稱西原屋利八、嘉永頃の俳人、川筋へ日のすぢかふて草もみち

瑞

鼎

號瑞鼎、文化頃東讚の人にして、詩を能くす。

醉

應

太山堂と號す、丸龜の俳人なり。

隨

鳳

仁尾の俳人、五徳庵と號す、通稱を鳥山爲右衛門と稱ふ。

鈴木幾次郎

東京専門學校を卒業す、香川銀行頭取外二會社重役、曩に高松市長の職にありたり、高松市古馬場町二四に現住す。

杉山利一

號は乾齋、高松市南新町に現住す、書畫其他和洋紙杉山老舗の若主人なり、親父を半五郎と稱ふ、嘗て市會議員に選ばる、同氏は高松商業學校を卒業し、氏も亦市會議員に當選し、若き時より書畫に熱心、書道は當地の三野柿堂先生に學び、書道を東京笠原愷泉先生に受く、孰れもその堂に入る。

附 録

イ 之 部

今里游玄師

佛敎界の巨擘本願寺の元老にして、坂出町敎專寺住職今里游玄師は昭和八年三月十一日逝去され、享年七十四歳。人も知る博學多才正義の人、三十餘年の衆會議長、香川縣佛敎會長、綾歌郡佛敎會長、丸龜敬愛高等女學校々主兼校長、讃岐修濟會理事長、高松敬愛幼稚園長、かつては本願寺の執行長として飛ぶ鳥落す勢力を有し宗教家以外の人よりは師の宗教家ならざれば香川縣が生んだ最初の總理ならんものと惜む人あり。然し乍ら國家奉公は只々政治家の専有ならず、敎化の實成り、名を遂げし師は誠に國家有爲の大人物であつた。而して時あたかも本願寺にあつては、新法主牙出度き傳燈法要の折柄として師の喪を發せなかつた。

入 谷 數 太

號は香涯、高松市三番丁の人なり、年六十七才。渡邊澄齋の塾に入る、漢籍を學び傍ら野田藻浦に就き書道を修め、後ち赤松園久保轟谷を師とし漢詩を學び書は本邦諸大家の墨蹟及び支那古法帖に就

き専ら研鑽す、子弟多く香涯會の設立をみる斯界の第一人者なり。其の著書に「香涯會の成立と其の意義」等あり。其の著書に「香涯會の成立と其の意義」等あり。其の著書に「香涯會の成立と其の意義」等あり。

今泉八太夫

高松藩最初の游泳師範役たり、寛永二十年頃水府流泳術十二ヶ條目錄を作る。

今 泉 盛 房

通稱信藏、藩種田流槍術師役、今泉家初代文政二年閏四月致仕、墓は松岩寺にあり。

石 井 清 次

號は磐堂、高松市北龜井町の人にして、年五十五才なり。南宗齋を笠原愷泉先生に學び、若年彫刻を父に習ひ、後ち自ら象谷以來の諸彫刻を研究し、斯業に就事する事多年能く讃岐彫刻に精通し優秀なる作品を製作す、世間已に定評有り多くの門生を出す。

入 谷 昇

香川郡弦打村郷東の出身にして目下東京市外阿佐ヶ谷六八七に住す、年四十六才なり。牙彫刻を能くす、師は石川光明先生に師事す、東京美術學校彫刻科(牙彫部)を卒業す、後ち尙研鑽怠らず亦陶器に興味を有し遂に意を決して東京の板谷波山氏に就て現に斯術研究中なり、父は高松にありて書家香涯

結なり。伊賀小四郎

伊賀小四郎

綾歌郡畑田村(今の昭和村大字畑田)の人、明治三十年畑田小學校に奉職して以來文字通り三十年一日の如く初等教育に従事し、大正十一年山内小學校々長に轉じ、十四年縣實業補習學校教員養成所主事の必要を痛感し、縣下に率先して實業補習學校を興し、献身的教育のかたはら世の毀譽褒貶に耳を藉さずして農業科を専攻して中等教員の資格を得た、實業教員養成所主事を命ぜられるや、講演に、講義に、醇厚なる農村青年の思想を指導し、常に自ら敏をとつて勤勞の範を示した、畑田の出身者はもとより實業教員養成所の卒業生は勤勉において、思想穩健において常に至るところで信賴されるも先生の感化の然らしむるところである。銅像は教へ子浮田種市氏ら發起人となり縣下教育界の有力者一人残らず後授して功績顯彰會をつくり、昭和八年六月十一日晴れの除幕式を見たのである。氏は現在縣學務課にあつて實業教育主事をしてをられる。

磯井雪一枝

號は如眞、高松市西濱新町四本木に現住す、年五十才なり。流派漆工、明治三十六年香川縣立工藝學校卒業後自營工場等にて研鑽せり、現在母校に教鞭をとり後進者の指導にいそしむ、其餘暇を割き帝展出品入選又商工省展に出品優賞を得る、其他各博覽會、展覽會等に出品授賞する事數十回の多きに

及び我縣下漆藝界の中堅たり。ハ之部

林 政 薫

號は竹齋、高松市三番丁二十一番地の出身にして、現住所に綾歌郡王越村大字木澤五六六なり。年五十四才。明治四十年より俳句、書道、篆刻等を梨岡素岳、石井雙石、奥村竹亭諸先生に就て研究し、松平家に勤務す。

馬場藤三郎

號は景泉、木田郡西植田村の出身なり、現に高松市内に住す、年三十七才。大正元年今尾景年先生に師事し以後十三年間同邸内に修業し作品多し。

俳諧獨吟中に見ゆるもの

一 列 正月は正月にして暮しけり  
存 候 五形花や野にあるうちの美しさ